
千草の花

小夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千草の花

【Nコード】

N4987B

【作者名】

小夜

【あらすじ】

中学三年生。受験生になって半年がたとうとしていた秋のある日、ただ街中を歩いていたはずの春菜は気づけば、見た事もない草原にいた。シリ阿斯和風ファンタジー、プラス恋愛（予定）。千草の花、宜しければご覧ください。ただいま、修正中です。大筋に変更はありませんが、細かな服飾など時代を踏まえた変更があります。10話まで修正完了いたしました。【7月30日37話更新しました！】

1、序章

為末春菜、中学3年生。

いわゆる受験戦争真っ只中というやつだ。

もちろん、好きでやっているわけなどなく、高校位出てなきゃ、つて言うのが一般常識。

だから、今こうして春菜が塾に行かなきゃいけないのも、仕方のない事と理解していた。

受験生の定めと言うやつだ。

春菜は、自分の事ながら、頭は悪くないと思っていた。

別に勉強は好きではなく、特に頑張ってるわけでもないが、授業中に眠り込まずに、話を聞いてれば、だいたい頭に入る。

だから、高校も教師に進められるまま、周囲の期待を裏切らないように、特に行きたい所もなかったので、この辺りでは一番の進学校を進路調査では第一希望にした。

さすがに、受験では今までのように要領が良いだけでは通じない事も分かっていたから、好きでもない勉強を最近はやり始めた。

それでも周りよりはずつとのんびりしている事は自覚していたが、やる気が出ないのだから仕方がない、と春菜は一人いつも思っていた。

短調な、何もない生活がつまらなかった。

変化を求めているんじゃない、と思う。

きっと、春菜自身気付かないまま何か真剣になれるものを求めているたのだろう。

とにかく、そんな受験勉強に明け暮れようかと重い腰を上げ始めた、中学3年生の秋のある日、それは起こった。

2、始まり

ぼん、とコルク栓の抜けるような小気味良い音がしたかと思うと、次の瞬間、体が浮き上がるような、引つ張られるような奇妙な感覚に襲われた。

下校途中、学校から塾までの僅かな距離を歩いていた春菜は、感じた事もない奇妙な感覚に、ただただ驚くしかなかった。

浮遊感の次には、周囲の景色が霞んでいく。

徐々に白くなり、真っ白な煙のようなものばかりが周囲に漂っている。

そして、これ以上濃くならないほど真っ白になると、今度は段々と靄が晴れるように、少しずつ色を取り戻し始めた。

けれど、やっと再び見えてきた景色は、見慣れたコンクリートの道や、無機質な町並みなんかじゃなく、見た事もないような、ただっ広い野原。

本当にここは日本？と、疑いたくなるほど広い。

日本は山地ばかりで、こんな草原はないはずだもの、とどこか冷静な自分が言っつのを聞きながら、状況が分からずただただ呆然と春菜は立っていた。

「おい、お前」

失礼極まりない呼びかけが響いたかと思うと、突然春菜は肩をつかまれた。

「ちよつと！何よ！」

思わず口をついてでた言葉に春菜は、驚いてその先に続く言葉を見失ってしまった。

春菜は、見ず知らずの人間に、少し理不尽な態度をとられた位で、声を荒げるような少女ではなかった。

特に大人しい方ではなかったが、それでも、それなりに礼節はわきまえているつもりだった。

「何だ、やけに扱いづらそうなのが出て来たもんだな」

呆れたような口調で答えたのは、奇妙な身なりをした男だった。

いや、奇妙ではない。

ただ、場違いなだけだ。

今のご時世に、時代劇にでも出てきそうな着物を、それも見事に着こなして違和感なく、野原に堂々と立っている輩がどこにいうのだろうか。

春菜とて、自分の目で見ていながら信じられないとしか言いようがなかった。

普段春菜が、着物として認識しているそれよりは、どちらかと言えば、中国風な印象を受けるが、少しばかり作りが簡素であり、格式ばった感じがしない。

上衣は着物のようだが、袖元にはゆるりとしたゆとりはなく、筒状だった。

その下に、ゆつたりとしたズボンのような物を穿いている。

袴と言うには少し違和感のあるものだった。

髪は、普通より長い。

肩の下あたりまであるだろうか。

それを適当に一つに緩く纏めた姿は、粗野な印象を与えるが、それでも妙にその男には似合っていて、その上ご丁寧に脇差まで刺している。

「何だ。お前ご主人様に挨拶もなしか？」

黙りこくって、じろじろと男を観察してばかりいる春菜に痺れを切らしたのか、平然と男は仰天するような事を言っただけだ。

「……ご主人様？誰が？」

最近流行りのメイド喫茶でしか聞かないような単語に、春菜は渋面を作る。

こんな暴挙に出られれば、この際礼儀だなんだなどと言ってはいられない。

「俺に決まってるだろ。お前、俺に呼び出された式の癖にやけに反

抗的な」

「式？……式神？あたしが？」

一瞬数学の数式が頭を過ぎったが、どこかで聞いた陰陽師の操るという式神の存在を思い出し、春菜は素っ頓狂な声をあげた。

「お前、出来損ないか？」

呆れたような声音で言われ、春菜は更に表情を険しくした。

「何よ、いきなり出来損ないって！だいたいあんた誰よ！あたし塾に行く途中だったんだけど！あんた誘拐犯？身代金要求でもする気なの？残念でした！あたしの家貧乏だし、お父さんただのサラリーマンだから、大してお給料だって良くないし、お金なんてちよつとしかないんだから！それにね、あたしだって、中学3年生で、受験直前なの！早く帰してよ！ここどこ？もう、どこでも良いから、車かバスか電車が通つてるところまで連れてって！そしたらあたし一人で帰れるんだから！」

急に、どうしようもない怒りが込み上げてきて、春菜は一息に捲くし立てた。

本当にこの男が誘拐犯なら、こんなにはつきりと感情のままに怒りをぶつきたりなど出来ないのだろうが、この男はそれを許してしまうような、どこか不思議な雰囲気を持ち主だった。

突然怒り出した春菜に、今度は男が呆氣にとられたような顔で、春菜を見つめている。

「女の癖に恥知らずな奴だな、お前」

やっと、口を開いたと思ったら、そんな更に春菜を怒らせるような一言を男は吐いた。

いや、特に悪気はなかったのだろう。

その証拠に、男は面白がっているような調子で、からかうような笑みすら浮かべていたのだが、そんな事を気にしている余裕など、今の春菜にはなかった。

「何それ！そう言うの、男女差別って言うんだから！あんたこそ、男だからって何様のつもり！？だいたい良い年したおじさんの癖に、

そっちこそ恥知らずじゃない！」

最後に春菜は男を一睨みすると、すぐに踵を返すと適当な方向に見当をつけて歩き出した。

ここがどこかは知らないが、平地を歩いていれば、いつかは人のいる所にたどり着くだろう、と簡単に考えていたのだ。

冷静に考えれば、踏みとどまったのだろうが、頭に血が昇った状態では、正常な判断力すら奪われていく。

「おい。そっちは止めとけ。お前一人じゃ人里になんか着けねえぞー」

いらいらとする程余裕の態度で、男は春菜の後を悠然と着いてくる。「何よ！勝手な事ばかり……」

怒りが少し引き、冷静になると、今度は不安ばかりが膨らみ始めた。

ここは、どこで、本当に歩いてどこにも着けないんじゃないか、そもそも、後ろにこんなに怪しげな男を連れて、誰も人の目のない場所を歩くのは危険じゃないのか、考えれば考える程、思考は混乱するばかりだ。

その不安が、春菜の言葉から勢いを削ぎ、勢い良く出て来た声はじよじよに尻すばみに小さくなっていった。

考えてみたら、普通でない事は分かりきっていた。

急に、何もしていないのに、見た事も来た事もない場所に一瞬で人が移動するはずがない。

ただ塾に行こうと道を歩いていたはずの女の子が、瞬間移動なんて、冗談じゃない。

得体の知れない不安がだんだんと広がって行く。

「おい、良いから、止まれ。そっちに行ってもどうしようもないぞ」
広がった不安によって、逆に冷静になった春菜は仕方なく、足を止めた。

「よし。始めから、そうやっておとなしくしてれば良かったんだ」
満足そうに言う男を睨み付けてから、春菜は口を開いた。

「あのね、あたしはちゃんと自分の置かれた状況を知る必要があるから止まったの。おじさんの言いなりになった訳じゃないから勘違いしないでよね」

はいはい、と大袈裟に頷く男をもう一睨みすると、春菜はその場に腰を下ろした。

「ここどこ？何であたしがここにいるか、あなた知ってるの？それと、さつき、式がどうか言ってたけど、あたし、あなたと同じでちゃんと今まで人間として生きてきたんだから、変な勘違いしないでよね」

「人間？そんなはずは…俺はちゃんと式を呼び出したはずだ。現に術を行った結果お前が現われた。なら、お前は式のはずだ」

「術がどうかは知らないけど、現にその迷惑を被って私はここにいるの。あたしはあなたが何と言おうと人間だし、状況が全く分かってないの。だからつべこべ言わずにさっさと説明して」

春菜の剣幕に気圧されるように、男が渋々と言った表情で頷いた。

「ここは吉野だ」

「吉野？吉野の里…奈良県？」

確か国語の授業が何かで古典に出て来た。

そんな事を思い出しながら、春菜は奈良県の南に確か位置するその場所を思い浮かべた。

しかし、不安は更に膨らむばかりだ。

春菜はついさつきまで東京に居たはずなのだ。

どうして、今奈良県にいる事が出来るのだ。

「ならけん？何だ、それは」

とぼけないで、と言いかけるが、男の表情に、春菜はその言葉を飲み込んだ。

とりあえず、今は状況を知るのが先だ、と自分を落ち着かせ、質問に専念しようと、一度息を整える。

「地名よ。で、何であたしはここにいるの？あなたの話し聞いていると、式神を呼び出す術のせい？」

「さあな。俺は式を呼び出すための術を施しただけだ。そしたら、お前が出てきたんだ。それ以上は知らない」

結局答えになつていないと溜息をつく。

「じゃあ、何であなたそんな格好してるの？陰陽師だから、とか言わないでよね」

「そんな格好？何故と聞かれても、裸でいる訳にはいかんだろ。それと、陰陽師とは何だ？」

先ほどから、思考の隅に引っかかっていた思いが、急速に現実味を帯びてきたような気がして、春菜は小さく身震いした。

現実のはずがない。

そう、起こり得るはずがない。

小説の読みすぎだ。

そう自分自身を落ち着かせるが、どうしても変な方向にばかり思考は向かう。

「……今、西暦何年？」

「は？せいれきなんねん？」

その返答に、春菜は頭を抱える。

「じゃあ、あなた車って知ってる？」

「おう、当たり前だろ」

「……牛車？」

春菜の言葉に、当たり前だと言うように、男は大きく頷いた。

「さつきから、お前は何が言いたいんだ」

男の呆れたような声には答えず、春菜は、その場に大の字に寝転んだ。

「これは夢だ、って言いたいのか！何であたし吉野何かにいるのか？意味わかんないんだけど。だいたい、ここ何時代よ！平安？奈良？鎌倉？江戸？室町？戦国時代？車って聞いて牛車を答える現代人がどこにいるって言うのよ！あなた、あたしをからかっているのか？ここはほんとに21世紀じゃないのか？」

空に向かって、思い切り胸の内を吐き出す。

恐ろしい程に青く澄んだ空だった。

季節は同じ秋なのかもしれない。

秋特有の高い抜けるような青空に、春菜はぼんやりとそんな事を思った。

「お前、大丈夫か？」

「だいたい、あんたもあんたよ。何で昔の人なのに、現代の喋り方なの？余計混乱するじゃん！古代人なら古代人らしく、『我、式呼び出したらし、術をなさんとす』とかなんとか古典らしい喋り方しなさいよ！」

半ば八つ当たりのような春菜の言い分に、男は黙り込む。

反論しようにも、おそらく春菜の言っている事の半分も理解していなかったのだろう。

「……ねえ、あたしどうしたら良いの？これ、夢だよね？本当にこんな事起こるはずないもん。ねえ、夢でしょ？」

言いたい事を、全て吐き出して、落ち着いてから、春菜はようやくそう呟いた。

癡癡のような怒りが収まり、自分の状況をある程度認識したは良いが、それは春菜を更に不安にさせた。

「あたし、昔の時代に来ちゃったんでしょ？信じらんない。やつぱり夢よね？じゃなきゃ有りえないもん。あたし、ちゃんと帰れるの？…夢から覚めれば、ちゃんと家のベッドに寝てるんだよね？」

うわ言のように繰り返す。

そう、夢でなければいけないのだ。

現実のほすはないのだから。

3、色褪せた世界

暫く黙ったまま、寝転んでいた春菜は、ふいに勢いをつけて飛び起きた。

「おい、それだけ元気があるなら、行くぞ」

飛び起きた春菜を見て、男が顔を顰めて言った。

「あれ？あたしについて行って良いの？」

「…嫌ならついてこなくて良い」

不機嫌そうなまま言うのと歩き出した男に、慌てて春菜はついて行く。勝手の知らない世界に、一人放り出されてはたまったものではない。

「ねえ、おじさん」

声をかけた途端に、男が振り向いた。

驚いて一歩下がる春菜に苦笑してから、男は少し表情を和らげた。

「お前、さっきから俺をおじさん呼ばわりしてるが、年はたいして変わらないと思うぞ」

言われてみれば、確かに男は若かった。

雰囲気と、言動から、どこか年の離れた印象を受けていたのだが、よくよく見てみれば、十代の後半、おそらく春菜よりいくつか年上位の差しかないだろう。

「うっそ、本当だ」

驚く春菜に、初めて笑顔らしい表情を男は浮かべた。

その笑顔に、春菜はようやく今までの悪い印象がわずかに薄らぐのを感じた。

もしかしたら、悪い人ではないのかもしれない。

「あたし、春菜って言うの。為末春菜……どうしたの？」

名乗った途端に、ぽかんと呆けたようにただ春菜を見る男に、首を傾げる。

「お前、貴族なのか？」

「え？」

言われた意味を理解できずに、春菜は再び首を傾げた。

「氏を持つてるのか？」

もう一度言葉をかえて尋ねられ、ようやく春菜は男の言わんとする所を理解した。

「あ、そう言う事。あたしは、貴族なんかじゃないよ。あたしの世界では、皆苗字を持つてるの。持てない人は誰もいないし、貴族も平民も農民も何も、身分なんかないよ」

春菜の説明に、男は更に目を丸くする。

「お前、違う世から来たのか？」

「わかんない。あたしは、多分過去に来ちゃったんだと思ってるけど……」

「未来から来たのか？」

心底驚いたように言う男に、笑いをこらえながら、春菜は頷く。

「うん、多分ね」

「じゃあ、これから先、身分がなくなるのか？これから何が起るかわかるのか？」

「うーん、ここが、本当に私のいた所の過去の世界なら、いつか身分制度はなくなるよ。ずっとずっと遠い未来の話しだけど。何が起るかはわからないと思う。今がいつの時代か分からないし、本当に大事件じゃないと、歴史には残らないから。それに、過去だと思ってるけど、ここは過去じゃないかもしれないし……。それより、あなた名前は何て言うの？」

足元に転がっていた石を蹴飛ばして、春菜はそう尋ねた。

ころころと転がって、止まった石に追いつくと、もう一度それを蹴飛ばした。

「俺は、時彦だ」

時彦。

名前だけは、いかにも昔の人って感じなのね、と心の内で呟きながら、春菜はもう一度石を蹴った。

ふと視線を上げると、胸を空くような青空に視線が行き当たった。

辺りは、見渡す限りの草原。

こんなに人工物のない場所に、春菜はたった事が今まで一度もなかった。

さやさやと風にゆられる草の音は耳に心地よく、足の裏に感じるアスファルトよりも軟らかい、幾分ひんやりと湿った土の感触も新鮮で、気持ちの悪いものではなかった。

空気も、心なしか軽く、全てがアスファルトに囲われた東京より生き生きとして見えた。

肌に命の躍動が、ぴりぴりと感じられるような気さえする。

思い返して見ると、たった一時間前に春菜がいたはずの世界が色あせて感じられ、春菜は溜息をついた。

灰色の霞がかかったように、命の輝きの薄い世界だった。

そう感じられてしまうのが、無性にやる瀬なかった。

今まで春菜は、何と狭く色あせた世界に生きていたのだろう。

「やけに静かだな。どうかしたのか？」

時彦の声に、急に現実に取り戻され、春菜は顔を上げた。

何、と目で問いかけると、時彦は同じ言葉をもう一度繰り返した。

「別に……」

胸に迫る思いを、言葉にすると、どこかに消え去ってしまいそうな気がして、春菜は何も言わずに首を横に振った。

それに、怪訝そうな顔をしてから、時彦は、前に向き直ると、もう目の前に迫っていた、集落を指差した。

「俺の荷物が、あそこの村においてあるから、取ってくる。ここで、ちよつと待つてろよ。すぐ戻ってくる」

「何で？ あたしも行っちゃ駄目なの？」

待つてると言う言葉に、置いていかれるのではないか、とかすかに不安になり、春菜はそう問い返した。

すると、呆れたような視線が時彦からは返って来た。

「お前な、そんな格好で人のいるとこに何かいけねえだろ」

「そんな格好？」

更に分ならず、首を傾げると、時彦は溜息をつく。

「お前の着てる物は、奇妙すぎて、そんなんでも人前に出てみる笑いもんだぞ。だいたい、良い年した娘が足を出すな。慎みのない。目の毒だ。お前だからないだろうけどな、良くない気を起こす奴だっているぞ」

時彦の言っている意味を理解して、春菜は、頬が熱くなるのを感じた。

黙り込んだ春菜を見て、かすかに笑って、時彦は春菜の頭に手を置いた。

「心配すんな。置いてきやしねえから。お前の着るもんもつてすぐ戻ってくるから、人に会わねえようにここらへんで待ってる。良いな？」

心の内を見透かされたようで、余計に気恥ずかしくなりながら、春菜は黙って頷いた。

4、時代の住人

時彦は、言葉どおりに、本当にすぐに帰ってきた。

やけに大きな荷物を背中に背負って、手には、ふろしきのような物を一抱え持っている。

その姿に、ほつとするのを感じながら、春菜は時彦が歩いてこちらに向かってくるのを見ていた。

「ほら」

言って時彦が無造作に差し出した風呂敷包みを受け取る。

開けてみると、中には女物の衣装一式が入っていた。

春菜の記憶にある、着物よりは、浴衣に近いような、簡略化された普段着用の着物といった赴きのものと、現代風に言えば、フレアスカートのようなものだった。

使われている色味は多くなく、くすんだ茶や黄、白などの色味をとり合わせたものだった。

ふと時彦の着る物に目を移すと、時彦は黒と白のみの質素な色合いの服装だった。

「早くそこらへんでこれに着替えてこい」

「え！一人で？」

春菜の言葉に、時彦は呆れたように春菜を見た。

「俺に手伝えってか？」

それに、春菜は顔を赤くして勢いよく首を横に振る。

「でもあたし、着物の着方なんか知らない……」

着物ならまだしも、さらに用途不明のスカートまでついている。

今度は、時彦は困ったように、頭を掻いた。

「着物なんて滅多に着ないし……」

春菜は、今着ている制服のブレザーを見下ろしながら、言った。
見慣れたブレザーだ。

一番最初に、このグレーのブレザーに袖を通し、ブルーのリボン

つけて、登校した時には、胸が高まったものだった。

周囲の中学校の中では一番可愛い制服だと、春菜の中学校での受けは良かった。

春菜も、青いリボンと、同じく青のチェックのスカートは気に入っていた。

しかしそれも、三年も着続けていれば、何も感じないどころか、日々目にするこの制服すら野暮ったいものに思えてきていた。

そんな事を思いながら、浴衣だって一人で着れないのに、と風呂敷を見る。

「参ったな……」

ぶつぶつ呟きながら、時彦は、春菜に一枚つつ一通りの着方を説明していく。

男物と同じく、上衣は袍ほうと言う名らしい。

春菜の知る着物と同じように身につけ、その下に時彦曰く裳もというスカートのようなものをまく。

女物の着物の着方は、あまり詳しく知らないが、と言いながら、それでも春菜にとってはありがたい知識だった。

時彦から教えられた事を、一つづつ確認しながら、春菜は一枚づつ着物を着ていく。

紐の締め具合が、春菜良く分からなく、苦労したが、それ以上に代替わりらしい長紐を一人で巻く事に、苦戦し、とうとう諦めて春菜は長紐を手を持ったまま時彦の所へと戻った。

「春菜、お前な……」

長紐を片手に現れた春菜に、時彦は言葉を失ったようだったが、それでも渋々ながら長紐を巻く事を手伝ってくれた。

「よし、少しは見れるようになったな」

大真面目に言う時彦に、春菜は顔を顰めた。

「それと、ほらその変な履物も、脱いで、これ履け」

手渡されたものに、再び春菜は固まった。

草履なら、履くだけですむが、草鞋の履き方など、知らなかった。

それどころか、草鞋を目にするのも、手にするのも始めてだったのだ。

「……どうやって履くの？」

時彦に、紐の回し方、結び方を聞きながら、どうにか履き終える。

格好だけは、この時代の住人になったようで、春菜は、ようやく少しは周囲の景色に溶け込めたような気がした。

着物にしる、時彦の持ち物にしる、色合いが、周囲の自然と馴染むのだ。

春菜の制服は、どこか自然の風景とはちぐはぐなようで、違和感があったのだと、脱いだから春菜は実感した。

その制服や靴を、鞆の中にしまい込む。

教科書や、参考書の少ない日で良かったと思いながら、鞆のチャックを閉める。

行くぞ、と言う時彦の声に急かされるように立ち上がると、春菜は時彦について歩き出した。

どこに行くとか、時彦が何をしている人だとか、春菜はそう言った事を全く知らなかったが、そんな事は小さい事に思えるほど、急激な変化をともなった数時間に春菜は混乱していて、とにかく、時彦について行くことしか、考えていなかった。

5、違い

初めて履いた草鞋が、履き心地が良いと思ったのは最初だけだった。初めのうちこそ、畳の上にいるような感触は、足に心地よく、靴を履くよりも、土の感触が良く伝わり歩きやすくもあった。

しかし、一時間もしないうちに、紐が肌に擦れてずきずきと初めは鈍く控え目に、しばらくたてば、鋭い痛みになって、足を一歩踏み出す事に春菜に襲い掛かってきた。

とうとう、痛みに耐え切れなくなって、春菜は前に行く時彦に声をかけた。

どうした、と問いかける時彦に、言おうか言うまいか、最後に逡巡してから、春菜は口を開いた。

「…足、痛い」

まだ、二時間ほどしか歩いていないのに、泣き言を言うのは、負けず嫌いの春菜には、酷く癪なことだった。

何より、旅の足を引っ張って、面倒な奴だと思われるのが嫌だったのだ。

そんな春菜の気持ちを知ってか知らずか、時彦はすぐに春菜の足元にしゃがみ込んだ。

「あー、血が出てるな…」

呟くと、荷物の中から、一枚の布を取り出すと、草鞋の紐と肌の間、挟むと、少しきつめに縛る。

「これで、多分少しはマシになるだろ。お前、草鞋履いた事なかったんだよな。悪かったな、気付かなくて」

「…ごめん」

小さく言つと、ふっと笑う気配がした。

「何だよ、急にしおらしくなって」

行くぞ、と声をかけて歩き出した時彦の歩調は先ほどよりも大分ゆっくりで、春菜は、胸が熱くなるのを感じた。

初めに思ったほど、本当に悪い奴じゃないのかもしれない。

「参ったな……」

そう呟くと、時彦は急に立ち止まった。

「どうかしたの？」

「いや、ちよつと野宿になりそう。俺は良いんだけど、あんた大丈夫か？」

「あたしのせい？」

足が痛いと言ってから、歩調が遅くなっていたのには気付いてもらいた春菜は、小さくそう尋ねた。

「まあ。でも、俺一人なら、わざわざ人里に寄ったりしないからな。別に俺は困らないけどな」

「そう……。あたしは良いよ」

「……ま、野宿は良いんだ。問題は、物の怪だ」
聞きなれない単語に、春菜は首を傾げる。

勿論、意味は分かる。

物の怪、妖怪のようなものだろう。

しかし、実際に真剣に物の怪の心配をする人物になど出会った事がないかった。

「物の怪？……本当に、いるの？」

半信半疑で聞くと、時彦は大真面目に頷いた。

「迷信じゃないの？」

大真面目な時彦に不安を覚えながら、最後の願いを込めて春菜はもう一度尋ねた。

「お前の世界に物の怪はいないのか？」

逆に不思議そうに問われて、春菜は首を傾げた。

「……いない、と思う。いろんな話しは残ってるけど、信じてる人には会った事ないし、見た事もない。……時彦は、会った事あるの？物の怪に……」

「当たり前だろ。俺、物の怪の退治しながら旅してんだし」

その答えに、春菜は全ての動きを止めた。

さすがにこの答えは予想外だった。

あいた口の塞がらない春菜をよそに、時彦はさっさと歩き出す。

「ちよつと待ってよ。物の怪って良く出るの？」

慌てて後を追いつながら、尋ねると時彦はそうでもないよ、とにべもない答えを返す。

「昔は、もっと出たみたいだけど、最近はあるまい。それでも、退治する職業が必要なほどは出るけどね。ま、出たとしても俺がいるんだし、心配ないって」

そう言われたところで、安心できる訳がなかった。

春菜にとって、物の怪とは妖怪変化の類の事であり、話して聞くとおりのものであれば、人間が太刀打ちできるとは到底思えなかった。そんな事を一人心配するうちに、いつの間にか太陽は傾き、辺りは薄暗くなっていた。

森の中にいるために、木々に光を遮断され、余計に周囲は暗い。

その中を時彦は迷いのない足取りで歩いて行く。

春菜には道すらないように思われる森の中を、歩きやすい場所を選んで進んで行く。

時彦によると、前に一度一夜を明かした洞窟が近く of 崖にあるらしい。

暫くすると、急に目の前にそびえるような崖が現れた。

その崖に沿って歩くうちに、時彦はある一箇所を足を止めた。

「ここだ。中は乾いてるし、なかなか過ごしやすいぞ」

言われて覗き込むと、人一人がやっと通れるくらいの亀裂が崖にあった。

どうやら、細長い横穴のようで、狭くはないらしい。

こちらは、現代よりも寒いようだ。

秋にもなると、夜には涼しいを通り越して寒い。

時彦は、歩きながら拾い集めていた薪を、一箇所、無造作に積み

上げると、手際良く火をおこす。

ちかちかと、火花のようなものが飛び、すぐに枯葉に燃え移った。その火を消さないように大きくし、細い小枝から順にくべていく。いつの間に取り出したのか、時彦が手にしている火打石に、春菜は妙な感動を覚えた。

器用なもので、時彦はそれらの動作を、あつと言つ間に終わらせてしまった。

「ねえ、それ火打石？」

春菜の問いに、時彦は頷く。

「もしかして、見た事ないのか？」

春菜に石を手渡ししながら、不思議そうに尋ねる。

「お前ら、一体どうやって火をおこしてたんだ？」

改めて問われて、春菜は返答に窮した。

マッチや、ライターと言つた道具はあるが、実際にどう説明したら良いのだろう。

「…強く擦ると、火が起きるのをうまく使ったり、火打石みたいなのを、燃える液体につけるとか…」とにかく、もっと小さくてすぐ点くような道具があつたの。火打石つて、大変じゃない？」

上手く言えずに言葉を濁す春菜に、時彦は関心したように声をあげた。

「へえ、楽そうだな。ま、これはこれで、慣れれば暗闇でもすぐ火はつくからな。そこまで面倒なものでもないさ」

春菜は、見よう見まねで、枯葉に火をつけようと試みるが、見るのと実際にするのはやはり違う。

時彦の時には、あれ程すぐについた火がいつまでたつてもつかない。幾度か試してから、春菜は諦めて石を時彦に返した。

へたくそだな、と笑う時彦に顔を顰めてから、春菜は時彦が荷物をほどくのを眺めていた。

「腹減つたろ？晩飯だ。さっきの村で、ちょっと飯もらってきたから、今晚はちゃんとした飯だ。作る手間も省けるしな」

言って取り出したのは、それこそ昔話しに出て来たような、笹の葉に包まれたおにぎりだった。

素朴な暖かさを感じながら、不ぞろいなおにぎりを一つ、春菜は手にとった。

米も違うのか、普段食べる米とは、味も見た目も違う。

玄米とも違うように感じる。

焚き方の違いだろうか、と春菜は首を傾げながらも、歩き通して空腹だったお腹には、普段のご飯よりもおいしく感じられる事に驚いていた。

6、朝の光

質素な食事の後、時彦から手渡された一枚の布に包まって、洞窟に入ろうとして、春菜はたと足を止めた。

良く考えれば、今日初めて会ったばかりの人物、それも男と一緒に夜を明かすのだ。

周囲には人もいない。

洞窟は広いとは言え、細長いので、自然に春菜が奥で手前が時彦と言う事になった。

半日を一緒に過ごし、時彦の人と為りは少しは分かったつもりではいるが、そうは言っても半日だ。

完全に信用して良いのかは疑問が残る。

一人逡巡する春菜をよそに、時彦は火の後始末をしている。

その姿を見やって、春菜は小さく溜息をついた。

考えたところでどうしようもないと気付いたからだ。

どうせ逃げ場もない。

それだけではない。

逃げたところで追いつかれるだろうし、時彦の下を離れて生きていく術を春菜は知らなかった。

信じるしかないと腹を括り、春菜は洞窟の奥に腰を下ろした。

出来るだけきつく布を体に巻き、壁にもたれかかる。

背を向けるのは、やはり不安だったので、視線は時彦に向けていた。そんな春菜の様子には気付かない時彦は、焚き火が完全に消えた事を確認し終え、春菜と同じように布を一枚持って、洞窟の中に入ってきた。

そのまま、春菜と洞窟の入り口のちょうど中間にあたる場所に無造作に寝転がる。

春菜には背を向けて、顔は入り口の方を向いている。

「お休み」

一言だけそう言うと、時彦は完全に寝る体勢に入ってしまった。

安心したような、拍子抜けしたような変な感覚に捕らわれながら、春菜もまた横になった。

「…馬鹿みたい」

意識しすぎた自分が少し恥ずかしくなり、小さく呟く。

気が抜けた途端に歩き通しだった疲れが襲ってきて、すぐに瞼が重くなってきた。

「お母さん達心配してるかなあ…」

無意識に呟くと、急にたまらなく寂しくなり、春菜は体を小さく丸めた。

晩ご飯、何だったんだろう、とか今日見たいテレビがあつたのに、とか『今』とはかけ離れたことばかりが頭に浮かんできた。

帰れる保障のない事に、たまらなく心細かったが、それでも睡魔に勝つ事は出来ずに、春菜はすぐに眠り込んでしまった。

早朝特有の、張り詰めたような澄んだ空気の中で、春菜は目を覚ました。

春菜は、朝が弱い事もあり、これ程朝と言うものがすがすがしいものだと感じたのは、久し振りの事だった。

胸いっぱい空気ですいたくなるような何かが、ここの空気には満ちていた。

時彦は既に起き出しているらしく、洞窟の中は、春菜一人だった。

少しの間ぼうつとしてから、春菜はそのそと起き上がると、洞窟の外に出た。

一歩外に出て、春菜は息を呑んだ。

まだ、朝日は上ってはいないようだ。

薄墨を流したような、不思議な灰青色合いの静かな空気に包まれ、森は静まり返っていた。

動物達も、息を潜めてしまったような静けさの中、春菜は、木々の

呼吸が聞こえるような気がした。

森中の木々が深呼吸をしている。

枝を震わせ、朝の空気を取り込み、吐き出す。

不意に、高い鳥の囀りが響いた。

たった一声のそれに、反応したかのように、今まで静まり返っていた鳥達が一斉に囀りだす。

静まり返っていたのが嘘のようだった。

数分の間、鳥達が囀っていたかと思うと、すぐに太陽が上り始めた。薄墨色だった周囲は、すぐに鮮やかな色を見せ始めた。

「…きれい」

思わず呟いて、春菜は、その様子に見入っていた。

気のせいだろうか。

昨日よりも、木々の緑が濃いように思える。

気がつけば、太陽は上りきり、鳥の囀りは収まっていた。

「何してんだ？そんなところで突っ立って」

振り返ると、どこから現れたのか、いつの間にか時彦が立っていた。

「綺麗だな、と思って」

その返答に時彦は軽く首を傾げた。

この風景を見慣れている彼は、特別に美しいと思い、目を奪われる事はないのだろうか、そう思いながら春菜は時彦を見た。

それは、すぐく勿体無い事に思えた。

この風景を、常に見る事が出来ない世界も勿体無いが。

そんな事を考えながら、時彦が、朝ごはんの準備をするのを眺めていた。

手伝おうにも、勝手が分からないので、ぼんやりと眺める事しかできない。

初めは手伝おうとしたのだが、時彦に余計に時間がかかると追い払われてしまったのだ。

昨夜と同じように、時彦は火を起こす。

荷物の中から、袋を取り出し、春菜が起きる前に汲んできていたら

しい水にいれる。

干し飯を水で戻したものに、道すがら摘んでいた山菜と一緒にいれ、粥にしたようなものが朝ごはんだった。

春菜は、初めて口にするものばかりだったが、元来好き嫌いのない性格なのもあり、特に不満も抱かずに食べ終えた。

食べ終えた椀を、簡単に水で流し洗い、その水で火の始末をしている時だった。

突然、この世界にはあまりにも不釣合いな音が響いてきた。

7、過去と未来

「何だ？」

あからさまに驚いた表情の時彦は、周囲に視線を走らせる。

それを横目に、春菜は弾かれたように立ち上がると、洞窟の中へと駆け込む。

電子音は鳴り止まない。

聞き覚えのあるそれは、最近流行った歌。

春菜が、毎朝の目覚まし代わりにかけていた曲だ。

慌てて鞆の中を漁り、底の方に押し込まれていた携帯を取り出した。毎朝寝ぼけ眼で行っていた作業を、冴えた頭で行う。

すぐに春菜の手の中で静かになったそれを、春菜は奇妙な気持ちで見つめた。

「それが音立ててたのか？」

不思議そうな表情で、後ろから覗き込んできた時彦に、はっと我に返り、春菜は黙って頷いた。

「何かの道具か？」

時彦は、見慣れぬ道具にいたく興味を引かれたようだった。

「うん。遠くの人と、会話したり、メール…手紙みたいなを送る道具」

しきりに感心し、時彦は春菜の手の中に納まる携帯を見る。

「何で光ってるんだ？さっきの音はなんだ？」

その調子で質問が続き、春菜は一つ一つ、分かりやすいように答えていく。

当然ながら、携帯は圏外だった。

電池はまだ十分ある。

電池があつたところで、意味はないのだが、春菜はいつも当然のようについていた携帯が今ここにあることに、自分でも良くわからない奇妙な違和感を抱いていた。

携帯を見ていると、無性に悲しくなってきた、春菜は慌てて鞆の中に携帯を押し込んだ。

心細くなり、そのまま座っていると、泣き出してしまいそうな気がして、春菜は立ち上がった。

あたし、帰れるのかな…。

そんな思いが胸を掠めたが、やはり今回もそれを口にすることは出来なかった。

8、異形のもの

足が痛いという感覚すらもう春菜にはなかった。

時彦と行動をとにもするようになって、二日目ももう終わろうとしていた。

足の筋と言う筋が強張り、引き攣ったようにして、春菜に限界を訴えていたが、それでも春菜は時彦に泣き言は言わなかった。

時彦自身は、これでも春菜を気遣って歩く早さを緩めてくれているのがわかる。

それでも、これ程の距離を普段歩く事のない現代人にとっては、丸一日山道を歩き通しを言うのは、相当の苦痛を伴うものだった。

まったく疲れた様子を見せない時彦を恨めしく思いながら、春菜は無言で足元だけを見ながら歩く。

日も傾き始めた。

そろそろ時彦も休もうと言うだろう。

そんな淡い期待に支えられて、何とか彼についていく。

ただ、一足づつ一歩づつ足を運ぶ。

その事に集中し、時彦の足を見ながらただ歩く。

そんな行為に没頭していた春菜だったが、不意に感じた感覚に一瞬全ての動きを止めた。

その僅かの間に離れてしまった時彦を慌てて追いかけて、春菜は時彦の着物の端を掴む。

それにつられて時彦は足を止める。

不安げに周囲を見回すと、春菜は、時彦の着物を更に強く握った。全身が栗立つような感覚が走り、どこから来るのか分からない恐怖に、ぎゅっと胃をつかまれたような不快感に襲われた。

「…何か変…」

自身に、いや周囲に訪れた変化をどう言い表せば良いのか分からずに、小さく春菜は呟いた。

こちらに来てから春菜がずっと感じていた、周囲に満ちる生氣 春菜は、そう認識していた が、変わったのだ。

周囲の木々や自然から滲み出し、溢れ出したような生命の力とも思えるような、何か不思議なエネルギーのようなもの。

命の瑞々しい輝き。

例えるなら、そのように理解していた、はつきりと言葉にする事は出来ないが、それでも確かにあると感じられる何か。

それは、今まで静かに周囲に満ち、水が高いところから低いところへと流れるように、静かに定められた流れにそって動き、春菜をもその生氣で包んでいた。

この二日で、いつの間にかあつて当たり前のように、意識すらしなくなっていた、その生氣が、突然変化したのだ。

超然としてただそこに存在していたはずのその力が、突然ざわめいたような気がしたのだ。

それは、何かその生氣とは相反する何かを拒むかのような。

凪いだ水面に、小石を落としたときの水面のゆれのような、不確かな何か。

しかし、それは春菜を不安にさせるには十分な何かだった。

初めて味わうはずの感覚だったが、それは春菜に、何か危険を訴え、不安を掻き立てさせた。

その生氣のざわめきが、春菜に危険を訴えかけるのだ。

「どうした？」

着物の裾を掴んだまま、周囲に視線を走らせ、動こうとしない春菜に首をかしげながら、時彦はそう尋ねた。

「わかんない…何か変…。怖い」

自分でも顔から血の気が引いているのが分かる。

寒さではなく、背筋に悪寒が走った。

腹の底から湧き上がって来るような恐怖。

春菜の様子に、さすがに心配になって顔を覗き込もうとして、時彦は動きを止めた。

ゆっくりと背筋を伸ばし、時彦は春菜の後方に視線を据えると、春菜を後ろに回した。

何かがいる、とそう思い、ゆっくりと春菜は時彦の視線の先に自分を目を向ける。

声にならない悲鳴を上げて、春菜は一步後退った。

物の怪だ、と頭のどこかで声がした。

木々の間に見えるそれは、春菜の想像とは全く違うものだった。

9、混沌

怖い。

ただ、それだけだった。

それを目にした瞬間、叫び声はおろか何の音も発する事が出来ずに、ぎゅっと胃を鷲掴みにされるような恐怖に襲われた。

痛いほどに心臓が大きく鳴り、春菜はただそれを凝視していた。いや、それと言うには物の怪はあまりに不確かな姿をしていた。黒い靄の塊。

はつきりとした形は成さず、ふわふわと漂い、それが気体である事は分かるが、触ればどろりと纏わりつきそうにも見える。それが意思を持つかのようにこちらを伺っていた。

正確には、目はないのだから、伺っているのかどうかわからないのだが、春菜には、狙われていると言う確信めいたものがあつた。

物の怪の様子は、喻えるなら、ダンプカーの濃い排気ガスをさらに濃くし、雪雲のように垂れ混ませ、気体でありながら、ヘドロのようなどろりとしたもの。

姿も異様ではあり、恐怖を誘うものではあつたが、それ以上の何か物が物の怪にはあつた。

腹の底から、湧き上がって来る恐怖。

得体の知れないものへの恐怖とは全く違う、あれは良くないものだと言う確信。

同時に、命すらあれの前では簡単に失ってしまう程の圧倒的な力の差が肌にぴりぴりと突き刺さるように感じられる。

身の内に宿す禍々しさが进り視覚化したかのような物の怪の姿。魂の奥深くから来る恐怖と嫌悪。

本能が危険だと訴え、魂が恐怖に慄く。

物の怪の存在感、威圧感その存在自体が発する独特の気配。ただあるだけで、凪いだ水面に波を立てるように、周囲の生気の流

れを乱す気配。

存在そのものを常に世界から拒絶されているものの気配。

初めて感じるはずの感覚。

それでいて、かつてどこかで感じた事のあるような、良く知っているような感覚だった。

まるで遺伝子に刷り込まれているかのように、春菜は初めてののはずのこの感覚に、戸惑いながらも、かつて自分は幾度もこの感覚を体験していたと言う妙な確信を抱いていた。

確かに知っているのだ。

今体験するまで忘れ去っていた、魂の奥底に眠っていた記憶。

「ちよつとじつとしてる。すぐ片付ける」

低い声がどこか遠くから聞こえた。

言葉を意味として理解できたわけではなかったが、春菜は体を動かすことが出来ずに、その場に立ち尽くしていた。

それから後のことは、あつと言う間の出来事だった。

時彦は、腰に差していた日本刀を引き抜くと、大地と平行に構え、低く口早に、歌うように何かを呟いた。

春菜には、彼がなんと言っているのかは分からなかったが、それでもその歌うような独特な響きが、何か特別な事であるのは分かった。時彦の言葉が紡がれると同時に、今まで春菜を包み込んでいた、生氣が力を増し、周囲に漲るのが感じられる。

時彦は、生氣が漲るのを待っていたかのように、物の怪へと刀を向けた。

刀が、一瞬光を放ったようにも見えたが、春菜がそれを確認する前に、時彦が物の怪に向かって動いたかと思うと文字通り目にも留まらぬ速さで切りつけた。

最後の数秒を、春菜はしっかりと認識することは出来なかったが、氣がつくと、物の怪の姿は消え、時彦は刀をしまい、また何事かを呟いていた。

物の怪から発せられていた、あの独特な空気も跡形もなく消えうせ

ていた。

あつけないほど簡単に事は終わり、春菜は重苦しい恐怖と緊張の鎖から解き放たれ、力が抜けたように、その場に座り込んだ。

まだ、頭の隅がしびれたような感覚が残り、春菜はしっかりと考える事が出来ないでいた。

今更ながら、体が震えだすのを止める事が出来ずに、春菜は膝を付いたまま、自分の体を抱くようにして、小さくなった。

今まで抑えていた涙が零れ落ちるのを止める事が出来ずに、春菜は俯いたままじつと恐慌が収まるのを待った。

死の恐怖を体験して、ようやく思い知った。

今まで、現実味のない体験に、頭のどこかで無意識に、これは夢だと言いつつ聞かせ、この状況を受け入れているかのように自分を偽りながら、平生を保っていた。

どこかで、死ぬ訳がないと思い、元の場所に戻れると言いつつ聞かせ、これは夢で、目が覚めれば全て元通りだと思っていたのだ。

それが、死の恐怖を目の前にして、ようやく自分が死ぬかもしれないという事に思い当たった。

今まで夢の中の世界のようなだったこの世界が急速に現実味を帯びて、春菜に迫り、春菜が考えないようにしていた事を囁きかけてきたのだ。

これは現実で、春菜は死ぬ事もある、一生ここに居なければならぬのかもしれないのだ、と言いつつ事実、春菜はようやく思考を巡らせた。

漠然と思っていた事が、他人事のようなだった事が、ようやく我が身に迫って考えられるようになったのだ。

しかし、春菜にはまだそれを受け入れるだけの準備があるはずもなく、ただその場に座り込むしかできなかった。

それだけでなく、物の怪の存在感、威圧感は春菜を完全に怯えさせていた。

それが余計に気を挫いてしまっていたのだ。

10、力

「物の怪って、ただ見た目が恐ろしいんじゃないんだね。…もつと、魂に直接恐怖が響いてくる。まだ、恐怖が残ってる…」

ちらちらと揺れる炎を見つめながら、春菜はぽつりと呟いた。

あの後、その場にうずくまって動けないでいた春菜が落ち着くのを待つて、少し場所を移動してから時彦が起こした炎だった。

炎から染み出す光と、暖かさが物の怪から滲み出る“何か”によって冷え切っていた心と体に染み渡る。

時彦が言うには、物の怪が現れた場所には良くない気が残るため、あまり長く留まらない方が良いらしい。

「物の怪は俺らとは正反対の存在だからな。根本的に相容れない。だからこそ怖いんだろうな…。それより、お前なんで分かったんだ？」

幾分固い表情で言う時彦に春菜は首を傾げた。

「物の怪が現れる少し前から様子がおかしかっただろ。気付いてたのか？」

言われて春菜は返答に困って時彦を見る。

「普通、俺達退魔師は、物の怪の気配に敏感だ。だから、物の怪が現れれば、少し離れた所でも気付く。けど、お前は物の怪が現れる前に何かを感じ取った。どうしてわかった？」

「どうしてって…。あたしは物の怪がどんなものかも知らなくて、今日初めて見て…ただ、怖くて…」

言いながら、春菜はまだ自分が動揺していることに気付いて、ゆっくりと気持ちを落ち着けるように息を吸った。

ただ目の前で踊る炎に視線を合わせて、落ち着けと言い聞かせた。ふわり、と何かが肩にかかる感覚に、はっとして視線を上げると、いつの間にも移動していたのか、隣で苦笑する時彦に視線が行き当たった。

「もう、大丈夫だ。物の怪はいないし、もし出ても俺がいるんだ。危ない事になんかならねーさ」

困ったように笑んで言う時彦に視線を向け、春菜は小さく頷いた。不意に時彦の手が春菜に向かって上げられ、思わず驚いて目を閉じると、大きな手が頭に乗せられる感覚がした。

それにもう一度驚いてから春菜はゆっくりと目を開けた。

「そんな怖がる事ないだろ」

やはり苦笑する時彦に、今度は春菜も小さく笑った。

「だって、時彦ってなんか怖いんだもん」

笑いながら言う春菜に、今度ははつきりと時彦は声を上げて笑った。「何だよ。こんなに優しく、寛大で、思いやりにあふれた良い男、そうはいないぞ？」

「あはは、自分で言っちゃ良い男も台無しだよ。…物の怪が、現れた時、だよ」

笑いながら言つて、春菜はゆっくりとその笑みを収めた。物の怪が現れた時のことを思い出し、感じたものを時彦に伝えようと言葉を搜した。

「この世界に来た時、何か目に見えない力に満ちている、って私は感じた」

心地良く体を包み込み、力を与えてくれる何か。

生命そのもののような、優しく、穏やかで、それでいて激しくもあり、底知れない力を感じる何か。

「それはただ、泰然と周囲に満ちていて…時彦も感じる？」

ただ、感じるままの印象を言葉に紡ぎ、春菜は時彦を見た。

春菜の視線の先で、時彦は難しい顔をしていた。

渋面をそのままに、時彦はゆっくりと口を開いた。

「…それは、多分女神の力だ。天地開闢の話しは知っているか？」

「うん。イザナギとイザナミが創ったってやつでしょ？」

「イザナギとイザナミ？なんだ、それは？」

聞き返す時彦に、春菜は面食らって、首を傾げた。

「え？違うの？日本神話でしょ？」

「いや、イザナギとイザナミは知らんぞ」

時彦もまた、首を傾げたが、一つ頷くと、話しはまずはそこからだ、とこの世の天地開闢を語り出した。

暗闇の中に、炎の不安定な影だけがちらつき、春菜は時彦の声に耳を傾けながら、静かに目を閉じた。

それは、春菜の知る神話と、似て非なるものだった。

昔、まだ島も海もなく、水に油が浮くようにどろどろとした大地が水に浮かんでいた頃の事。

一人の女神がお生まれになった。

女神は、生まれ落ちるとすぐに、国生みをなさった。

天の浮橋から地上を見下ろされ、天の瓊矛で地上を掻き回された。水から天の瓊矛を上げると、矛の先から滴り落ちた雫が固い土地となった。

こうして、女神は固い大地を創られた。

次々と島をお創りになられると、女神は中津国に降りられ、神々をお生みになった。

神々は、それぞれ様々な事象を司り、中津国を緑豊かな国とし、八百万の神は中津国の各地を護られた。

これが、時彦の語った、大まかな天地開闢の流れだった。

春菜の知る神話とは、似ているようで異なる内容。

天の掣矛や、天の浮橋、さらには島の創り方など、共通点は多いが、国生みを行ったのがたった一人の女神だったと言う大きな相違点がある。

「…不思議。似てるのに、全然違う…。天照大御神はいないの？」
おそらく、最も高名であろう神の名を尋ねると、時彦は大きく頷いた。

「ああ、いるぞ。天照大御神は、女神が高天原に昇られる際に共に行かれ、高天原を統べる神となられた。天岩戸など、逸話も多く残っている」

その答えに春菜は更に首を傾げた。

「日本神話の元になった話しの一つって事？」

呟いて、春菜は眉をひそめた。

ならば、ここは古事記が世に出るより前の時代だと言う事になる。
春菜はあまり日本神話には詳しくないが、それでも読書好きがこうじて、一通り読んだ事はあった。

朧げな記憶を探りながら、春菜は更に困惑を深めた。

しばらくそうしてから、春菜は考えるのを諦めた。

情報量が少なすぎるため、考えても仕方ない、と言う結論にたっしたからだった。

「それで、その話しと、さっきの周囲にある何かと、どういう関係があるの？」

天地開闢の内容と先程の話しの内容がいまいち繋がらず、春菜は時彦に説明を促した。

「なぜ神は神たるのか。そこが問題だ」

言って、時彦は空を見上げた。

「仮に俺たちが矛で泥水を掻き回したところで、島にはならん。ではなぜ神はそれが出来る？」

視線を向けられ、春菜は困惑して、首を傾げた。

「なぜって…神様だから…？」

答えになっていない事は自覚していたが、神話は神話であり、実際に起こった事として認識し考えた事などなかった春菜は思ったままを口にした。

神話の中の神は全能とまではいかずとも、何かしら人知を越えた力

を有しているものであり、そこに理由は求められない。

「…まあ、当たり前前の回答だな」

軽く苦笑して時彦は説明を続けた。

「神が神であるのは、力を持っているからだ。名前はない。ただ、力と俺たちは呼んでいる。それは、無から有をつくる力だ。生命の源でもあり、世界を形作る力。それは女神の国産みの力でもある」
言われた事を反芻しながら、春菜はゆつくりとうなずいた。

「神はもともと一人だった。たった一人。女神様だけだ」

「名前は？」

「名前はない。いや、誰も知らないだけであるのだろうが、女神は女神だ。世界の母であり、もっとも最初に生まれた高貴な方。女神とはただ一人であって、他の誰でもない。この葦原で暮らす限り、女神といえただ一人。名はとも人にとって重要なものだ。それはもちろん神においてもそうだ。女神は最初にお生まれになられたが故に、また、最高位に位置するお方故に、誰も名は知らない。名を知られる事は、本質をつかまれるという事、女神はこの世の本質をつかんでおられるが、女神の本質は誰もつかんではない。そういうものだ」

わかったようなわからないような、首を傾げたくなるような返答だった。

要するに、昔中国で、本名を呼ぶのが憚られ、字で呼ばれたようなものだろう。

名とは人にとって特別なものであり、呪をかける際などにも用いられる。

それだけに名そのものが本人にとって特別な意味や拘束力を持つとして、字が使われた、と何かの小説で呼んだあやふやな知識を補って、ようやく春菜は納得してうなずいた。

「そして、その力を持っているか否か。それが神と人との分かれ目だ。力とはすべてを生み出す。それを操り、無から有を生み出す力を持つ者、それが神だ。そして、おそらくお前が感じるその不思議

な感覚、それは力が周囲に満ちているのを肌で感じてのだろう」

神、その存在が急に現実味を帯びてきた事に困惑しながらも、春菜はどこかでああ、と納得した。

なぜか、否定の言葉は浮かばなかった。

すんなりと心に染み入ってきて、春菜は自然にそれを受け入れていた。

忘れていたものを思い出したような、不思議な感覚だった。

「それと物の怪がどう関係するの？」

始めの論点からずれていたのを戻そうと、春菜が発した言葉に、急に時彦は言葉に詰まったようにして、顔をしかめた。

「…わからん」

「え？」

「物の怪がどこから来て、何のために存在するのか。それは誰も知らない。ただ、人に仇をなし、神々と敵対している。それだけだ。

物の怪は、力とは正反対の位置に存在する。それがために、人の作った武器では傷つけられない。物の怪を滅する事ができるのは、力のみだ」

「正反対…」

世界が存在を拒絶している。

確かにそのように感じたはずだ。

春菜はそれにふと納得した。

「正反対だから、存在する事自体が、力から拒絶されるんだね。物の怪が現れた時、それまでずっと周囲に静かに満ちていた力が急にざわめいた。不純物を取り除こうとするみたいに」

考え込むように時彦は黙り込んだが、すぐに大きく息をつく、頭をふった。

「お前は、よくわからんな」

「え？」

唐突に言われた言葉に軽く面食らいながら、春菜は首をかしげた。

「突然現れて、未来からきたと言い出して、まったく常識を知らない

いかと思えば、退魔師ですら知らんような事まで知っている。俺は式を呼び出す術を誤ったのではなく、もしかすると、お前は葦原に必要な存在なのかもしれない」

言われた内容がさらにわからず問い返すが、さあな、俺もわからん、と時彦はそれ以上取り合ってはくれなかった。

その夜は、眠れずにいた春菜に時彦が付き合う形で、ただ二人で炎を見つめながら夜を明かした。

11、氣

「すごい」

先程から幾度となく聞こえてくる言葉に相槌を打つ事すらせずに、時彦は呆れたように春菜を見た。

春菜の体力を氣遣つて、里に出ようと言ったのが昨夜。

物の怪に襲われ一睡もしないまま夜を明かすと、すぐに山を下り始め、ようやく町に出たのがつい先程の事だ。

始めこそ、初めて出会う時彦以外のこの時代の住人に幾分怖じ氣付いたように萎縮していた春菜だったが、それも僅かの間で、先程からはしきりに周囲に視線をやっては感嘆の声を上げていたのだ。

「時代劇みたい……さすが本物」

きよろきよろとせわしなく動く目線は、牛や馬、果てには俵や行き交う人々にまで移る。

春菜の思い描く時代劇よりは華やかさがなく、素朴だった。

人々はみな、薄い茶の織り目の荒い布を仕立てた着物に身を包み、その着物がまた『着物』とは少しばかり違う。

平安時代の十二単の雰囲気よりは、聖徳太子の雰囲気に近い、と思ひながら春菜はそれらを眺めていた。

華やかな綺麗さはないものの、素朴さが、親しみやすい。

質素ながら、どこことなく味のある色合いに着こなした、と春菜には受け取れた。

その表情には、昨夜の物の怪に出会った後の恐怖は全く残っていなかった。

時彦には何がそこまで興味をひくのか理解出来ないものばかりに、春菜はすごい、と言う。

「……何がそんなにすごいんだ」

半ば独り言のように呟いた言葉に、春菜がすごいよ、と口をはさんできた。

「時彦は私のいたところを知らないからそんな事が言えるんだよ」
口を動かしながらも、春菜の目は休む事なく周囲を見ている。

「時彦が私のいたところに来たら、今の私よりもっと絶対驚くよ？一人でいたら、下手したら車や電車にひかれて大怪我しそう」

「…大怪我なんて、そうするものじゃないだろ」

「そんな事言ってるから、私のいたところ来たらびつくりするんだって言ってるの。馬より早い乗り物がいっぱい走ってるんだよ？ぼんやり歩いてたら、死んじゃうから」

少し大袈裟かな、と思いながらも一応事実として春菜は時彦にそう言った。

「どんな世界だ…ますますわからん」

困ったようななんとも言えない表情で考え込む時彦をよそに、春菜は物珍しい世界にただただ感動していた。

やがて町並みは露店の立ち並ぶ大通りへと変化していった。

そこいら中から呼び込みの声が上がる。

市が立っている、というよりは商品を交換したい人々が自然と集まっているような様相だった。

道の端で大量の野菜を並べているものもいれば、布を手になっている者もいる。

どうやら物々交換らしい。

何がある、何が欲しいと周囲からかけられる声を半ば聞き流しながら、春菜は時彦について歩く。

それでも並べられた手作り感溢れる品々を観察する事は忘れない。

「ちよいとおねいさん」

だから、春菜が声のした方に首を巡らしたのは、声に釣られたからではなかった。

「質の良いものばかりだよ、どうだい？これは都の娘さん達に流行りの簪だ。おねいさん位の年頃にぴったりの華やかな造りさね。綺麗な石も埋め込んでる。魔除けにもなるよ」

その後思わず足を止めてしまったのも、並べられた装飾品の類に目

を奪われたからではなかった。

正確には簪や鮮やかな色紐、可愛らしい紅入れ、櫛などに埋もれるようにして置かれた守り刀に氣をとられたからだ。

華奢な様相をしたそれは、細身の刀身で、手から肘より少し長い位の長さかない。

柄も含めてちょうど腕より少し短い程度の大きさだ。

装飾のためであろうひだが数本と、乳白色と白く煙ったような桃色の玉を数珠のように綴った物がそれぞれ一本づつ柄の先につけられている。

束と鞘にも、本物かどうか春菜には判別はつかなかったが、それぞれ黒の地に、繊細な金細工が施されている。

見た目も美しいのだが、春菜がその小刀に惹かれたのはそれだけの理由ではなかった。

春菜自身にも、何が特別なのだ、とはうまく言い表す事はできなかったが、それでも確実に感じる違和がその小刀にはあった。

雑踏の騒がしさが消え、水を打ったような静けさの中、春菜と小刀だけが世界に取り残されたような不思議な感覚。

「春菜！」

不意に肩を強く掴まれる感覚に、止まっていた時間が再び流れ始めた。

消えていた音も戻り、驚いて振り返ると、時彦が厳しい顔をしている。

「はぐれたらどうするんだ、何やってんだ」

呆れたように言う時彦に、ごめんと呟いて、春菜はもう一度小刀に視線をやった。

「なんだい、これが気になるのかい？」

春菜の視線に気付いた店主が言い、時彦もまた小刀に目を向ける。

「これは、見た目は信じられないほど綺麗なんだけどねえ、あんまりお勧めは出来ないね。あたしも持っていて良い気はしないしね」

「何か問題でも？」

春菜の問い掛けに、女は声を落とす。

「いわくつきなんだよ。何でもこれを持ってた連中全員、良い死に方してないってんでね。たまたまかもしれないけど、あたしにこれ売った知り合いも死んじゃったし、どうにも気味が悪くてねえ」

「…ゆずつてくれないか？代わりに、これで足りないか？」

それまで黙って話を聞いていた時彦が突然口を挟んだ言葉に、女は一瞬目を見開いた。

同時に時彦が懐から取り出した翡翠の勾玉にさらに女は目を見開く。
「あんた、これと交換する気かい？あたしの話し聞いてたのかい？あたしもどこか神社にでも預けようかと思っていたんだよ？それを、そんな勾玉と…どう見ても釣り合わない」

「いや、大丈夫だ。無理か？」

「いけないよ、今日だって、見栄えがするからつい出しちまった位で、何を差し出されても交換する気はなかったんだ」

女の困ったような表情に、時彦は少しだけ表情を緩めた。

「大丈夫。俺はこれでも一応退魔師のはしくれた。扱いは心得ている。ちゃんと害のないようにする。あんたがこれを持っているよりは、安全だ」

「退魔師？」

驚いたのか、女は時彦の言葉を繰り返し、まじまじと時彦を見る。

「ああ、そうか。なら、あんたに預けるのが安全だね、お代は良いよ、あたしも助かるし」

今度は時彦が困ったように頭をかく。

「じゃあ、代わりと言っちゃなんだが、手を出してくれ」

「こうかい？」

差し出された手に、時彦が手をかざすと軽く笑む。

「あまりこれには触らなかつたようだな。賢明だ」

独り言のように呟くと、今度は低く歌うように何事か呟く。

春菜には、何か温かい光りのようなものが、時彦の手から、女の手に渡ったようにも見えたが、それもすぐに終わった。

「これで多分物の怪に襲われる事もないだろうが、心配ならあまり一人にならない方が良い」

呆けたような表情で女が頷くのを確認すると、時彦はすぐに歩き出した。

慌てて春菜も時彦を追って歩く。

「さっさと寢床を決めるぞ」

振り返りもせずに時彦は、一言そう告げる。

うん、と春菜も一言だけ返して黙って歩く。

傾き始めた太陽の、昼間とは違う温かい色を帯始めた町は、わずかに表情を変えて春菜の目に映る。

何とはなしに、釈然としない思いを抱えながら、春菜はただ足を運んだ。

二人がその日、一夜を過ごすことになったのは、町の外れにあった打ち捨てられたような小さな建物だった。

近くに住む家の所有者らしき人が、一夜泊まるだけなら、と貸してくれたのだった。

一応、掃除はしていたらしく、とても過ごせないというほどではなかった。

中に入るとすぐに、時彦は小刀を取り出した。

「それ、どうかしたの？」

夕方、小刀を目にしてから厳しい表情を崩さない時彦に、春菜は恐る恐る尋ねた。

「物の怪の気に当てられている」

春菜には理解出来ない返答に首を傾げつつも、時彦が低くぶつぶつと呟き出したので、諦めて近くに腰を下ろした。

時彦がしている事の流れは先程、小刀を持っていた女性にしたものと同じだが、力の大きさが違う事は春菜にも分かった。

やがて、ぴんと弦を弾いたような高い音が響き、一瞬だけ物の怪の微かな気配がしたかと思うと瞬く間にそれも掻き消えた。

「お前、これに気付いてたのか？」

唐突な問い掛けに、春菜はただ首を傾げる。

「これに付いた物の怪の気に気付いてたのか？」

ようやく合点が行き、春菜は首を横に振る。

「うん、ただなんか違和感があって…周囲のものと違うような」

「…それは気付いてたって言うんじゃないのか？」

「違う。私は物の怪の気配がするって思った訳じゃないもん」

春菜の言葉に首を傾げて時彦は小刀を見る。

「まだその違和感はあるのか？」

春菜もまた小刀に視線を落とすと、小さく一つ頷いた。

「うん。なんだろ、物の怪の気がなくなったからかな？さっきより強くてはつきりして、澄んでる…ああ、力の感覚に似てるかも。ただ、周囲に漂う力よりもつと澄んでて、はつきりとした感じ」

「悪い感じはしないんだな？」

それに春菜が頷くのを確認して、ようやく時彦は安心したようにため息をついた。

「物の怪の気を払う時に、力を通わせたから気付いたが、この小刀、昔退魔師に使われた事があつたかもしれない。だから違う感じがするのかもな」

俺にはよくわからんが、と付け足して、時彦は小刀に手を伸ばす。

「なんで分かるの？」

値踏みするように小刀を見る時彦にそう問い掛ける。

「退魔師の武器として使われてた道具は、力を通わせやすいんだ。俺達は、神々に力を借り受け、武器にその力を通して物の怪を払う。本来帯びている以上の力を物に注ぐんだ、いくらか抵抗があるのが普通だ。それが使っていくうちに馴染んで抵抗なく力を通わせ

られるようになっていく。その抵抗がこれにはなかった。だから、退魔師に使い込まれていたんだろう、位は想像がつく」

ふーん、と呟く春菜に時彦は小刀を差し出した。

反射的に受け取ってから、春菜は困って時彦に視線を向けた。

「やるよ。俺じゃないし、何かの時用にでも持つとけ。物の怪の気も払ったし、もう大丈夫だろ」

思ったよりもひんやりとした手触りと、手に心地良い重さが伝わる。

「物の怪の気って何？」

手にした小刀を眺めながら、尋ねると、時彦は小さくうなった。

「何て言うか、物の怪が纏っている力とは正反対のものだ。おそらく物の怪を切ったりした時に刀に移ったんだろう。本来なら通わせている力で浄化されるんだが、持ち主だつ退魔師が死ぬか、物の怪を倒す前に落とすかして、気が移ったまま残った物を後から通りかかった誰かが拾ったんだろ。物の怪の気はそれだけで害になる。人に宿る力を汚して、病にかかりやすくなるし、物の怪にも狙われやすい。だからいわくつきだなんだって言われてたんだろ」

時彦の説明を聞きながら、改めて小刀を見る。

本当に見惚れるような造りだった。

実用に耐えうるのか、と疑いたくなるほど、華奢で繊細な造りであるが、退魔師に使われていたというのだから、それなりに丈夫なのだろう。

「お二人さん、余り物で悪いけど、少しばかり食べ物を持ってきたよ。どうせないんだろう？」

閉じられた戸口の向こうから聞こえた女声を合図にしたように自然とそれまでの会話を止めて、時彦は立ちあがった。

入口で、時彦と、宿を貸してくれた家の女性と話している声だけがぼそぼそと春菜のもとにまで響いてきた。

12、邂逅

夕餉は豪華ではないが、手の込んだものだった。

外食に冷凍食品、和洋折衷な統一性のない様々な料理を食べ慣れている春菜にとつて、純粋な和食が逆に新鮮であった。

椀に盛られたご飯に、汁物、そして川魚の素焼きという質素な内容。それに塩が添えられていた。

しかし、春菜を困惑させたのは、そのような質素な食事ではなかった。

どこを見ても、あるはずのものが無い。

困惑して時彦を見るが、時彦は春菜の様子には気づかずに、当たり前のように目の前の食事を食べ始めた。

「どうした？ 食べないのか？」

ようやく春菜がまだ食事に何も手をつけていないことに気付いた時彦が、訝しげに春菜を見てきた。

それにますます困惑を深めて、春菜は時彦と、目の前の料理とを見比べた。

「…お箸、は？」

春菜の発した言葉の意味をうまく汲み取れなかったのか、時彦はただ首を傾げた。

「なんだ？」

「え？ お箸… ないの？」

あつて当然だと思っていたものが、うまく相手に伝わらず、春菜は自分の方が何か悪いことでもしたかのような気分になり、徐々に声を小さくしていった。

自分が我儘を言っているように感じられて、少し居心地が悪かった。

「これで食べるの…？」

ますます意味が分からないのか、時彦は返答に窮してまた一口木製の匙さじで口に料理を運んだ。

「それで？」

「それ以外に何かがある？」

全く疑いを持たない時彦の返答に、春菜はようやくそのようなものだ、と割り切った。

「何でもない。ちよつと習慣が違っただけ」

外に食べに行けば、ご飯をスプーンを食べることも多かったため、一度割り切ってしまうえば、それほど気にするような事でもなかった。なんとなく、箸がないのは不思議な気もしたが、それだけだった。

「ご馳走様でした」

最後まで食べ終わり、匙を置く。

当たり前だが、無添加無着色の食料のみの食事だ。

それもおそらく、近郊の農村で収穫されたばかりの材料で作られたもの。

ほつと安心するような、質素ながら素朴な味わいだった。

日本食の良さを改めて実感した。

そんなようやくほつと一息つける、穏やかな時間だったからこそ、春菜は気付きたくなかった。

実際、森の中と街中の力の雰囲気の違いに戸惑つてもいたため、勘違いかとも思ったがどうしても無視出来ない違和感だった。

「…時彦、物の怪が」

一言告げると、途端に時彦は表情を引き締めた。

「どっちだ？」

黙って違和感を感じる方向を指差す。

「ここで待つてろ、すぐ戻る」

飛び出して行った時彦を見送ったすぐ後だった。

小さくざわめきながら緊張し、張り詰めるように、いわば嵐の前の静けさのようだった力が、掻き乱された。

物の怪が現れたな、と思いながら春菜はその方向を見る。

時彦が間に合えば良いが、と思いながら、春菜は無意識に小刀を握り締めた。

時彦が帰って来たのは、半刻ほど後の事だった。

「大丈夫だった？」

「たいした事なかった」

素っ気ない返事を返すと、時彦は床に寝転がる。

「明日にはここを発つぞ、寝て疲れとっておけよ」

「え、もう？」

それまでの言動から、二、三日は滞在するのだろうと思っていた春菜は、驚いて問い返すが、早く寝ろと一蹴されただけだった。

まだ詳しく話を聞こうと思いつながら春菜も横になったが、数日ぶりの温かな屋内に、自然と眠気を誘われ、次に目を開いた時にはいつの間にか夜も明けていた。

「おい、起きたか。準備が出来たらすぐに出るぞ。朝飯は後だ」

まだ寝ぼけてぼんやりとした耳に響いてきた声に、春菜は首だけでもたげて声の主を探して視線を巡らせた。

「もう朝？」

口の中でもごもごと尋ねる。

「ああ、早く準備しろよ」

まだ心地良く纏わり付いてくる睡魔に身を委ねていたかったが、時彦に急かされるようにして春菜はゆっくりと体を起こした。

昨日教えられた井戸に行き、冷たい水で顔を洗うとようやく頭がすっきりして、春菜は一つ伸びをした。

そのすっきりとした気分のまま、戻った春菜を待ち構えていたのは洪面の時彦だった。

「遅いぞ、ほら、お前の分の荷物だ」

半ば放られるようにして荷物を受け取った春菜と入れ違いに時彦は

外に出る。

「外で待つてるから、身支度済ませたら宿の前に来いよ」

背中越しにそうとだけ言うと、時彦は振り返りもせず歩いて行つてしまった。

その背中をしかめっ面で見送る。

ようやく爽やかな気分になれたのに、台無しだ、と独り言ながら手早く身支度を済ませると、春菜もまた時彦の後を追うが、そもそも何故こうも急いで発ちたがるのか、春菜には理解できない。

「ねえ、何でそんなに急いでるの？」

尋ねてみても、適当にはぐらかされるばかりで、時彦はただただ歩を進める。

良い加減諦めて、春菜が口を閉ざした頃だった。

「春菜」

不意に立ち止まった時彦に驚いた春菜だったが、時彦の真剣な表情に黙って続く言葉を待った。

「お前、本当に俺についてくるのか？」

時彦の言葉に、時が止まったかのように、春菜の動きも思考も文字通り完全に停止した。

ついで、込み上げて来た怒りに顔を強張らせながら、春菜はゆつくりと口を開いた。

「何、それ。私と一緒にいたくないなら、そうはつきり言えば良いでしょ、なんでそんな言い方するの？ だいたい、私がこっちに来たの時彦のせいでしょ？ 何でそんな事言えるの？」

怒りから涙が溢れそうになるのを必死でこらえて、春菜はようやくそれだけ言い切ると、下唇を噛み締めた。

かすかに血の味が口内に広がったが、構わずにそのまま時彦をにらみつけた。

「春菜、俺は」

驚いたような奇妙な表情を浮かべて何かを言いかけた時彦を睨みつける。

しかし、時彦がその続きを口にする事は出来なかった。

耳元で風を切る鋭い音がしたのと、強く腕をひかれたのと、どちらが先だったか。

動いた拍子に、溜まっていた涙が一筋流れ落ち、頬を濡らしたが、それに気付く余裕は春菜にはなかった。

先程まで数歩離れた位置にあった時彦の顔が、春菜の目線のすぐ上にあつたのだ。

正確には、時彦に強く腕を引かれ、その勢いのまま時彦の胸に飛び込む形になったのだ。

真剣な、と言うよりは睨み付けるような視線で、春菜の後方を見据る時彦のすぐ脇にはたたき落とされたかのように真ん中で割れた矢が落ちていた。

「時彦？」

先程の怒りも忘れて、小さく名を呼ぶが、時彦は春菜を通り越した先にいる何かを見据えたまま視線を動かしもしなかった。

ゆっくりと首だけ巡らせて後方を確認する。

広がった景色は、早朝のまだ人気のない通りだった。

何も無い、と思ったその刹那、再び時彦に強く身体を引かれた。

半ば抱きすくめられるようにして、横に跳躍する。

同時に、すぐ横を矢が掠めて飛んで行くのを目の端に捕らえ、春菜はようやく状況を理解した。

硬い表情をそのままに、春菜を背に庇うようにする時彦に再び矢が射かけられる。

それを、いつの間に抜刀したのか、手にした刀で薙ぎ払うようにして払う。

「さすが」

からかうような調子で投げ掛けられた声と共に男が一人、物陰から姿を現した。

緩く着物を着流した男は、この時代の服飾に疎い春菜から見ても質の良い着物を着ていた。

何より来ている布地の色彩が鮮やかだ。

「やあ、久しぶり」

にこやかに笑んで言う優男に、時彦は苦虫を噛み潰したような表情をする。

「何故お前がここにいる」

低く唸るような声で尋ねる時彦に対して、男は相変わらず笑みを湛えたまま返答する。

「私は神出鬼没だからね。それより、どうしたんだい？君が女子おなこを連れてくるなんて珍しいね」

目の前に立つ男が矢を射かけた事は手にした矢筒と弓から明らかなのだが、友好的な物腰と、まるで旧知の仲のようなやり取りに春菜は困惑を深めるばかりだった。

「それで、やっぱり考えは変わらないのかい？」

穏やかに尋ねる男は、ゆっくりと腰に帯びた太刀を抜く。

「返答が分かっていているなら、わざわざ尋ねるな」

時彦の言葉に、男はどこか愁いを帯びた表情を浮かべる。

「相変わらず頑固だね、君達は。もっと器用に生きなければ、長生きできないよ？」

向けられた刃に対峙する時彦も、ゆっくりと刀を構える。

「余計なお世話だ。相変わらずよくしゃべる奴だ」

ゆるりと構えた男と、時彦が睨み合う。

それも僅かな時間であった。

どちらが先に動いたのか。

目を閉じる事すら忘れた春菜の目に映ったのは、鮮やかな紅。

一拍置いて頭が状況を理解する。

紅。

血の色。

斬られた。

誰が、時彦が。

目の前の光景の情報が、頭に入ってきて来るまでの僅かな時間。

春菜に向かつて射かけられた矢を、時彦が刀で払った瞬間、その僅かな隙を突いて男が時彦に刀を振るったのだ。

そして、春菜の目の前に紅い色が広がったと思った次の瞬間、時彦を切った男の刃は春菜に向いていた。

銀色に光る冷たい色が、喉元に突き付けられる。

斬られるな、とどこか冷静に思ったが、刃が肌に届く直前ぴたりと止まった。

「君も退魔師かい？」

たった今人を斬ったとは思えない程穏やかな声で尋ねる男に、春菜は何も答える事が出来ずに立ちすくむ。

何も映っていないかのような感情の乏しい瞳が怖かった。

怯える春菜に向かつて、ふわりと笑むと男は時彦に向き直る。

いつの間にか立ち上がっていた時彦は、左袖を真つ赤に染めていた。

「あんまり無理すると、寿命を縮めるよ。退魔師なんて、所詮人には無力なんだから。君は私に勝てない」

驕るでもなく、冷静に言々と、男は太刀を構える。

「そいつは関係ない。手を出すな」

肩で生きをしながら言々と、時彦もまた刀を構える。

「それは私が決める」

向かい合った二人の後ろで、ただ茫然としていた春菜は、わずかに男の腕が動いたのに、考えるより先に身体が飛び出していた。

時彦が斬られる、と思った時には、男の後ろから刀を押さえようと両手で手首を押さえていた。

「春菜！」

驚いたような時彦の声と、向かつてくる時彦と春菜を見比べ、全く、と呟く男の声。

拾った声を理解する前に、どこからともなく吹いた風に全ての音が吹き飛ばされた。

突風などと言う生易しいものではない、春菜が今まで経験した事のない程凄まじい風だった。

春菜が最後に見たのは、突如吹いた風に吹き飛ばされる時彦と、吹き荒ぶ風の中、何事もないかのように一人立つ男の姿だった。

13、有間

心地良い静かな空間だった。

ゆっくりと目を開くと、まず目に映ったのは天井の木目だった。

「気がついたかい？」

低くもなく、高くもない、どこか中性的な響きのある穏やかな声に、春菜はゆっくりと上半身だけ起こした。

春菜のすぐ横に座る男は、やはり中性的な印象を見る人に与える男だった。

綺麗な造りをした顔に、やはり穏やかな笑みを浮かべている。

「あなたは…」

まだぼんやりとした表情で、春菜は首を傾げる。

「私、なんで…」

言いかけてさらに春菜は首を傾げる。

誰かと一緒にいなかっただろうか。

学校からの帰り道、何かとんでもない事が起きなかっただろうか。

思い出すにつれ、春菜は表情を陰しくする。

「あなた！時彦は？どうしたの？」

半ば叫ぶように尋ねると、男は穏やかな笑みを浮かべたまま首を横に降る。

「彼は、置いてきた。死んではいないはずだよ。あの程度で退魔師が死ぬ訳もないだろうし」

とどめはささなかったから、と付け加え、男は春菜の顔を覗き込む。
「気を失った君を連れてあそこを離れた時には、彼も意識はあったから彼は大丈夫だろう。それより、気分は？」

気遣わしげな表情に、思わず春菜は黙り込む。

「…なんで私を助けたの？あなた、誰？」

春菜の問いに、薄く笑むと男は静かに口を開いた。

「なぜだろうね。君が退魔師でないなら、私には君を害す理由はな

いいし、何となくね。私の事は有間と呼んでくれれば良いよ」

「有間？」

言われた名を繰り返すと、有間はまたふわりと笑う。

これほど穏やかな笑顔を見せる人が、時彦を斬った事が信じられなかった。

そう思ってから、有間は時彦を斬った時にもやはり穏やかな笑みを浮かべていた事を思い出した。

「君の名は？」

「為末春菜」

春菜の返答に、有間は驚いたように動きを止める。

「聞かない氏だね、どこの家系だい？」

返答に窮し、目を逸らす春菜を有間は首を傾げて見つめる。

「あの、私そんなんじゃないかと、えっと」

しどろもどろになりながら、春菜は状況を説明する。

物の怪や退魔師などと言う存在が当たり前な世界だ。

未来から来たと言う話しも信じてもらえるかもしれない、そう思ったのだ。

しかし、その期待はすぐに裏切られる事になった。

「つまり君は、退魔師が式神を呼び出そうとして、謝って未来から呼び出されてしまったって事かい？」

要領を得ない春菜の説明を、まとめた言葉に春菜は大きく頷く。

「なんだか、にわかには信じられないような話しだね」

言って、有間は困ったように春菜を見る。

「そんな、でも本当なんです」

「そもそも、退魔師が式神を使うなんて聞いた事がないんだよ。だが、君が未来から来たとすれば、風変わりな名前も納得できる。どんな字を書くんだい？」

「四季の春に菜の花の菜で春菜」

春菜の説明に、有間は頷く。

「良い名だ。暖かくて綺麗な名前だ」

照れもせずに、そう言つてのけると、有間は春菜に向き直る。

「さて、春菜。私は今少し湯治に出ていてね。一緒に来るかい？行く当てはないんだろう？」

突然の申し出に、春菜は返答に困る。

つい和やかに会話をしていたが、有間と一緒にいくとなれば、時彦に申し訳ない。

「ああ、そうか。春菜に聞いてはいけないね」

返答に詰まつた春菜を見て、一人納得して有間は言葉を続ける。

「私と退魔師は敵同士、私について行くとなれば彼らに対する裏切りだからね。なら、選ぶ必要はない。嫌がっても連れて行くよ。少し君に興味もできたからね」

「違います、私そんなんじゃない。連れて行つてください、私、帰る家も生きる術も何もないんです」

言い切つて、春菜は真つ直ぐ有間を見た。

微かに胸の奥が痛んだが視線を反らす事はしなかった。

ふわりと笑つと、有間はわかつた、と頷いた。

時彦に申し訳ないなどと、何故感じる必要がある、と春菜は自問自答する。

先に春菜を切り捨てたのは時彦だったはずだ。

そう割り切つてみても、春菜の脳裏にちらつくのは、春菜を庇つて斬られた時彦の姿だった。

有間の話しによると、湯治に行く一行から抜け出して一人寄り道をしていたため、まずは仲間と合流しなければならぬとの事だった。春菜が目を見ましたのは、昼前で、馬で半日ほどの距離にある町に

いる有間の仲間の下へ向かうには十分余裕のある時間帯だった。

初めて間近で見る馬に、おっかなびっくりしながら、有間に手を貸してもらい、馬の背に収まると、その後ろに身軽に有間が飛び乗った。

規則的な振動に揺られる事によつやく慣れ、景色に目を向ける事ができるようになった頃、不意に春菜が口を開いた。

「ねえ、有間聞いても良い」

馬の背に揺られながら、すぐ近くにある有間の顔を見上げて問い掛けると、何、と返事が返ってきた。

「なんで、退魔師と有間は敵同士なの？」

有間は困ったような笑みで春菜を見る。

「朝廷と退魔師は昔から対立しているんだ。大君おおきみに従わない勢力として、朝廷からは目の敵にされている。私は朝廷側の人間だからね、彼らに怨みはないが、仕方ない事なんだ」

ゆつくりと、けれど足で歩くよりは早く過ぎ去つて行く景色を眺めながら春菜は有間の答えを反芻する。

時彦と違い、有間は街道らしき道を進んでいるため、見える景色も全く違う。

多くはないものの、道を行き交う人々や、周囲に広がる田畑、時折現れる農村も春菜には珍しい。

「退魔師って、物の怪を退治するんでしょ？それがどうしてダメなの？」

「退魔師は、八百万の神と玉依姫たまよりひめを信じているからね。それが大君は気に入らないんだ」

分からない、と首を傾げる春菜に、有間は丁寧に順を追って説明する。

「大君の一族は、玉依姫を祖としている。玉依姫は、女神の忘れ形見、中ツ国を守護してくださる現人神だ。彼女の子孫が大君の一族なんだ」

それに春菜はさらに首を傾げる。

「でも、退魔師も玉依姫を崇めてるんでしょ？何がいけないの？」
春菜の問いに、じゃあ少し昔話をしようか、と有間は口を開いた。

昔々、女神が国生みをなさり、すべての物があるべき形に整え、八百万の神々をそれぞれの土地に遣わしになった後、女神は中ツ国から高天原へとお帰りになられた。

その際、女神は中ツ国の行く末を思い煩われ、最後にご自分の代わりに中ツ国で国を守り、八百万の神々を統べる、ただ一柱、女神と同じ力を持つお方を産み落とされていった。
その方が、玉依姫であった。

姫は他の神々と違い、人の姿をされ、転生を繰り返され、生まれ変わる度、巫女姫として宮に入られ中ツ国を守り、人々を良く治められた。

しかし、それもいつまでも続くものではなかった。

それは何度目の転生か。

巫女姫は、一人の男に恋をした。

けれど、巫女姫の使命の重さ故、それは叶わぬ恋だった。

しかし、幸か不幸かその代の巫女姫の叶わぬはずのその恋は叶ってしまった。

やがて一人の子を儲け、巫女姫は次の転生で行方を眩ませた。

残された子には、僅かながらも巫女姫の奇跡の力が受け継がれ、巫女姫の行方が知れないうちに、その子孫が、政を取り仕切り朝廷を開くようになっていった。

その末裔が今の太皇太后である。

「これが、一般に伝わる大君の一族に伝わる彼らの起こりさ」

語り終えて、有間はゆっくりと息を吐く。

「でも、それがどうして敵対関係に？」

「それは、長い歴史の中、理由はさまざまに変わったね。始めは退魔師が大君を殺そうとしたんだ」

え、と驚きの声を上げる春菜に有間は小さく笑む。

「巫女姫は、人であって人ではない、現人神。神聖不可侵な、崇めべき存在であって、交わる事の許されるような存在ではない。ましてや、その男が退魔師の出であれば、尚更許すまじき暴挙だっただろうね」

「退魔師？じゃあ、大君と退魔師は、分裂しただけで、始めは一緒？」

元をたどればね、と有間はそれを肯定する。

「彼らは退魔師の恥として、巫女姫の子を殺そうとしたんだ。記憶の新しい数代の間は、常に大君は退魔師から身を守らなければならなかった。そして、退魔師が忘れた頃には、大君が彼らを恨む。そして、もう少し時がたち、大君の権威が上がるにつれ、今に続く大君と退魔師が敵対する最大の理由が生じた。行方知れずになった巫女姫の魂、彼女の生まれ変わりを探し続ける退魔師を、大君は危険分子と見なした。巫女姫が見つければ、大君の立場が危ういからね。一応民には大君と退魔師の不和は表立つてはいないし、大君の祖先と退魔師の関係も知られてはいないから、表向きは平和ではあるけどね」

複雑、と呟いて、春菜は改めて有間の顔を見上げた。

「でも、そんな朝廷の敵を見逃して良かったの？」

「普段なら、見逃しはしないんだけどね。たまたま今日は気が変わったんだ」

「…なんだか悲しいね」

思わず口について出た言葉を、有間が問い返す。

「だって、悪い人には見えないもの、有間も……時彦だって」

斬られた時彦が、脳裏に過ぎり、一瞬口をつぐんでから、すぐにまた春菜は口を開いた。

「なのに、殺しあわなきやいけないんでしょ？それって、すつごく悲しい」

虚を突かれたような表情で、目を見開くと有間はわずかの間春菜を見る。

「春菜は変わった考え方をする」

「有間は、朝廷の偉い人なの？」

そつだろつか、と首を傾げながら単純な好奇心から尋ねるが、有間は一瞬考えるように口をつぐんだ。

「私は、朝廷の無用の長物だからね、こつやって好き勝手もできる」
答えになっていないような微妙な言い方をして、有間は自嘲気味に微笑んだ。

何となくそれ以上踏み込んではいけないような気がして、春菜は曖昧に頷いた。

「それより、ほら」

有間に促されて視線を前に向けると、思いもしない光景が広がっていた。

いつの間に上りきつたのか、そこは山の頂上だった。

あまり高くないが、十分な視界は確保される。

「あそこで、多分まだ私の共が待っている。そして、あちらのずっと先に都がある」

有間は言いながら小さな盆地の、山のすぐ脇に広がる町を指差し、その後ちようど反対側の山の更に先を指し示す。

「都？」

「ああ、少し前に遷都した」

どことなく、悲しげな響きを聞き取つて、春菜が振り向くと、有間はいつも通り穏やかな笑みを浮かべていた。

「どこに遷都したの？」

「飛鳥」

「あ、飛鳥？」

思わず繰り返して、春菜は改めて周囲を見回した。
飛鳥時代、春菜が思っていたより大分昔だ。

「今の^{さいめい}大君は誰？」

「今は^{さいめい}齊明様が^{じゅうそ}重祚して大君であらせられる」

「齊明天皇？」

記憶を手繰るが、聞き覚えのない名前だ。

「実際は大君ではなく^{かすうきのみ}葛城皇子が実権を握っているが」

更に聞き覚えのない名前に、春菜は溜め息をつく。

「飛鳥時代だもんね、あんまり詳しく歴史でもやらないし…」

呟いて、それでも飛鳥時代の歴史を記憶から手繰り寄せる。

「^{かすうきのみ}葛城皇子が力を延ばすのは、蘇我を打ち倒した故仕方ない事ではあるが…」

有間もまた、独り言のようにそう呟く。

「蘇我？^{そがの}蘇我入鹿^{いるか}？」

「知っているのか？」

たまたま耳に飛び込んできた言葉に記憶を刺激され、春菜はわずかに声を大きくする。

「^{なかのおえの}中大兄皇子^{おつじ}は？」

「ああ、葛城皇子の事だ」

有間の返答に、春菜は思わず笑みを浮かべる。

「蒸しご飯、作って祝おう大化の改新！」

言って笑い出した春菜に、有間はきょとした表情を向ける。

「なんでもない、こっちの話し」

まだ収まらない笑いの合間に春菜はそう告げ、すっきりした、と微笑む。

時代がわかったところでどうしようもないのだが、正体のわからない漠然とした世界が少しだけはつきりとしたような気がして、それだけでも春菜にはありがたかった。

「さあ、もう後少ししたら到着だ」

有間もまた柔らかに微笑み返すと、言って再び馬を進め、ゆっくりと山を下り始めた。

14、八菜女

有間と春菜が、町に辿り着くのと同時だった。

ありまのみこ
「有間皇子！」

方々から、悲鳴にも似た叫び声があがり、四方から人々が駆け寄ってきた。

「一体どちらに行つてらっしゃったのですか、お探し申し上げました」男が一人駆け寄りながら有間にその声をかける。

「少しね」

柔らかいがそれ以上尋ねる事を許さない響きを含んだ声音で有間は答える。

「とにかく、ご無事で安心致しました」

言つて男はようやく有間と共に馬上にいる春菜に視線を向けた。

「この娘は、どうされたのですか？」

馬の手綱を取り、通りを引いて歩きながら男はもう一度春菜に視線を向ける。

「湯治に共に行く事にした。身の回りの世話をするよううなめ采女とわらわ童を手配しておいてくれ」

慣れた様子で、指示を出す有間の前で春菜は表情を強張らせたまま周囲を窺った。

馬上の有間を取り囲むようにして、十人ほどの男が歩いていた。

何より、有間が皇子と呼ばれたのは春菜の聞き間違いだったのだろうか、と有間を振り返る。

有間は春菜を安心させるように微笑むと、前を向くよう目で促した。

町に入つた時の騒ぎはまだ序の口だったのだ、と春菜が悟つたのは宿についたすぐ後の事だった。

一行が泊っているらしい屋敷についた途端にまた同じような騒ぎになつたのだ。

周囲を取り囲まれ、どたばたと受け入れの準備をする人々の中、有間だけは一人ゆったりと構え、落ち着き払っている。

「どうぞ、こちらへ」

後ろから声をかけられ振り向くと、春菜と同じ位の年頃の少女が立っていた。

「わたくし、身の回りのお世話を任せました、八菜女やなめと申します。何かございましたら、わたくしにお申し付けくださいませ。御召し物を代えていただきたいので、こちらへどうぞ」

長い裳もを優雅になびかせて、八菜女は春菜を導く。

改めて周囲を見て、春菜は彼女達の服装が村や町で見るものとも着物ともさらに少し異なっている事に気がついた。

どちらかと言うと、中国的な服装だった。

町の女物の服装をさらに豪奢にしたようなものだった。

上は着物のようだが、腰から下は、長いスカートのようなふわりとした薄い裳を纏い、それを腰の当たりで帯のような紐のような物で止めている。

八菜女と他二人に導かれ連れて行かれた先は、湯屋だった。

あつと言う間に脱がされ、身体を洗われる。

慣れない事に驚いた春菜だったが、あまりの手際の良さに押され、されるがままに身を任せた。

湯殿を出ると、新しい服が用意されていて、また周囲に着せかけられながら春菜は、肌にかい布に腕を通した。

着物の着方に疎い春菜にはありがたい事だったので、今度もまた黙ってされるがままに身支度を整えてもらう。

長い裳は裾捌きが難しく、ぎこちなく一歩一歩踏み締めるように歩く。

ようやく全てが終わり夕餉の席に案内された時には春菜は完全に疲れきっていた。

「春菜、見違えたね」

先に夕餉の席についていた有間は、一瞬まじまじと春菜を見つめて

から、感心したようにそう言った。

「あ、有間あ」

もちろん春菜には、誉め言葉に喜ぶ余裕もなく、わずかな間離れていただけだと言うのに、久しぶりに会えたような奇妙な感覚を覚えながら有間を見た。

「なんで皇子って教えてくれなかったの？もう、びっくりして疲れちゃって」

ため息とともに心底疲れ切ったように言う春菜に有間は苦笑する。

「すぐ慣れるさ」

言って食べ始める有間に倣い、春菜も匙を持ち膳に並ぶ料理を口に運ぶ。

しかし、ゆっくり味わうには半日に渡る乗馬と、宿での騒ぎに疲れすぎていた。

よく味も分らないままに咀嚼し、飲み下す。

「皇子って事は、有間は大君の息子なの？」

「いや、私は、先代の大君の子だ。今の太君の子は葛城皇子だ」

言った有間の表情に、春菜はわずかに動きを止める。

春菜には何とも良く分からない、表情が有間の顔に浮かんだからだ。

（寂しいの…？）

そう口を突いて言葉が出そうになり、慌ててもう一口料理を口に運んだ。

襖を開けた有間と、部屋で迎える形になった春菜が思わず、ぽかんと相手の顔を見たのは、夕餉後少したった頃だった。

疲れただろうから、早く休みなさい、と有間に気遣われ、八菜女に寝具の準備をしてもらい、寝屋に案内されたのが、つい先程。

二つ並べられた布団に座り、はたと首を傾げた所で背後の襖が開いたのだ。

「春菜？」

春菜だけでなく、有間も幾分驚いたようにして寝間に入ると、後ろ手に襖を閉めた。

枕元に置かれた蠟燭の火の不規則な温かい光が、周囲をぼんやりと浮かび上がらせる。

「これは…困った」

有間の言葉に、はっと我に返り、春菜は慌てて布団から立ち上がった。

「あの、私」

「どうやら、夜伽よがいをさせるために春菜を連れてきたと、勘違いされてしまったようだね」

有間の言葉に、春菜の頬にわずかに赤みがさす。

「部屋を別に用意させ…」

言いかけて、ふと有間は春菜に視線を向けた。

「いや、それでは春菜の立場がないね。春菜さえ良いのなら、同室で良いかい？もちろん、私は何もするつもりはない」

春菜が小さく頷くのを確認すると、すぐに有間は横になった。

おずおずと、幾分気後れしながら、春菜も隣の布団に入る。

昼間の疲れからだろうか、横になった途端に睡魔に襲われ、何を考える暇もなく春菜は眠りに落ちて行った。

「珍しいですよ？」

翌日の移動中、話し相手にと八菜女と共に車に乗っている時の事だった。

「有間皇子は夜はお一人で過ごされる事が多いのです。こうやって都の外にお出になられる度宿泊先の豪族や有力者から夜伽に、と娘が送られてくるのですが、有間皇子はそれを一度たりともお受けになられた事はないのです」

（さすが飛鳥時代、男女の考え方がまるで違う）

八菜女の言葉に、赤くなりながら春菜は内心独り言ちる。

「でも、都には誰かいらっしゃるのでしょうか？」

確認のつもりで発した言葉は、八菜女が大きく頭を横に振った事で否定された。

「それが、そのようなお噂も特にわ。高貴なお生まれで、あれほどにお美しいのですから、お相手はごまんといらっしやるでしょうに」
心底不思議そうな表情で、八菜女は言う。

「変わった方」

春菜の言葉に、八菜女は本当に、と小さく笑う。

「あぐく、山でこんなにお綺麗な姫君まで拾われて」

有間が随従に山で記憶を失った女を拾った、と話したのを伝え聞いたのだらう。

八菜女は、優雅に微笑んで言うと、春菜を見る。

「姫君なんて……どこかの村娘かもしれないのに」

春菜は八菜女の言葉に、何とも言えない気持ちで苦笑いを浮かべる。

「まあ、村娘なんてとんでもない」

真剣な表情で向き直った八菜女に、春菜は思わずかに身を引く。それを引き止めるかのように、八菜女は春菜の手を取る。

「ご覧なさいまし、この御手を。村娘はこのような美しい手はしておりません。農作業で、豆が出来て固くなりますもの。御髪も、これ程お美しいのですに。少し短いのは残念ですが」

言って、八菜女は今度は春菜の肩より少し下まで伸ばした髪を一房手に取る。

染めていなくて良かった、とどこか場違いな事を思いながら、春菜は居心地の悪い思いを抱きながら八菜女を見る。

何しろ、春菜を褒める八菜女こそ美しい少女だったのだ。

可愛いらしい顔立ちをして、健康的な美しさのある少女だ。

始めこそ畏まっていたが、年が近い事もあり、すぐに打ち解けてからは良くしゃべる明るい子だった。

「それに、肌もくすみもなく日に焼けてもいません。このような村娘がいるはずありませんわ。どういいうきさつで倒れておられたのかは存じませんが、春菜様は、どこかの姫君に間違いありません」

あまりに自信に溢れた物言いに、春菜は笑い出す。

「何もそんなにむきにならなくても」

それにはっとしたように身を引いて八菜女は微かに頬を赤らめて俯いた。

「申し訳ありません。つい、熱くなつてしましまして…とんでもない失礼を」

八菜女の反応に慌てて、春菜は首を振る。

「違うの、そんなつもりじゃ。八菜女と仲良く出来て私は嬉しいの。突然良く分からない所に来てしまって、女の子の友達が欲しかったの」

満更嘘でもない気持ちを述べて、春菜は八菜女の手を取る。

「そんな、友達だなんて、身分が全然違いますわ」
慌てる八菜女に、春菜は笑いかける。

「私の身分なんて分からないじゃない」

零れ落ちそうな程に目を見開いて、八菜女はそんな訳には、と小さく呟いた。

「それに、春菜様は有間皇子がお連れになった方です。私のような采女がそのような」

困ったように言う八菜女に、春菜はもう一度笑いかけた。

「そんなの関係ない。ダメ？」

呆けたように春菜を見つめ、しばらくたって八菜女はゆっくりと頷いた。

「春菜様は変わった方ですね」

「変わってちやいや？」

八菜女の言葉に不安になって、尋ねると八菜女は笑って首を横に振った。

15、血筋

山間やまあいの細い道を列になって進む一行の、ちょうど真ん中あたりを進む牛車から、春菜は小さく顔を覗かせた。

はしたないと注意されたのも始めのうちだけで、行動を共にして三日目にもなると、呆れたように笑われ声をかけられるのみだった。有間とは、夜と食事時以外はほとんど顔を合わす事もなく、一日の大半を春菜は八菜女と過ごしていた。

「そんなに外が気になりますか？」

「うん。面白い」

呟くように返して、ようやく春菜は牛車の中の八菜女に顔を向けた。
「春菜」

不意にかけられた声に、もう一度春菜は外に顔を覗かせた。

「少し列から離れないかい？」

相変わらずの穏やかな笑みでそう尋ねる有間に春菜は笑って頷いた。

「どうしたの？急に」

有間の前に収まってから、春菜はそう言っただけで背後にいる有間を振り仰ぐ。

「いや、あんまり大人しく車に乗ってばかりだと、春菜が退屈するのではないかと思って」

ゆつくりと馬を進め、徐々に列から離れて行く。

「ありがとう。外の様子も見れないし、ほんとに退屈してたんだ」
春菜が礼を言くと、有間は小さく頷いた。

「それに、私もあまりあの場所は好きじゃない」

笑みを潜めて、付け足した有間に春菜は首を傾げた。

普段の有間の雰囲気とは違う、どこか人を寄せ付けけない表情だった。
「…あの場所？」

聞き返しても、有間は笑って首を振るばかりで返答は得られなかった。

諦めて春菜は前を向くと、有間は道ではないような木々の中を分け進んでいた。

人気は更になくなり、力が周囲に満ちているのが、肌に感じられた。力に包み込まれるような感覚に、春菜は目を閉じた。

「良い、とこだね」

目を閉じたまま、呟くように言う。

「力が、体に染み入ってくるみたい。すごく、安心する」

「春菜、分かるのかい？」

驚いたような、怪訝そうな、不思議な声音で尋ねられて、閉じていた目を開く。

「分かるって？」

「力が満ちているのが、分かるのかい？」

もう一度言われて、春菜はゆっくりと頷いた。

「うん。すごく安心する。それが？」

春菜、と呼ばれ振り向くと、思いの外真剣な有間の視線に行き当たった。

「力は、普通人は感じる事が出来ない」

「え？でも、時彦は…」

「感じる事が出来るのは、退魔師など、限られた者だけ。それも、退魔の術を使用した時のように、普段より多くの力が集まった時だけだ。自然にある力は、人の感覚に触れるには少な過ぎる」

硬い表情のまま告げられ、春菜は、でもと呟いた。

「私は、分かる。感じる。ダメな事なの？」

不安になって尋ねると、有間はゆっくりと首を横に振った。

「駄目、ではないね。有り得ないだけだ」

有間の言葉に困って首を傾げる。

「力を感じられるのは、大君の一族だけだ。時が経ち血が薄れた今は、大君の一族でも、一部の者にしか現れない力だ」

何の表情も浮かべずに、有間はただ春菜を見る。

「大君の一族だけ？」

「そう。言っただろう？大君の一族は玉依姫たまよりひめから力を受け継いでいるんだ。天地創造の力を」

「有間も？」

春菜の問いに、一瞬口を噤むと、有間は頷いた。

「今、力を受け継いでいるのは、私だけだ」

僅かの間静寂がその場を支配したが、不意に有間が微かに微笑んだ。「すまなかった。変な話をして。考えすぎだろう、きっと。春菜は遠い世の人間。どこかで大君の血が混ざってたまたま力を得たのかもしれない」

有間の言葉に春菜は曖昧に頷く。

実際の所、春菜は有間の言う事をよく理解してはいなかった。

正確には頭では分かっていたが、それがどういう事を理解していなかった。

何事においても、例外はあるもので、たまたまその例外に春菜が当たってしまっただけであり、春菜には何の問題もないように思えた。それ以前に、神話の世界と今が繋がっている事に戸惑い、この世界に来るまでは感じるどころか信じてすらいなかった所謂第六感のような話しに、実際に体験していながら現実味が湧かなかったのだ。

「力って、何が出るの？」

どこことなく気まずい雰囲気を拭い去ろうと、春菜は口を開くと、有間もいつものように答えを返した。

「力とは、無から有を創り出すもの。この世にある全ての物を創り出せる力」

「全てを？」

頷くと、有間は手の平を上に向け、春菜の前に差し出した。

何の前触れもなく、小さく音を立てて炎が上がり、有間の手の少し上の空で小さく燃える。

突然の事に驚き身を引くと、有間は笑ってすぐに炎を消した。

「力は、この世の源。生命の本質。女神は力を持って国生みをなす。すなわち、万物全て力が形作った物。自然にあるもので、力で創れない物は何もない」

「それって」

言いかけて、春菜口にするか迷ってからもう一度口を開いた。

「生き物も…人も生み出せる、って事？」

空恐ろさを感じながら、ゆっくり尋ねる。

春菜が出そうとした声より、少し小さく、僅かに掠れた声が喉から出た。

有間は、一瞬春菜に視線を向ける。

「可能だ」

言い切ってから、有間はふと微笑む。

「けれど、それは人の分に余る。私程度の力では、命なき物しか創れはしない。八百万の神々ですら、出来はしない。女神ただお一人だけしか、出来ない事だ」

「良かった」

思わず口を突いて出た言葉に有間が首を傾げた。

「どうして？」

「だって、命を生み出せるなんて、恐い。人ではなくなるみたいで…どうかした？」

呆氣にとられたように、春菜を見る有間に、何かおかしい事でも言っただかと首を傾げる。

「変わった考え方をする」

心底驚いたと言った風に有間は、春菜を見る。

「命を生み出せる事は、つまり力が強いと言う事で、神に近い。玉依姫の神聖な血筋に連なる者として、誉れ高い事であるとしたか、今まで教えられては来なかったし、そのように考えた事もなかった。俗人と交じらず、神聖な血を守り、力を限りなく純粋なものにする。それだけが、全てだった」

「でも、それは孤独って事だよね？」

春菜の言葉に、有間は表情を固くする。

「…そうだね。神聖であれ、孤高の存在であれ、と言う事は、孤独と隣り合わせの事だ」

「寂しいね」

有間はそれに微笑むにとどめ、それ以上言葉を返そうとはしなかった。

「春菜？」

突然表情を強張らせた春菜に、怪訝そうに有間が問いかけた。

「有間、物の怪が。みんなが危ない」

何度目になるだろうか、無意識に感覚の端を捉える感覚に、春菜は眉をひそめた。

一向にこの背筋が粟立つような感覚に慣れる兆しは見えない。

「物の怪？」

一度問い返すと、すぐに有間は、手綱を取った。

「私、わかるの。物の怪が現れる直前に。力がおかしくなるの。有間も感じる？」

うわ言のように呟くと、いや、と短い返答が返ってきた。

「そのような力は、私にはない」

馬を駆けさせて、少したつた頃だった。

「ああ、間に合わなかった」

有間が搾り出すように言うと同時に、春菜にもそれが伝わった。

力の揺らぎが大きくなり、染み付いて忘れる事の出来ない物の怪の気配が現れたのだ。

怖気が走り、体が強張るのを感じ、春菜は着物の端を強く握った。

物の怪に近づくにつれ、叫び声と悲鳴が耳に届くようになった。

同時に木々の間から、物の怪の、煙のような姿と、人々の列が垣間見えるようになる。

車と、歩きの随従を後ろに回し、武装した男たちが物の怪に対峙しているようであったが、追い詰められているのは誰の目にも明らかだった。

男たちが射掛ける弓矢は、物の怪に傷をつけるどころか、当たる事すら出来ずに、背後の地面へと落ちていく。

剣も空を切るばかりで、物の怪はずると、そのはつきりとした濃い黒い煙のような身体をずると地に引きずるようにして男たちに迫っていく。

「下がれ！手を出すな！」

それらを目にすると同時に、背後から有間が大声を上げた。

「皇子様！」

「有間皇子！」

随従の間から、声上がり、それに気づいた男たちがすぐに物の怪の前から退いた。

同時に物の怪が春菜を見た。

今回は文字通り見たのだ。

前回見た物の怪とは違い、そのどろりとした身体のちょうど真ん中より少し上に、ぎよろりとした、異様に大きな血走った目があったのだ。

煙のような身体に浮かぶ眼に、春菜は思わず息を呑んだ。

（目が、離せない…）

目があった、と思うとまるで目に見えない力が働いているかのよう

に、物の怪の目から視線を外す事が出来なくなったのだ。

（目を逸らせば…喰われる）

確信だった。

隙を見せれば殺される。

呼吸すら忘れ、物の怪の目を見つめていた春菜の後ろで、有間が馬から飛び降りた。

ごく自然に有間は何の気負いもないかのように、物の怪に歩み寄った。

春菜に向けられていた物の怪の視線が、有間に向くと同時に、有間を取り巻くように煙がずりと動いた。

それにちらりと視線を送り、有間はつと手を物の怪に向けた。

その腕に絡みつく煙が、這い登っていく。

喰われる、と思った次の瞬間だった。

突然、馬上で見たのと同じ炎が物の怪を包んだ。

一度大きく燃え上がったかと思うと、すぐに収まり、ぼろぼろと燃えかすのような砂のようなものと、薄い灰色の煙に変わって、物の怪の姿は掻き消えていた。

「怪我人は？」

有間の声に、春菜ははっと我に返り周囲を見回した。

大きな怪我を負った人はいないようで、ほとんどの者は無傷だった。「列が整い次第出発だ。それまでに怪我人は手当てを受けておいてくれ」

慣れたように指示を出し、有間は春菜にも牛車に戻るようにと行って、すぐに離れて行った。

大人しくその言葉に従い、牛車の中を覗き込む。

「春菜様」

春菜の姿を目にし、ほっとしたように表情を和らげて八菜女は微笑んだ。

「良かった。有間皇子とご一緒でしたから、滅多な事はないと思いましたが、安心致しました」

心底ほっとしたように言う八菜女に、春菜も表情を緩める。

「八菜女こそ、無事でよかった。列が進みだすまで、牛車で大人しくしてろ、って言われて」

言いながら、春菜は八菜女の隣に座る。

「最近には本当に物の怪が多いですね。わたくし達は、有間皇子がいらっしゃるので、安心ですが」

八菜女の言葉に、物の怪を払う事が出来るのは、力だけだ、と言っていた時彦の言葉を思い出し、うなずいた。

「これも巫女姫の加護のお陰ですね」

聞きなれない単語に聞き返すと、八菜女は不思議そうな表情をして春菜を見た。

「これも忘れてしまわれたのですか？大君のご一族は巫女姫の血に名を連ねる高貴な方々ばかりですわ。女神に愛され加護と力を与えられたのです。有間皇子は特に神に愛されたお方ですから、力もすばらしいですわ。都で有間皇子以上の力の使い手はおられませんの」

「退魔師もかなわないの？」

「それは勿論。退魔師は、力を八百万の神々から許可を得て借り受ける事によって物の怪と対抗するので、全然違います」

八菜女の言葉に春菜は首をかしげる。

「何が違うの？」

「有間皇子は、ご自身の体に力を宿されているのです。ご自身の力ですから、退魔師のような借り物ではなく、もっと自由自在に使えますし、神々に伺いを立てて許可を得る必要もありません」

詳しい事はわかりませんが、と付け加えそう説明すると、八菜女はああ、と思い出したように声を上げた。

「そう言えば、だから退魔師は有間皇子と違って、人には無力なのだそうですね？神々は物の怪が現れなければ、力の使用の許可を出しませんから。ですから、人と人の戦いになれば、ただ人の退魔師と力を扱える有間皇子とでは戦いにもならないそうですね」

16、神の加護に呪われた血

「今宵の宿が変更されたようですね」

物の怪も出ましたし、と言う八菜女の声に、春菜は現実引き戻された。

春菜は退魔師、大君、有間、力、玉依姫、手に入れた知識が多すぎてその事についてぼんやりと物思いに耽っていたのだ。

全ての人が間違っているとは言切れない。

それなのに、退魔師と大君は戦い、時彦と有間は殺し合おうとした。力、八百万の神々、許可、全てが不可思議だった。

春菜の力ではどうしようもない、けれどどうしても仕様がなないとは思えない対立。

「玉依姫は、どうして地上に残されたの？」

考えていた事が声になって出てしまっただけから、はっとして口元を押さえた。

「まあ、何を考えてらっしゃるのかと思ったら。女神は、物の怪の事もありますし、まだ安寧には程遠い葦原を思われて巫女姫を残されていかれたと言われていますよ」

「…そう、だね。葦原のため…物の怪が出る葦原の」

呟いて、春菜は思いを振り切るように首を振った。

「それで、宿だったわけ？もう着くのか？」

「ええ、すぐに」

言葉通りに、僅かの後に牛車が止まり、春菜はようやく地に足を着ける事ができた。

「今日は、大変な一日でしたね。明日は無事に進めれば良いのですが」

八菜女の言葉に心から同意しながら、宿に指定された所へと春菜は足を向けた。

急に用意されたと思われる、村の長らしき人物の離れがその日の宿だった。

いつものように、一人でそこまで行き、襖を開けて、春菜は凍りついていた。

有間は普段通りに布団の上にいたのだが、そのすぐ脇に白い夜着に身を包んだ見知らぬ娘がいたのだ。

「春菜」

入り口で立ち尽くしていた春菜に声をかけ、有間が側に来るように目線で促した。

どうしようか、と考える前に、体が動いていて、春菜は有間の隣にまで進んだ。

そこで、つと腕を取られ軽く下に引かれた。

突然の事に均衡を崩して、春菜は有間の腕の中に倒れ込むようにして膝の上に抱かれた。

「あ、あの」

動揺をそのまま表情と声に出した春菜を、有間は目線で黙らせた。

「私には相手がいるんだ。ありがたい申し出ではあるが、今回は断らせてもらう。せつかく器量も良いんだ、好いた相手と共に夜をすごしなさい」

諭すように告げる有間を見て、娘は視線を逸らした。

「あの、ですが」

傍目にも緊張しているのが分かるほど、表情も声も強張らせて娘はそれでも食い下がろうと、頭を下げた。

そこで、有間の意図を理解して、春菜は大人しく有間の腕の中に納まっていたが、どうにも居心地が悪く、どのような顔で娘を見てよいか分からずに、春菜は有間の方へと顔を向けた。

「わ、わたくしも、皇子様のお相手を、と。朝まで家には入れないと、追い出されてしまいました…」

突き放される事など予想せずに、覚悟を決めて来たのであろう娘は本当にどうしたら良いのか分からないといった様子で、有間に視線

を送る。

少しの間それを眺めてから、不意に有間はため息をついた。

「大丈夫だ。私は夜伽の相手を求めた事は一度もない。こちらで慣れている。随従が良く計らってくれるだろうから」

それでも困ったように動かない娘に痺れを切らしたのか、有間は春菜と娘を見比べた。

「君がそこに居て、見ていたいのなら、それはそれで私は構わないのだけど」

言って有間は、春菜を抱きすくめた。

「え、ちよつと、待つて」

慌てて離れようとしたが、思いの外強い有間の力に負け、春菜はそのまま有間と共に布団に倒れ込んだ。

「し、失礼致しました！」

上擦った娘の声と、ばたばたと足早に遠ざかって行く足音を有間の胸板に視界を阻まれたまま聞こえ、すぐに部屋は静かになった。

「あ、有間」

至近距離に浮かぶ有間の顔に思わず顔を赤らめて名を呼ぶと、すぐに有間は春菜から離れた。

「急にすまなかった。ありがとう、助かった」

けろりとした様子で言う有間が恨めしく思えた。

「何も、ここまでしなくても。あの子もかわいそう」

ちらりと有間を見てから、何となく気恥ずかしく感じ、春菜はすぐに視線を逸らした。

「かわいそう？周囲に言われ、もてなしの一環として、拒否する事も出来ずに差し出されていく方がかわいそうだと私は思うが」
言われて、春菜は言葉につまった。

「それは、そうだけど。でも、もう少し優しいやり方が…」

「私が優しくした所で、彼女達には私と共に一夜を過ごす以外の選択肢がない。それならば、突き放す方が良い。優しくしたところで彼女達は引き下がるという選択肢はないんだ。ちゃんと誰か対応し

ているだろう。こんな事にはなれているから。それとも、彼女達の立場を思つて、抱けば良い、と春菜は言うのかい？」

直接的な表現に、顔に血が昇るのを感じながら、春菜はようやく有間の顔を見た。

「なんで、有間は恋人がいないの？皇子なら、子供を残さないといけないんじゃないの？こういうのだって、この時代なら、常識じゃないの？どうして、わざわざ一人きりの道を行くの？」

八菜女の言葉を思い出して、疑問に思っていた事がつい口を突いて出てしまった。

「…興味がないだけだ。私は一人で良い。子供が欲しいとは思わない。私は、この血を残したいとは思わない」

「本当に？」

重ねて尋ねると、有間はいつものように微笑むとうなずいた。

「…じゃあ、どうしてそんなに悲しそうな顔をするの？」

虚を突かれたような表情で、有間は動きを止めた。

言おうか言うまいか、逡巡した後、結局春菜は口を開いた。

「有間は、いつもそうやって笑ってるけど、悲しそう。笑ってるのに、悲しそうで、寂しそう。特に大君の話とか、家族の話とか、そんな時、いつも寂しそう」

ただまっすぐ有間の目を見つめた。

急に虚ろになったようで、何の感情の動きも映さない瞳が少し怖かった。

（初めて会った時にも、こんな目をしていた）

不意に思い出して、納得した。

初めだけではなかった。

いつもにこやかに穏やかな柔らかい笑みを浮かべながら、それでも有間の瞳は感情に乏しかった。

何の色も写さない瞳は寂しそうで、悲しそうで、ただ絶望の色だけを浮かべていた。

春菜はそんな瞳を良く知っていた。

春菜の世界では、多くの人がそのような瞳を持っていた。

楽しそうに笑いながら、友達としゃべりながら、それでもいつも寂しそうな、何かを諦めたようなそんな瞳を持つてる人はどこにでもいた。

「有間？」

突然顔を下げた有間に、小さく声をかけると、彼の肩が揺れた。

小刻みに肩が動く。

顔を上げると、有間は笑っていた。

くつくつと、どこか壊れたような笑いだった。

「私は狂っているんだ。私だけじゃない。私の一族は狂っている」
唐突に話し出した有間に戸惑いながら、春菜は黙って耳を傾けた。

「私は湯治に行く、と話さなかったかい？」

「うん。そう言ってた」

同意すると、有間はさもおかしそうに笑う。

「何を治しに？ 私は怪我也病も何も患ってはいない。そう見えないかい？」

尋ねられて、春菜は黙って頷いた。

実際有間は健康そのもののように見えた。

「では、何を治しに？」

言われて、春菜はようやく矛盾に気付いた。

「私はどこも悪くない。それでも湯治に行く。何故？ 湯治なんて、口実だ。私はただ逃げたんだ。逃げるために心を患い、気を狂わせた。そうして逃げ出した。ただ、それだけだ」

「…何から？」

要領を得ない有間の言葉を理解しようと、必死で頭を働かせながら、春菜は問いかけた。

「大君から。葛城皇子から。朝廷から。私は前大君の息子。現大君の息子は葛城皇子。大君は葛城皇子に位を譲りたい。つまり、私が邪魔なのだ。さらには、私は大君の家系に伝わる力を受け継いでいる。今の世でただ一人。邪険にするには脅威で、だからと言って邪

魔には変わらない。あわよくば、退魔師に殺されればよい。それが彼らの本音だろう」

あくまで淡々と語る有間は、諦めたように事実を述べる。

「私の祖父は幼い頃になくなり、有力な後ろ盾をなくし、さらに父をも亡くした。父は、実の姉に、甥に、姪である妻に、朝廷の官僚に裏切られ、無念の中で死んだ。そして、私は父を裏切った朝廷の中でこうして生きている」

春菜に語ると言うよりは独白に近い声音で有間は続ける。

「叔母が大君になり、更に私は疎んじられるようになった。もう、長くはないだろう」

いつだったか聞いた、有間の声が蘇ってきて、春菜は目を伏せた。

（私は朝廷の無用の長物だからね）

ようやくその意味がわかった。

皇位継承権を巡る血みどろの親族間の争い。

「だから、私は子など為したくはない。私の子など生まれながらに危うい立場に違いない。濃くなりすぎた呪われた血は、いつか絶える」

「でも、有間は悪くない。有間、苦しそう。有間は何も悪くない」

強い色を瞳に浮かべて、春菜はそう言った。

「私は、なんにもこの世界の事知らない。有間の事も、朝廷の事も、有間は良い人って分かる。有間が苦しむ必要ない」

言い切って有間を見ると、彼は口元を緩め笑った。

感情の伴わないおかしいような笑みだった。

「良い人？私が？本当に？春菜は私の何を知っている」

声を上げて笑うと、有間は春菜を見据えた。

そのまま、腕が伸び、春菜の肩に触れた。

「有間？」

問い掛ける春菜の声には答えずに、今度は本当に春菜を抱きしめた。「何を知っている」

もう一度耳元で囁くように言われ、春菜の背中に回る腕の力が強く

なる。

「生き抜くために身に付けた面。これ以上に波風を立てず生き延びるように。お前を拾ったのもただの気まぐれ。暇潰し。違うと言いつけるか？私は、ずっと壊してしまいたかった」

体重をかけられ、春菜は支える事が出来ずに、ゆっくりと後ろに倒れ込んだ。

「本当は、めちゃくちゃに全てを壊してしまいたかったんだ」

吐き出すように呟く。

全身に有間の重みが伝わってきた。

肩に埋めるようにしていた頭をゆっくりともたげ、有間は春菜と視線を合わせた。

今にも鼻先が付きそうな程の至近距離。

冷たい色を浮かべた有間の瞳は、やはり寂しそうで、迷い子のようにだった。

思わず両手を有間の背に回し、わずかに力を込めた。

「有間、苦しいなら苦しいって言えば良い。全てが憎くても、それでも有間は壊さなかった。有間とはまだ会ってちょっとしか経ってないけど、良い人だってちゃんと分かる」

「…このまま、春菜を壊してやりたいと思っているのに？」

それに、春菜は黙って頷いた。

「だって、ほんとにそうしようと思ってたら、そんな事言わない。

それに、そんなに苦しそうな顔しないよ。有間は恐いだけだよ、きつと」

「恐い？」

聞き返されて、春菜は微笑んだ。

「私はこの世界の人間じゃない。だから、大君とかそんなの関係ない。絶対、私は裏切らない」

自信を込めてそう言つと、ただ有間は黙って春菜を見た。

「…そんな顔しないでよ。私、有間の事好きだよ」

「え？」

面食らったようにわずかに、上体を春菜から離れた有間に、春菜は慌てて言葉を続けた。

「あ、や、好きって、友達としてって言うか、他意はなくて」
春菜の様子に、ようやく有間が小さく笑った。

「この状況での好き、は普通違う好きになるけどね」

「だって、それは、有間が！」

むきになり、顔を赤くする春菜に、有間は更に笑みを深めた。

「ね、有間、ちょっと離れない？なんかちょっと」

未だに春菜の上にいる有間にそう告げると、有間はわずかに間を空けてから口を開いた。

「誓って何もしない。今日だけ、このまま寝ては駄目かな」

その口調に思わず黙り込む。

返事の代わりに、背中に回した腕にわずかに力を入れると、安心してように有間が笑う気配がした。

上に乗っていた有間の体が横に移動し、今度は包み込まれるように腕を回された。

何となく気恥ずかしく、顔を上げる事が出来ずに目を閉じた。

しばらくして、夢の中へ誘われる直前、夢と現の狭間で、ありがとう、ごめん、と小さく呟く声がしたような気がしたが、そのまま春菜は眠りに落ちていった。

17、既視感

何度目になるだろうか。

目の端に捕らえた人の姿に思わず逃げ出してから、春菜はため息をついた。

昨日の物の怪騒ぎの影響もあり、一日村に滞在してから出立する事になり、春菜はゆっくりと時間をすごしていた。

退屈な牛車に長時間揺られる事もなく、本来なら喜んでいたのだろうが、今日ばかりはそうも言ってられなかった。

「私何やってんだろ、ほんと馬鹿」

悪態をついてみても、どうしても落ち着かずに場所を移そうと、後ろを振り向いた時だった。

「やあ」

心臓が止まるのではないかと思うほどに驚いて、春菜は一步後ろに下がった。

悲鳴を上げそうになったのを何とかこらえて、ぎこちなく笑顔を作った。

朝からずっと逃げ隠れていた今一番会いたくない人物が背後にたっていたおかげで、笑うことを忘れたかのように頬が強張りうまく笑えなかった。

「そんなに逃げる事ないだろう。いくら私でも少し傷つくな」

いつもの笑みを浮かべた有間に、春菜は思わず視線を逸らした。

「だって…」

言い訳をしようとしたが、何も思い浮かばず言葉を濁し、ただ視線をさまよわせた。

「春菜、顔、真っ赤だよ」

唐突に告げられた言葉に、春菜は思わず両手で頬を押さえた。

手のひらに熱い己の頬に更に恥ずかしくなって、後ろの壁に背中を預けて座り込んだ。

「有間の馬鹿！」

酷いな、と笑う有間の顔を見れずにそのまま膝に顔を埋める。

「私は、あんな事の後にすぐに平気な顔してられる程大人じゃないの！」

春菜の言い分に苦笑して、有間も春菜の隣に座り込んだ。

「あんな事って、別に何もなかったのだけどね」

「有間にとってはそうだろうけど、私には違うの！」

思い出すだけで恥ずかしくなって、更に強く頭を膝に押し付けた。

今朝も、起きると目の前に有間の顔があつて、朝から春菜は絶叫するのではないかという思いをしたのだ。

抱きしめられたまま寝た事を思い出して更に恥ずかしくなり、そのまま春菜は有間に近づかないよう、昼過ぎまでずっと有間の姿を見かける度逃げ出していたのだが、とうとう捕まってしまったのだった。

「あー、無理無理無理無理。恥ずかしくて死ねる！」

「昨日の夜は普通だったのにね」

「…もう、からかいに来たの？」

ようやく顔を上げると、有間は首を横に振った。

「いや。…昨日は悪かったと思って」

笑みを収めて言う有間に、春菜も自然に表情を引き締める。

「本当にすまなかった」

「やめてよ、私怒ってないのに」

今度は別の居心地の悪さを感じて、春菜は慌てて立ち上がった。

「私も普通にするから、有間もあんまり気にしないでよね」

半ば捨て台詞のようにして言うだけ言うと立ち去る春菜の姿を見送って、有間は目を伏せ、小さく息を吐いた。

当てもなく歩くうちに、いつの間にか村の外れまで来てしまい、春菜は立ち止まった。

何となく村の外に出てはいけない気がして、春菜は方向を変え、村

の外をぐるりと回るようにして歩き出した。

一人になる瞬間は現実味のないこの世界から切り離されて、中学生の春菜を思い出させて好きではなかった。

それでも、あまりに一人になる時間が少ないと、今度は中学生の春菜がいなくなり、現実味のない世界がだんだんと現実味を帯びてくるようで怖かった。

一度考え出すと、際限なく春菜の世界を思い出して、どうしようもなく不安になる。

夢だ、といつか帰れる、と安易に納得するにはこの世界の事を知りすぎて、その度にどうしようもない孤独感に襲われた。

この世界は好きだったが、それでも元の世界が恋しくくないと言えば嘘になる。

けれど、いくら恋しいと思った所で春菜にはどうしようもない事柄で、考えるだけ辛かった。

ただぼんやりと歩いていた。その為、足元の注意が疎かになり、何かに躓いただけだ、と初めは思った。

転びそうになった所を、たたらを踏んで、立ち止まった。

躓いたにしては何かが絡み付くかのような違和感に、足元に視線を落とした。

同時に、何度目になるだろう、瞬時にそれと分かる感覚に包まれ、小さくうめき声を漏らした。

なぜ気付かなかったのか。

周囲に満ちるこれほどまでに禍々しい空気、息苦しさすら感じる程に重たい空気。

足に絡みつく淀んだ暗い色をした煙のような物。

痛いほど心臓が大きく脈打っている。

何か、わずかでも動けば、それが最後になるような、張り詰めた緊張感に、気取られぬように、そろそろと眼だけ動かし後ろの気配を伺った。

これ以上ないほど早く心臓の鼓動が、すぐ耳元で鳴っていた。意を決し、振り返ろうとしたその時に、ぼとりと上から物の怪のどろりとした体の一部が落ちてきた。

悲鳴すら上げる余裕なく、春菜は横に飛んだ。

思考はいたずらに空転し、打開策を求めていたが、有効な策は何一つ思い付かず、ただ少しばかり距離の出来た物の怪を凝視する事しか出来なかった。

逃げ出そうにも、足を絡めとられていては動けない。

どうすれば良い、と答えの出ない自問自答を繰り返す。

有間、物の怪の気配に気付いているのだろうか、そう思い、周囲に視線を向けるが人の気配は全くない。

有間が来るまで持ちこたえればあるいは、と物の怪から視線を外す事なくそろそろと立ち上がる。

が、立ち上がる事叶わず、そのままずると足を引かれた。

引きずられながら、手当たり次第に周囲に転がる石や、果てには砂を投げ付けるが物の怪は動じる気配すら見せない。

目前に迫った物の怪の、独特の臭いに春菜は息を詰まらせた。

のしかかられる圧迫感と息苦しさに、意識が遠退く。

物の怪の気配に有間が気付かないはずはない。

ならば、もう到着してもおかしくないはずだ、と遠退く意識の中で考えるが、とうとう全身を物の怪に包まれ、周囲を伺う事すら出来なくなっていた。

自分の体の範囲すら捕らえる事が出来ず、物の怪に侵食される不可思議な感覚。

これが、喰われると言う事か、とどこか麻痺し、恐怖すら感じなくなっていた頭でぼんやりと考えた。

周囲に満ちる力と隔絶した状況になって初めて、春菜は自らの内に宿る力を感じていた。

全ての元、生命の源、つまりは春菜が春菜であるための核。

その力を、物の怪が喰らおうとしているのが手に取るように分かつ

た。

物の怪が、その力を喰らおうとした瞬間、それまで霧がかかったようだった意識が唐突に鮮明になり、同時に凄まじい恐怖が蘇ってきた。

恐い、死にたくない、消えたくない、生きたい、渡してはいけない、禁忌を犯してはいけない。

ただそれだけだった。

何かが弾けるような不思議な感覚がしたかと思うと、春菜の意識は今度こそ本当に闇にのまれていった。

何故。

どうして。

私だけ。

幾度も廻る。

何故。

どうして。

私だけ。

もう一度。

何故。

どうして。

願うのは、ただ普通の幸せ。

18、子孫

空気を伝わってきた感覚に、有間は顔を上げた。

幼い頃から幾度となく感じ、あまりに身近になりすぎた感覚だった。初めて宮の外に出されたのは、九つの時だった。

今考えれば、有力な後ろ盾であった母方の祖父である左大臣が死んだ事がきっかけだったのだろう。

有力な後ろ盾のない、何の実権も待たない名ばかりの大君の一人息子。

どれ程危うい立場か。

稀有な力を理由に、物の怪を退けよ、退魔師を倒せ、と命じては宮から追い出し、その実あわよくば、死ねば良い、と。

物の怪に、退魔師に殺されれば良い、不慮の事故で死ねば良い、と。いつそ自分を殺せる程強い存在が現れれば、と思った時期もあった。けれど、彼を殺せるほどの物の怪も退魔師も刺客も現れず、ただ行き場のない悲しみと怒りと絶望をぶつける為だけに力を使った事もあった。

有間は生を諦める程には弱くなく、自らを殺める程には強くなかった。

思い出した昔に、小さく笑って有間は物の怪へと歩みを進めた。時が経つにつれ器用になり、心を殺す方法も知った。

上手く生き抜ける術も知った。

けれど、その殺したはずの心の奥底は何も変わっていない事も知っていた。

結局有間は、余計な半端者、邪魔者でしかない自分に別の居場所が欲しかったのだ。

誰に憚る事なく生きていける場所、在るだけで疎まれる自分の存在から逃れたかったのだ。

「逃れる事など、出来はしないと言っのにね」

呟いて、ようやく見えた物の怪の姿に気を引き締めた。

村の外れ、ちょうど森と村との境界線のあたりに、その物の怪の姿はあった。

民家からも少し距離がある。

あの場所ならばまだ誰も犠牲は出ていないだろう、と思った時だった。

物の怪の下にわずかに白い色が見えた。

はっとして目を凝らすと、白い腕が救いを求めるかのように有間の方へと伸びていた。

『あれでは、もう助からない』

助かるかもしれない、助けられるかもしれない。

そのような考えは微塵も有間には思い浮かばなかった。

死を傍観する事にあまりに馴れすぎていた。

幾人もの刺客、退魔師を自らの手で殺し、何人もの人々が物の怪に喰われる姿も見てきた。

今更人一人の命を助けようと必死になるには、有間はあまりに多くの死を見つめすぎていた。

それは、例え犠牲者が随従の一人であつても、顔見知りであつても変わらないはずだった。

現に今までもそうしてきたはずだった。

あがいた所で人は死ぬ時には、呆気なく死んでいくのだ。

けれど、今回だけは腕に纏わり付く着物の柄に有間は動揺していた。確かにあれは今日春菜が身に付けていた物と同じだった。

もう腕は見えなくなり、完全に物の怪の内に取り込まれていた。

『どうする』

早く倒せと急かすかのように、有間の周囲で力がざわめいた。ふわりと風が自分を取り巻くのが分かる。

『まだ、生きているかもしれない』

取り込まれたばかりだ。

おそらくまだ生きている。

物の怪が喰らうのは基本的に力だ。

この手の物の怪は力を宿す器まで喰らいはしない。

今風で物の怪を切り裂けば、中の人まで死にかねない。

けれど、取り込まれた人を無事に助け出す方法など有間は知らなかった。

今までやろうとした事もなければ、考えた事すらなかったのだ。

無理だと思えば切り捨て、助かると思えば助けた。

そこに有間の心情が介入する余地も必要もなく、ただ単純な客観的な事象の判断でしかなかったはずなのだ。

結局考えた所で、何の解決策も思い付かない。

いつもと同じように傍観しようと、自分に言い聞かせるのはとうに諦めていた。

どうしてもこの命だけは見過ごせず、諦められなかった。

狂おしい感情を、有間は持て余してただ何かしたいと言う思いだけで動いた。

完全に力を喰らい尽くされる前に、有間が物の怪の内に飛び込み、春菜を無理矢理引きずりだす。

無謀ではあったが、他に有間には何も思いつかなかったのだ。

そのまま、物の怪の内に飛び込もうとした、まさにその瞬間だった。何の前触れもなく、突然物の怪が霧散したのだ。

何が起こったのか、と呆然と立ち尽くすうちに、黒い霞が徐々に薄くなり、中心に横たわる人の姿が浮かび上がり、慌て有間は駆け寄った。

「春菜！」

珍しく血相を変え、叫ぶようにして名を呼ぶ有間に、春菜はぼんやりとした視線を送った。

「有間？私、物の怪に……有間が助けてくれたの？」

意識がある事にほっとしたようにして、有間は春菜の体を抱き起こした。

「良かった」

安堵のあまり、思わず春菜を抱きしめて小さく有間は呟いた。

細く頼りなげな華奢な肩の線に、このまま存在が消えてしまうのではないか、と不安になり、有間は両腕に更に力を込めた。

「有間？心配、してくれたの？」

「本当に良かった」

有間の腕の中が心地良く、春菜はゆつくりと目を閉じた。

「ちよつと、疲れちゃった。少し、寝て、良い？」

掠れた、一言一言を区切るように話す声を耳元で聞いて、有間は小さく頷いた。

「有間、ありがとう」

眠りに落ちる直前、呟くように伝えられた言葉に有間はわずかに冷静さを取り戻した。

「ありがとう？」

口に出してさらに冷静になり、首を傾げた。

投げ込まれた疑問によって出来た小さな波は、けれど消える事なく有間の心にしっかりと居着いた。

死んだように眠り続け、ようやく春菜が目覚めたのは、翌日の明け方の事だった。

枕元で、難しい表情で考え込んでいた有間は、春菜が起きた事に気がつくのと、すぐに笑顔になった。

「もしかして、ずっと起きてたの？私どれくらい寝てた？」

周囲を見回し、すでに日付は代わっているだろう事に気づき、春菜は申し訳なさに有間に視線を送った。

「もうすぐ夜が明ける。どうせだから、朝まで寝ていてよかったのに。もう体は平気かい？」

「うん。ただちよつと疲れただけだったから」

春菜の返答に、よかった、と笑みを浮かべて有間は、すぐにまた口を開いた。

「春菜、物の怪の中で何があった？」

有間のいつにない真剣な表情に気圧されて、春菜は言葉を詰まらせた。

「何でも良い。感じた事を話して欲しい」

こちらに来てすぐに、時彦にも同じような質問をされた事をぼんやりと思い出し、軽く既視感に襲われながら、春菜は口を開いた。

「あの時は、ぼんやりしていて、物の怪が出て来るまで気付かなくて、気付いた時には、もう間近に物の怪が迫っていて、すぐに物の怪の中に取り込まれてしまつて。物の怪の中では、なんだか自分と物の怪の境界線がなくなっていくみたいだった。体の感覚がなくなつて、自分の範囲がどこまでかわらなくなつた頃、周囲にあつて当たり前だった力がなくなつて初めて、自分の中に力がある事に気付いたんだよね。そしたら、物の怪が力を取り込もうとしてるのを感じて、…そして、気が付いたら有間がいた」

「本当にそれだけかい？」

顔を覗き込まれるようにして尋ねられ、春菜はもう一度その瞬間の事を振り返つた。

物の怪に足を絡めとられた恐怖。

物の怪の中の、何もない真っ暗な闇。

まるで侵食されるようにして、喰われかけた己に宿る力。

今も目を閉じると、春菜の内に宿る力を感じる事が出来た。

一度気付いてしまえば、気付かないでいた事が不思議な程確かに力は存在していた。

「そうだ、物の怪が消える直前に、何か、弾けるような不思議な音を聞いたような気がする」

「弾けるような音…」

有間はその言葉に考え込み首を傾げた。

布団のすぐ脇に座る有間の心臓当たりに、春菜はつと指を添わせた。「有間にもあるね」

小さく確かめるように呟く。

視線で何があるのかと尋ねる有間に、春菜は軽く笑んだ。

「力」

ただ一言、答えてから春菜は視線を有間から外した。

「不思議だよ。ここは力に満ちてる。木々には木々の、人には人の、独特の力」

黙って春菜の言葉に耳を傾け、有間は小さく頷いた。

「木々の力は、泰然と、静かにけれど力強く存在し、風に宿る力は、時に優しく、包み込むように、時に激しく、荒々しく全てを威圧するように、人に宿る力は、生き生きと躍動し、街は集まった人の力で活気に溢れている」

後を引き継いだ有間に、春菜は同意した。

「私はね、春菜。この力の感覚を共有する人に初めて会った。自らの裁量で、神々の許可を得る事なく力を扱える人以外には、力の感覚を捉える事はできない。私は物の怪を倒してはいない。あれは春菜の力のはず。おそらく春菜は遠くどこかで大君の血を引いているのだろう。たまたまその血が色濃く出た稀有な存在なのだと思うよ」有間の穏やかな声は、すんなりと春菜の胸の奥に落ちていくようだった。春菜ははたと首を傾げた。

「え？それって、私が大君の子孫？」

事もなげに頷く有間に、春菜は横に首を降る。

「いや、ない、それは。そんな高貴な家系じゃないもん」

さも可笑し気に笑って有間は春菜の言葉を否定した。

「私の家系は、民草にも十分種を撒いているからね。時の隔たりもあれば、どこかで血が混ざっている事は有り得ない事ではないよ」

そう言われれば、春菜には反論する事も出来ずに黙り込んだ。

「でも、春菜は力を扱えないのだよね？」

それに頷くと、有間は困惑したように春菜を見た。

「けれど、力を持つ者は、誰に教えられる事なく力の扱い方を覚えるものだ。幼い頃から、風と戯れ、自然の中でいつの間にか力を扱う術を学ぶものだ。力は、私のような力を扱う者には優しい。意思

を持つかのように、周囲に集まってくれものなんだ。そして、幼子
が何でも遊び相手にするようにして、力と戯れやがて様々な事が出
来ようになる」

例えば、と有間は腕を上げる。

「風を創る事も」

同時に締め切ったはずの薄暗い室内で、突如空気が動いた。

春菜の周囲を巡り、髪に絡むようにして遊ぶように吹くと、すぐに
また風は止んだ。

「炎も、水も」

有間が口にする度に、それらのものが現れては消えていく。

一度見た光景ではあっても、やはりまた慣れず、不思議な出来事を
前に、春菜は戸惑っていた。

「私、こつちに来るまで、力なんて全然感じなくて。多分、私が居
た所は、すぐく力が薄らいでるんだと思う。神様の存在だって、こ
んなに近くないもん」

感じた事をそのまま口にする。

「では、春菜は力の使い方を知るべき時に知る事が出来ないままき
てしまった事になるのかな。それは…困った」

何が困るのか、と尋ねると、有間は真剣な表情で春菜を見た。

ちようど、外が明るくなり始め、有間の真剣な目の色がはつきりと
見て取れた。

「力を扱える者は得てして、物の怪に狙われる。なぜかは知らない
が、おそらく、中に宿る力に惹かれるのだろうね。だからこそ、自
分の力で物の怪に対抗出来ないのは危険だ。力を扱う事の出来る幼
子は、対抗出来ずに命を落とす事も多い」

それに、と一呼吸置いてから、有間は続ける。

「本来知るべき時に力を扱う術を学ぶ事が出来なかったのは痛い。
私とて、物心ついた頃には力を扱えた。人が己が歩き始めた瞬間を
知らないように、私も力を使い始めた瞬間を知らない。歩き方を、
それまで歩く事をしなかった人に教える事が難しいように、力を扱

う事もまた人が教える類のものではない。だから、正直に言つて、春菜がこれから力を扱えるようになるかどうかは、春菜次第だ」

言つて、有間は真つ直ぐに春菜を見つめた。

春菜次第、つまりはどうなるかは分からない。言いようのない不安に襲われながら、春菜は自分の手の平を眺めた。

力を扱うと言ふ事には、全く実感が湧かなかつた。

周囲に在る力は、春菜には親しみやすく、包み込まれるような安心感を覚えはしたが、それを扱うとなると、全く話しは違つてくる。

「しばらくは、私の側にいると良い、少しは助言も出来るだろう。違ふ危険もない訳ではないが」

有間の申し出に、先行きの見えない不安感も手伝つて、春菜は黙つて頷いた。

19、新たな世界（前書き）

長らくお待たせしました。

：待っていただいてる方がいるなら本当にすみません。
そしてありがとうございます。

19、新たな世界

「あれ？」

唐突に声を上げた春菜に、不思議そうに有間が視線を向けた。

「有間、私出来るよ、ほら」

春菜自身も驚いたような表情で言うと、締め切ったはずの室内に風が吹いた。

「不思議。ほら、ね？」

言いながら、楽しそうに春菜は風を自身の周りに吹かせる。

「前よりね、力がはつきり分かるの。何でだろう。それでね風が吹くって信じて、自分の中の力と外にある力が一緒になって風になるように考えてみたの。そしたら、ほら。なんだか変な感じ。今まで使ってこなかった手がもう一本ある事に急に気付いたみたい」

笑いながら言うて立ち上がると、春菜は軽い足取りで部屋の外に出た。

白み始めた空は薄い青いに染まり、空気はぴんと張り詰めたような静けさを湛えて春菜の肌を打った。

「ねえ、有間。私、今ならもつとたくさんの事が出来る気がする」
まるで周囲にたゆたう力全てが春菜の体の一部であるかのような不思議な感覚だった。

少し意識を向ければ、すぐに力は春菜の意に添おうと動き出す。冷たく澄んだ空気を肺に取り込み、その清浄さに溜め息をつく。

未だに春菜の周りでは柔らかな風が吹いていた。

同じ目で見ながら、世界が全く違って見えていた。

「世界って、こんな景色だった？私、今まで何を見てたんだろう」
思わず口に出して呟く。

生命の躍動が、力の流れがまるで目に見えるようだった。

春菜と世界が繋がっているのが分かった。

自然の営みの中にある事がはつきりと実感できた。

まるで自然と一体となったかのような不思議な感覚。

今まで、目を閉じたまま生きてきたのではないか、と疑いたくなる程の新鮮さだった。

同じ物を見ていて、見える物は昨日までの景色とは全く違っていた。

「何だか、忘れていた感覚を思い出したみたい」

言いながら、ふわりと春菜の体が浮き上がる。

「ほら、私風にもなれる」

驚く有間を残して、春菜は家屋の上にまで浮き上がる。

それこそ空吹く風の速さだった。

一気に遥か上空まで昇り、また下降する。

そのまま、地上で驚愕の表情を浮かべる有間の隣に舞い降りた。

「春菜には、本当に驚かされる」

半ば呆れたような、感心したような複雑な声音で言う有間に、春菜は明るく笑いかける。

「本当に忘れてた事を思い出したみたいなの。あー、楽しい。どうして私こんな大事な事忘れちゃってたんだろう？ねえ、まだ時間あるよね？有間も少し行こうよ」

空中から有間の腕を引っ張るが、有間は困惑したように春菜を見た。「けれど、私は空を飛ぶなどした事がない。出来るかどうか…」

「え、大丈夫。風になれば良いの。風と一緒に吹くの。自然と一体になって、風と共に吹くの」

なんとも理解しがたい事を平然と言ったのけ、春菜は空中から有間の腕を引いた。

「風になる、ね」

困惑しながらも、有間とはにかく春菜の言う、自然と一体になろうと意識をしてみるが、やはり変わらない。

「私には分からないようだ」

少しして、諦めたように笑うと、春菜はふわりと体重を感じさせない動きで有間の隣に降り立った。

「けれど、それだけの事が出来れば、物の怪に出会っても大丈夫だ

ろう」

笑って告げる有間に、春菜は曖昧に頷く。

「大丈夫。怖いなら、対峙しようなど考えずに、逃げれば良い。風になれるなら、十分逃げ出せる。自分の身を守るなら、それだけで十分だよ」

無理をして対峙する必要はない、と付け加える有間に、少しばかり安堵して、春菜は今度は大きく頷いた。

20、来訪

翌日の昼頃には、目的地に着くと聞き春菜はただ一つ頷いた。

春菜にとつては、目的地に着くと聞かされたところで、結局は一時的な宿である事には変わりなく、日々の生活になれていない点では、落ち着かない事には変わりが無かった。

むしろ、ようやく勝手が分かってきた旅の様子がまた様変わりする方が不安な様な気すらしていたのである。

牟婁^{むろ}の湯と言う場所が、今回の逗留先であると春菜は聞いていた。八菜女によると、都から南に下った海に程近い場所だ、とだけ聞いていたため、和歌山か三重か、その当たりの海岸付近になるのだろう、と春菜は勝手に解釈していた。

村を出てから少したった頃、急に雨に降られ、しとしとと雨音が響いてくるのを聞きながら、春菜はため息を落とした。

少し肌寒く湿気のこもる空気のせいか、気分まで重くなるのを自覚しながら、もう一度春菜はため息をついた。

八菜女は、少し前に、他の采女に呼び出されてどこかに行っただけに戻ってきていない。

ねえ、変なのがいるよー。

突然響いた声に驚いて顔を上げるが、牛車の中は当然ながら春菜一人。

聞き間違いか、と思い始めた頃に、きゃはは、と高い笑い声が響いた。

幼い子供の声のようだった。

なんでこんなところにいるのー？

耳に残る、神経に障る声だった。

どこから響いてくるかも分からない声に、春菜は息を潜める。

ほんとだー。なんているのー？

ねー。死んじゃったんじゃないかってっけー。

えー、死んでないよー、消えちゃったんだよー。

消えちゃったのは、死んじゃったって事じゃないのー？

会話らしき問答が聞こえるが、声は全く同じで春菜には聞き分ける声が出来ない。

不自然に語尾を伸ばし、時折高い笑い声を響かせる。

「誰か、いるの…？」

小さく声を出すと、二つの声はぴたりと静まった。

声、聞こえてるよー？どうしよう、怒られちゃうー。

全く困っているようには聞こえない声音でそんな言葉が響いてきた。

えー、でも見えてないよー？偽物じゃないー？主様何にもおっしやってなかったもん。

じゃあ、だあれ？

さあ。姫様の子孫じゃないのー？

かなあ？

うん、ちよつと変だけど、きっとそうだよー。

じゃあ、いつかー。

笑いながら交わされる会話に取り残され、春菜は周囲に視線を走らせた。

が、何かに納得したかのように、声は笑い声を響かせると、徐々に遠ざかっていった。

しばらく春菜は凍り付いたように動けずにいたが、そろりと上半身を動かしてみた。

いかなる変事も起こらない事に安堵して、全身の力を抜く。

安心させるように、ふわりと風が頬を撫でるのを感じて、小さく春菜は笑みを浮かべた。

今朝、力を扱う術を知ってからと言うもの、周囲の力は更に春菜に優しくなった。

意思を持っているのではないか、と首を傾げたくなるが有間は力に意思はないと言う。

「ねえ、意思がない訳じゃない、よね？」

小さく呟くと、さらに柔らかな風が頬をくすぐった。

力の暖かさに少し安心した。

「今のは、何だったんだろう」

無意識に独り言を呟くと、春菜は一人首を傾げた。

「春菜様？失礼致します」

外からかけられた八菜女の声にはつとして、居住まいを正すと同時に牛車に八菜女が乗り込んできた。

「遅かったね？どうしたの？」

「いえ、たいした事では。少し雑用を頼まれましただけです」

笑顔で答える八菜女を深く追求せずに、春菜は黙ってうなずいた。

先ほどの出来事を話そうか、と一瞬考えたが、有間に聞くのが一番正確だろう、と思い直して隣に腰を下ろした八菜女に視線を向けた。

「雨、まだ降りそう？」

途切れた会話を繋ぐと、何気なく問いかけると、八菜女は小首を傾げた。

「どうでしょうね。山の天気は移ろいやすいものですから、すぐ止むやもしれませんが、秋雨の時期ですしね。ああ、そういうえば」

言って、意味深な笑顔を八菜女は浮かべた。

「知っておられました？有間皇子は、雨になると、決まって一人で列を抜け出されるのですよ。春菜様を連れてこられた二日前も雨で、ふらりといなくなられて。数日たって、帰ってこられたと思ったら、春菜様を連れておられて。雨が降ったからこそ、もしかしたらお二人は出会われたのかもしれないね」

雨が降ったその日には、まだこちらには来ていなかったのだ、と不思議な思いでぼんやりと思いながら、春菜は外から響く雨音に耳を傾けた。

「有間、今日も出かけてるの？」

「ええ。そのようです。雨ですし、お気を使われたのか、春菜様にはお声をかけられなかったようですが」

付け加えられた言葉に苦笑して、春菜は八菜女を見る。

「気にしている訳じゃないのに」

「あら、よろしいではありませんか。慕う殿方が側におらぬのは、女ならば誰しも寂しいものですし」

目にいたずらっぽい光を浮かべる八菜女に肩を竦めて、春菜は視線を逸らした。

八菜女が牛車に戻って、しばらく経った頃だった。

「少し、牛車が揺れますね」

強くなった雨音にかき消されまい、と少しばかり声を大きくして発せられた声に、春菜は同じく困惑しながら頷いた。

心なしか速度も上がったように感じられた。

「どうかしたのかな？」

「何かあったら、誰かが一声かけると思っているのですが……」

八菜女も困惑したように、春菜を見た。

浮かんだ不安の色を読み取って、春菜は締め切られた簾すだれに視線を向けた。

「ちよつと聞いてみようか？」

言って、簾の方へと移動する。

外を覗こうと、手を伸ばすと同時だった。

外側から、簾が剥ぎ取られ、空に浮いた腕を見知らぬ腕に取られた。半ば捻り上げるようにして捕まれた腕に引きずられるようにして、

春菜は外へと引きずられた。

「春菜様！」

八菜女の高い声が響く。

「お前が春菜か？」

低くうなるように問われて、顔を上げた先には、黒い髭に覆われた男の顔があった。

服装からして、有間の一行の者ではなかった。

着古した、けれどみすばらしくはない、機能的な着物と、腰に帯び

た長い太刀。

屈強な身体つに、長身の男が車の入口に立つとそれだけで威圧感があつた。

「誰？」

搾り出すように発した春菜の問いには答えずに、男は車の中を見回した。

「女二人か。おい、行くぞ」

腕を掴んだ状態のまま、男は春菜にそう声をかけた。

「ど、どこに？」

男の巨大さで見かけの恐ろしさに尻込みしながら、それでも春菜はそう尋ねた。

「行けば分かる」

短い返答とともに、腕を引かれ、春菜は牛車の外に出た。

まだ降りしきる雨に打たれ、周囲を見ると、有間の随従は誰一人としていなかった。

道とは思えない道に、打ち捨てられたように車が止められ、男が乗って来たらしい一頭の馬が木に繋がれていた。

「春菜様」

車の中から八菜女の縋るような声が追って来たが、視線すら送らずに男は春菜の腕を掴んだまま、馬へと向かう。

「おい、女」

馬の手綱を取って、ようやく男は振り返った。

「自分が大事ならそこにいる事だな。時期に轍わだちの後を辿って仲間が来るだろう」

八菜女は、びくりと身を震わせたがそれだけだった。

「行くぞ」

腕を引かれ、たたらを踏んで、春菜は男を見上げた。

「どこに？どうして？」

巖いわおのような体軀たいくの男は、見上げるだけでも恐ろしかったが、春菜は何とかそう尋ねた。

このまま抗いもせず言われたままについて行く事だけは何としてもできなかった。

しばしの間男は春菜を見下ろしていたが、唐突に笑い出した。

「気の強い女だな。そんな女は、嫌いではないぞ」

にやり、と笑った男の顔を睨み付ける。

「俺は、退魔師だ」

春菜にだけ聞こえる声量で発せられた言葉に、春菜はぴたりと動きを止めた。

驚きで怯んだ春菜のわずかな隙を男は見逃さなかった。

ついと腕を引き、そのまま馬上に抱き上げるようにして乗せると、すぐに男は馬を駆った。

冷たい雨の中繋がれていた馬は、待っていたかのように勢い良く駆け出した。

「下ろして！」

我に返った春菜がそう叫んだ時には、すでに牛車は木立に隠れ見えなくなっていた。

「もう遅い」

それなりの速度で走る馬の上で、あまり下手な動きは出来ずにいる春菜に視線を向け、男はにやりと笑った。

「馬から落ちれば、怪我では済まないぞ。大人しくしている事だな。すぐに時彦にも会える」

男の言葉に、春菜はぴたりと動きを止めた。

胸中に渦巻く複雑な思いに気を取られたからだ。

「時彦の怪我は？」

しばらく迷った揚句、結局春菜はその問いを口にした。

「退魔師は怪我にはなれている。問題ない」

「…そう」

命に別状はなさそうな事に安堵する。

が、すぐに溜め息をついた。

頬を打つ雨粒に紛れるようにして、落とした溜め息を振り切るよう

に小刻みに首を横に振った。

21、再会

「起きろ、時彦。連れて来たぞ」

隣から発せられた轟くような大声に、思わず身を竦める。

男は、そんな春菜の様子に気付く風もなく、小屋の奥へと視線を向ける。

おい、と男がもう一度声をかけたのとほぼ同時に、慌てたようにして人影が現れた。

思い詰めたような表情で現れた時彦は、春菜達の姿を認めて、微かに頬を緩めた。

時彦の目を真つ直ぐに受け止める事が出来ずに、春菜は視線をそらした。

「春菜、良かった」

そんな春菜の心境を知ってか知らずか、時彦は明るい声を発した。

「にしても、二人とも酷い有様だな。そんなに濡れそぼって」

早く上がれと、促す時彦に、春菜の隣に立つ男はすぐに従った。

「濡れるとさすがに寒いな」

生来のもものなのか、やはり野太い大きな声で言うと、男は囲炉裏の側に陣取った。

「どうした？風邪を引くぞ」

わずかな日数を置いても、全く同じ調子ど時彦は言う。

「何で？」

思わず口を突いて出た言葉に時彦がわずかに首を傾げた。

「何故居場所が分かったか、と言う問いならば、答えは梓彦（あやひこ）に後を

付けさせたからだ。勿論ずっとではない。少し着ければ、自ずと行き先も分かると言うもの。後は先回りして待っていただけだ」

春菜の表情に釣られるように、時彦は途中から言い訳めいた事を口にして、同意を求めるように側に座る男を見た。

それに、春菜は静かに首を振る。

「そうじゃない。なんで私をここに連れてきたの？」

しん、と静まり返った中に、雨が屋根を打つ音だけが響く。しかし、その静けさは作られた時と同様に唐突に破られた。

「何だ、もう振られたな、時彦」

豪快な笑い声と共に、そう告げると男は面白そうに時彦を見た。

「お前の姫君は、残念ながら人殺しの皇子様がお好みらしい」

男の言い様に嫌なものを感じて、春菜はわずかに眉を潜めた。

「梓彦」

時彦が低い声を出す、梓彦と呼ばれた男は止まらなかった。

「時彦、話が違うぞ。俺は、お前の連れが連れ去られ、囚われていると聞いたから協力したんだ。だが、こいつは囚われてなどいなかった。共の奴らに大切に傳かれていた。どう言う事だ」

詰問の声音で発せられた言葉に時彦は肩を竦める。

「俺は事実を言ったまでだ。連れを掠われたのも、皇子に襲われたのも事実だ。その後の事は知らん」

「じゃあ何だ。あの皇子をたらしこみでもしたのか、この女は」

鋭い視線を向けられ、身を固くした春菜に追い打ちをかけるように梓彦は言葉を紡ぐ。

「いや、違うな。その様子じゃお前がたらしこまれたか？そんなに贅沢が気に入ったか？呑気なものだな。連れが斬られたと言つのに、斬った張本人のご機嫌取りか」

「梓彦」

もう一度時彦が名を呼ぶ。

「少し二人にしてくれ。お前がいると落ち着いて話しも出来ん。頭でも冷やしてこい」

梓彦は不服そうに時彦を見たが、仕方がないと言った様子で立ち上がった。梓彦はすれ違い様に春菜に春菜を睨み付けるとまだ雨の降りしきる中、外へと出て行った。

「春菜」

名を呼ばれ、わずかに視線を時彦へと向けた。

「いつまでそこに突っ立っている気だ」

火に当たるように促される。

「…怪我は？」

その場から動かずに春菜は口を開いた。

濡れた髪からぼたり、と雫がたれ、床を濡らした。

水を吸った着物と髪は、肌に張り付くようで気持ちが悪かった。

体温が奪われているのも自覚していたが、それでも春菜は動かなかった。

「派手に血は出たが、問題ない。あまり激しい動きさえしなければ大丈夫だ」

「そう」

気まずさにまた視線を反らすと、時彦の声が追い掛けてきた。

「俺は、お前を傷付けた。悪いと思っている。…怒っているのか？」

「…分からない」

時彦が言っているのは、有間に出会う直前の事だろう、と思い春菜は正直に気持ちを口にした。

「怒るよりは、悲しくてどうしたら良いか分からなくて、怒ってるみたいになっちゃったけど…。私、あれからいろいろ考えたんだ」
「ようやく真っ直ぐ時彦に視線を向けて、春菜は話し出した。」

「時彦は私をここに呼び出したかった訳じゃなくて、ただの偶然。不可抗力だった。だから、いきなり右も左も分からないお荷物を背負って嫌になるのも当然だな、って。あの時は、どうしたら良いのかわからなかったけど、死に物狂いになれば、きっとどうにか生きていける。私がここに来ちゃったのはただ運が悪かっただけ。だから」

「ちょっと待て」

唐突に春菜の言葉を遮ると、時彦は真剣な色を浮かべた瞳を春菜に向けた。

「俺は、そう言う事を言いたかったんじゃない。言い方が悪かった」
時彦の瞳の色に圧されて春菜が黙り込むと、時彦は再び口を開いた。

「お前も見た通り、朝廷と俺達退魔師の関係は悪い。命を狙われる事もある。物の怪が出た夜、俺はあの皇子に会った。あれは俺達にとって天敵だ。出会い、戦えば死しかない。だから、すぐに町を出ようとした。お前にああ言ったのは、俺と行動を共にすればいらぬ災厄に見舞われる事があるからだ。梓彦を命の危険にさらしてまでお前を連れ戻したのは、お前が囚われた原因が俺にあったからだ。酷い扱いを受けているのではないかと思ったが、それは杞憂だったようで安心した」

「そんな、じゃあ、私…時彦、ごめん。私、時彦に酷い事した。ずっと有間と一緒に居て。でも、有間は、優しくった…」

時彦の言葉にようやく整理が着いたと思っていた胸の内を掻き乱され、春菜はまとまらない思考の中で呟くように言うと、時彦はわずかに笑みを浮かべて頷いた。

「だから、今一度問おう。春菜、お前は どうしたい？ 身の危険を覚悟した上で俺についてくるも良し、皇子の元に帰るも良し、朝廷だの退魔師だの、妙なものにに関わり合いたくなければ、俺が信を置いている普通の人間の元で過ごしても良し。いずれにしても、俺はお前を元居た場所に帰せるよう手を尽くす。方法があればどうにかして知らせよう。春菜、どうしたい？」

「私は…」

しかし、その先に続く言葉を見失い、春菜は口をつぐんだ。

先を促すような時彦の視線に、励まされるようにして、春菜はもう一度口を開いた。

「私はこの世界の事を知りたい。退魔師の事、朝廷の事、どちらも嫌なの、時彦と有間が殺し合うのは。逃げたくない、ちゃんと知りたい」

ようやく真っ直ぐに春菜は時彦の目を見た。

「それは、問者と見られたとしても知りたいか？」

「知りたい。私は、何も知らないでいたくない。両方を知ってちゃんと自分で判断したい。だから、私に退魔師の事を教えて」

春菜の目に浮かんだ強い色に、時彦は笑って頷いた。

「ならそうすれば良い。俺は春菜の望むようにしよう。それより、早く火に当たれ。いつまでも濡れたままそんな所に居たら風邪を引くぞ」

不機嫌そうな表情で、梓彦はどつかと腰を下ろした。

「何故俺がこの女と一緒に動かねばならん」

普段の大声とは、掛け離れた低く唸るような声音に動じる事なく時彦は肩を竦めた。

「嫌なら、別行動を取れば良いだろう」

「何を言うか。怪我でまともに戦えぬ体で。まだ十日は俺がいなければ物の怪が出た時にどうする気だ」

怒り心頭と言った様子の梓彦に、春菜は思わず微笑んだ。

「女、何が可笑しい」

それを見咎めた梓彦に、春菜は噛み付かれ、慌て首を横に振った。

「違うの、だって梓彦さん、怖そうな顔だけどほんとに優しいんだな、って思ってた」

しん、と静まり返った空気に慌て春菜は梓彦に謝る。

「あ、ごめんなさい。怖そうって、体がおつきくて強そうだな、って意味で、だから」

唐突な二人の笑い声に遮られて、春菜は小さくなる。

「春菜、こいつが怖そうなのは、ほんとの事だから仕方ない。気にするな。それにしても、梓彦、良かったな。豪腕豪傑で知られるお前を優しいだよ」

笑いすぎて息も絶え絶えな様子で時彦は梓彦の背を叩いた。

「何を言うか女。退魔師は数が少なく常に戦いの中に身を置く。だからこそ仲間内で助け合うのが習わしだ、それをそのような……」

怒っているのか戸惑っているのか、何とも奇妙な表情で梓彦は言う。

「まあ、諦める梓彦。春菜の勝ちだ」

時彦に、洪面を見せて梓彦は黙り込んだ。

「改めてになるが、こいつは梓彦。俺と同じ退魔師だ。顔は恐いし、口は悪いが、根は悪い奴じゃないはずだ、おそろくな。梓彦、連れとしか言ってなかったが、これが春菜だ。常識を知らないのでまあ助けてやってくれ」

ほとんど名前しか分からない紹介を終え、時彦は思い出したように春菜を見た。

「そうだ、梓彦には術の事も話しているから気にするな」

胡散臭げな梓彦の視線に、春菜は軽く頭を下げた。

食後に、小屋を抜け出し、春菜は近くの木陰に座っていた。

見上げる夜空には東京では見られない幾千幾万もの星が瞬き、春菜を見下ろしていた。

いつの間に止んだのか、既に雨雲の陰すら夜空にはない。

「春菜」

不意に声を掛けられ、視線を隣に向けると時彦が立っていた。

「どうした？」

隣に腰を下ろしながら言っ、時彦は春菜の顔を覗き込む。

「皇子の事か？」

問われて、春菜は驚いて時彦を見た。

「何だ、当たりか」

笑っ、言う時彦に、春菜は小さく頷いた。

「…時彦は、有間が憎い？仲間を殺された？」

わずかに逡巡した後、春菜は小さく尋ねた。

「憎くないと言えば嘘になるな。退魔師ならばたいいの者は知り合いを皇子に殺されている。だが、それは俺の意見だ。お前の意見はお前が決める」

うん、と頷いて春菜は夜空を見上げた。

何か言い置いて来れるような状況ではなかったが、何も言わずに有間の元を離れたのが気掛かりだった。

22、退魔師の村

「これからの事だが」

そう時彦が切り出したのは、翌朝の朝餉の後の事だった。

「まず、村に帰ろうと思う」

梓彦は納得しがたいと言うように鼻を鳴らした。

「俺は反対だ。部外者を入れるべき場所ではない」

「それはもう話しただろう」

瞳に強い色を浮かべて言う時彦に、梓彦は不服そうに唸った。

「俺は村で術について知った。春菜をここから返す方法を探るとすれば、まずは村を当たるのが当然だ」

「しかし、俺はそのような術聞いた事もない。時彦、お前どこからそんな術突きだしてきた」

言って梓彦は真剣な表情で時彦を見た。

事情の良く分からない春菜は口を挟む事も出来ずに成り行きを見守っていた。

「…たまたま見つけたんだ。家の裏の横穴で。術者を助ける式を呼び出す術とやらで、聞いた事のない内容だった」

渋々と言った様子で口を開いた時彦に、梓彦は更に表情を険しくした。

「言いたい事はわかるが、俺の責任だ。俺がけじめをつける。村に行って俺の家を探すだけだ。何の問題もないだろう？」

「…立場を考えろ。いらぬ疑いをかけられてみる。更に立場を悪くする気か」

梓彦の言葉に春菜は思わず声を上げた。

「何か問題があるの？」

一瞬二人は黙り込み、目線を交わすと、時彦が肩を竦めた。

「俺達にもいろいろあるんだ。今俺はあまり村から良く思われてないんでな。まあ、それは俺の問題だ。お前が気にする事じゃない。」

とにかく村に行く。もし何かあったとしても考えるのはそれからだ」

結局、時彦に押し切られる形で三人は小屋を出た。

春菜にはあまり詳しい事が伝えられなかったが、村は北の方にあるらしかった。

どちらにしる地理に疎い春菜に地名を告げられた所でわかるはずもなかったので、春菜は黙って彼らについていった。

「この時代って不便だよな」

誰にともなく呟くと、何がだ、と時彦が振り向いた。

「携帯もない。電話もメールもない。一度別れちゃったら連絡取る術がない。一度の別れが一生の別れになるかもしれない。ちゃんと待ち合わせ場所を決めなかったばかりに、二度と顔を合わせる事がなくなるかもしれない」

意味がわからない、と言いたげな時彦に笑ってみせて、春菜は言葉を続けた。

「私適当だったな、って反省しただけ」

人と出会う事、別れる事の重さ。

機械を間に入れない世界での人間関係の近さと遠さ。

簡単に連絡を取れる機械は便利だったが、その分関係を薄くしていたように思えた。

すぐに連絡を取れる、もう一度会う為には、少しメールを打って送信すれば良いだけだ。

それは便利だが、同時に出会いの大切さや、何か大切なものを見えなくしていくように春菜には思えた。

「…馬鹿にしてんのか？」

沈黙の末に吐かれた言葉に、春菜はもう一度声を上げて笑った。

「まさか。私は、こっちの方が好き。大切な物を見失わないと思うから。無駄をなくす為の便利さは、純粋な大切なものを覆ってしま

う。いつの間にか、大切なものはたくさんが無駄なものに囲まれて見えなくなっちゃうの」

良く分らん、と言う時彦に、わからない方が良いよ、と返して春菜は今度は一步後ろを歩く梓彦を振り返った。

「ねえ、梓彦さん」

「さん付けは止める、気持ちが悪い」

無然とした表情を崩す事なく、梓彦は唸るような低い声を出した。

「じゃあ、梓彦。梓彦って幾つ？」

「…なんだ、それは」

途端に奇妙な表情をして梓彦は聞き返した。

無然とした表情から一変して、呆れたような顔の表情に春菜は首を傾げた。

「だって、名前と年と住んでる場所って自己紹介の基本じゃない？
そう言えば、時彦も幾つなの？」

横に視線を向けると、時彦は肩を竦めた。

「俺は十八だ。梓彦も同い年だぞ」

「え！」

思わず梓彦を振り返ると、渋面を作った梓彦の視線に行き合った。

「十八？二人とも高三くらいって事？」

信じられないと言った面持ちで、まじまじと二人の顔を見比べる春菜に時彦も顔を顰めた。

「そういうお前は幾つなんだよ」

「私？私は十五」

答えてすぐに春菜一人首を傾げた。

有間は幾つなのだろうと考えて、時彦と同い年位だろうか、と見当をつける。

春菜にとって、十八とはまだ大人と呼ぶには低い年齢だった。

けれど、時彦達は姿かたちの話しではなく、大人と表現するしかない何かをもっていた。

一人で自らの足で立って生きる為の何か。

「退魔師って、ずっと一人で旅をするの？」

「まあな。十三から一年毎に、村での暮らしと退魔師としての旅とを繰り返す」

答えたのは時彦だった。

「一人で？」

それに時彦は一つうなづく。

「退魔師は基本的に一人だ。二年たつても帰ってこなければ死んだものとされ、弔われる。村にいるのは、子供とその母親、老人、そして村で一年を過ごす退魔師、そんなものだ」

そう言った切り盛り込んだ時彦はそれ以上春菜にその事について語るうとはしなかった。

時彦に聞いた村の話しはその程度で、どういった訳か時彦は春菜にあまり村や退魔師の話をしなかつた。

春菜はそれを部外者に多くを語るべきではないからだろう、と捉えていたため、深く聞きはしなかった。

梓彦は相変わらず春菜と打ち解けようとはしなかったが、それでも態度は軟化していた。

三人で歩き始めて六日目の事だった。

人里を避けるようにして進み、山脈のようなものを越え、しばらく平らな土地を歩いた後、明日村に着く、と春菜は時彦から告げられた。その言葉通り、翌日の昼には三人は村のすぐ境界に立っていた。村とは言っても、田畑を含め春菜が想像していたよりも広い。

盆地のような少しばかり平らな場所に、緩くまとまるようにしてその村は在った。

おそらく村外れから反対側まで徒歩で半日以上かかる距離はあるだろう。

時彦は、そんな村の様子を横目に縁に沿うようにして歩く。

そのまま、少しばかりして背後を山と崖に守られ、それに寄り添う

ようにして立つ、寂れたたたずまいの家が一軒現れた。

緩くまとまる村は、家同士の距離は離れているものが多かったが、それに比べてもこの家はさらに一際村から離れた所にぼつねんと建っていた。

人の住む気配のないそれに向かい時彦は歩く。

「荒れてるな」

間近に迫った家を見て、梓彦はそう呟いた。

「無人なんだから仕方ないだろ。俺も帰るのは五年振りだ」

言いながら時彦が手をかけた引き戸が軋んだ音を立てて開いた。

「まあ、一晚寝る場所位はある」

わずかに光の差し込んだ室内を見渡して誰にともなく呟くと、時彦は中に足を踏み入れた。

荷物を下ろすと、休む間もなく時彦は家の裏手に向かった。

春菜もそれに慌ててついて行く。

家に覆いかぶさるようにして迫る山は、半ば崖のようだった。

急なこうばいは、今にも家に崩れかかってくるのではないかとすら錯覚を覚える。

「ねえ、これ危なくない？」

思わず後ろを歩く梓彦に崖を指さして尋ねた。

「…危ないだろうな。ありがたい事に今まで崩れてきた事はないが」

梓彦は、春菜にはよく分からない表情を浮かべて時彦の後ろ姿を見つめて呟いた。

悲しみや、怒りを読み取って、春菜もまた時彦に視線を向けた。

触れてはいけないような気がして、春菜はそれ以上その話題を続けようとはしなかった。

「おい、どこに横穴なんかあるんだ？」

崖の真下で立ち止まった時彦に、梓彦がそう声をかけた。

「隠れてんだ」

言って、時彦はちょうど目の前にある人の背丈よりわずかに大きい岩に手をかけた。

「これの裏」

「…どうやって動かしたんだ」

見るからに一人で移動出来るはずの大きさではない岩を見て、梓彦はそう尋ねた。

「力の修行の時に、間違えて動かしたただけだ」

怪訝な顔をした梓彦に、時彦は笑った。

「ここも、そうなんだよ」

明らかに驚愕の表情を浮かべる梓彦を見遣って、時彦はもう一度笑った。

「誰にも言つなよ」

意味の分からない会話に春菜は首を傾げ、時彦を見た。

その視線に気付いているのかいないのか、時彦はぼそぼそと何かを呟くと、改めて岩の前に立つ。

「……あ」

思わず声を上げ、春菜は時彦を見つめた。

時彦の周囲に力が集まっているのが分かった。

漂っていた力が吸い寄せられるように時彦に集まって行く。

有間が力を使った時を思い出し、春菜は一人納得した。

これが、力を使うと言う事なんだ、と。

時彦に集まっていた力は、やがてうねるようにして岩に向かった。

実際に見える訳ではないが、まるで見えるかのように力がはつきりと春菜には感じられた。

「…信じられん」

呆然と呟き、梓彦は現れた横穴を見つめた。

梓彦の呟きに、春菜は先程から胸に巣くう違和感の正体に気付いた。今まで有間のそばに居た為、見慣れていたが、退魔師は物の怪が現れなければ力が使えないのではなかっただろうか。

「…どう言つ事？」

隣で啞然とする梓彦に問い掛けるが、春菜以上に混乱しているのか、梓彦は口を開けて立ち尽くしていた。

「早く来い、この中だ」

立ち尽くす二人を促して、時彦は一人先に横穴へと足を踏み入れた。人一人がやっと入れるほどのそれは、外から見るとより長いのか、時彦の姿を完全に飲み込み、真つ黒な口をぽっかりと開けていた。

梓彦が先に中に入り、それに春菜も続く。

大柄な梓彦は腰を屈めるようにして幾分窮屈そうな様子で数歩中に入る。

突然被さつて来た暗闇に目がついて行かず、何も見えないままに足を何度か動かす。

同時に幾度か瞬きをすると、徐々に朧な横穴の様子が見えてきた。

狭かったのは入口のみで、春菜達三人は、五、六人は入れる程の広さを持った円形の空間にいた。

「おい、どう言う事だ」

何かを押さえたような低い唸り声。

同時に、何か鈍い音が響いた。

それに驚いて春菜が前を見ると、梓彦が時彦の胸倉を掴み壁に押し付けていた。

「え、ちよつと、梓彦」

駆け寄ろうと、足を一歩踏み出してから、春菜は二人の真剣さに思わず進む速度を鈍らせた。

「見ての通りだ。ここでは自由に力が使える」

梓彦に詰め寄られながら、時彦は静かな声音でそう返した。

「…なぜ、話した。なぜ、隠し通さなかった」

半ば怒鳴るように言うと、梓彦は時彦を睨み付ける。

春菜には梓彦の怒りの原因が分からず、ただ混乱して二人を見た。何がそれほど梓彦を激昂させたのか、春菜には全く原因が思い浮かばなかったのだ。

「お前は話さんだろう」

平然とした口調のままに時彦は言葉を紡ぐ。

「…人の心に絶対などあるか。下手をすれば命に関わる事を…」

「俺はお前を信用している」

言い切った時彦に、梓彦は言葉を詰まらせた。

「…簡単に人を信用するな。馬鹿を見るぞ」

「なら、お前は話すのか？」

あくまで冷静に時彦は話す。

「話さんが…しかし…」

「なら良いだろう。春菜も話さんさ」

な、と視線を向けられ、春菜は困惑したまま頷いた。

「話すな、って言うなら話さないけど…」

「こんな小娘、信用出来るか！」

一喝して、梓彦は時彦の襟元を放した。

「なら、さつさと術を調べ直して春菜を元の居場所に戻せば問題ないだろう」

その言葉に、梓彦は睨むように時彦を見ると、すぐに視線を反らした。

「……さつさと調べるぞ」

吐き捨てるように言う梓彦に、時彦は無言で頷いた。

時彦が中央に、力で出した炎の側に座り込んで、春菜はぼんやりと二人を見ていた。

初めこそ、二人の近くにいた春菜だったが、洞窟一面に刻み込まれた、日本語とは思えないような文やよく意味の分からない絵に、すぐに解読を諦めた。

先程の言い合いは気になってはいたが、すぐに聞ける雰囲気でもなく、ぼんやりと二人を眺めているしかなかった。

「帰る、か」

つまり、出会った人々との別れ。

それも一生の。

二度と出会う事はないだろう。

中学生の春菜に戻る、という事。

「春菜」

呼ばれて我に返る。

かなりの時間が過ぎていたようだった。

疲れたように春菜の隣に腰を下ろし、時彦は小さく息を吐いた。

「すまん、すぐにはお前を返す方法が分かりそうにない」

「…そう。…何が書いてあったの？」

未だ壁の側に座り込んでいる梓彦を見ながら尋ねる。

時彦の言葉に思っていた以上に動揺していた。

期待すれば、それが叶わなかった時の落胆が酷くなる、と言い聞かせていたはずなのに、と春菜は唇を噛んだ。

「呼び出し方だけだ」

「おい、時彦」

壁を睨み付けるようにしていた梓彦が不意に振り返った。

「これは、人を呼び出す術じゃないのか？」

言って梓彦はすぐに壁に視線を戻した。

「お前、なんで式とやらを呼び出す術だと思ったんだ？式なんてどこにも書いてないぞ」

「式は、家に伝わる話した。呼び出せば、なんでも主人の言う事を聞く便利な使い魔、半ばお伽話話だったが…」

梓彦はそれに呆れたような溜め息をついた。

「それで、式を呼び出す術だと思ったんだな」

「ああ、ほら、『彼の者呼び出せば、必ずや汝、我らの子孫の助けにならん』。まさに式じゃないか？」

時彦は、壁の一箇所を指差し読み上げる。

「良いから式から離れる。やり方を見てみる、どう考えても人を呼び出す術だろ。呼び寄せのやり方にそっくりだ」

「そうなのか？」

「そうだろ！常識だ！」

大きくなつた梓彦の声に、時彦は肩を竦めた。

「いや、俺使わないからな、呼び寄せは」

「あ、ああ、そうだったな、悪い。忘れていた」

罰が悪そうに、梓彦はすぐに壁に向き直る。

「呼び寄せって？」

「一人ではどうしようもない物の怪に出会ってしまった時に、近くにいる退魔師を呼ぶんだ。運が良ければ誰かが助太刀に来てくれる」
答えたのは時彦だった。

「良いか、呼び寄せは、不特定多数の人間に対して有効な術式だ」
後を引き継ぎ、梓彦が話し出した。

「仕組みは簡単だ。周囲にある力を出来る限り自分に引き寄せれば良い。近くに周囲の力の動きに気付いた退魔師がいれば助けに来てくれる、それだけだ。力を引き寄せる力が強ければ、遠くにいる人まで呼べる。後は、呼ばれる側の力を感じる強さによっても呼び寄せがきく距離は前後するが」

「それが、似てるか？だいたいの流れは俺も知ってはいるが」

時彦の声に、梓彦は頷く。

「見る、これのだいたいこの術だが、簡単に言えば、相手の力の端を掴んで引つ張る、そういうものだろう？」

「…そうか？」

時彦は首を傾げる。

「俺は、力を具現するのかと思ってたが」

「それは神の領域だ。禁忌だろう。玉依姫の子孫ですらそれはなしえないと言っ話した。ありえるなら、魂を呼び寄せて依り代を与えるくらいだ。冷静に考えろ」

それに時彦は考え込む。

「言われてみればそうだな…」

「媒介は何だ？はつきりと書かれてはいないが、何を使っただ？何か代わりの効かない特別なもののようだ」

「ああ、刀だ。それも一緒にここにあった」

「それは？」

「荷物と一緒に家に置いてる」

時彦の言葉に頷いて、梓彦は春菜に視線を向けた。

「なら、春菜は人間だな。魂を呼び寄せたなら、刀は核となるだろうからな」

理解不能な会話に春菜は混乱しながらも、耳を傾ける。

「そもそも退魔師にとっても、術は専門外だ。呼び寄せ以外で使う事まずないからな……」

困ったように呟き、梓彦は首を捻る。

「それで、何が呼び寄せと似てるんだ？」

「お前、話を聞いてたか？相手の力をこちらに引っ張るんだ。不特定多数に向ける呼び寄せの力を、特定の一人に絞る。そんな事した事ないが、原理は一緒だろう」

「じゃあ、刀は何で必要だったんだ？ああ、その対象一人の特定のため、か」

時彦が言うと、途端に二人して眉を寄せる。

「な、何？」

二人から同時に視線を送られ、たじろぐと、時彦が首を横に振った。
「だが、なぜこいつなんだ？呼んでも何の助けにもならんだろうに」
心底不思議そうに言われ、春菜は思わず梓彦を睨んだ。

事実、春菜はこの世界に疎く、足を引っ張る事はあっても誰かの助けになれる自信は全くなかったので、言い返せなかったが、何となく情けなかった。

「今生の人ではなく魂での呼び寄せか？魂で捜して呼び寄せる」

言ったのは時彦だった。

「それは可能か？」

尋ねられた梓彦もまた、難しい表情を作る。

「…不可能ではないかもしれんが」

歯切れの悪い返答に、時彦もまた思案を巡らせるように黙り込む。

「とにかく、一度その刀を見せてくれ。これでは埒が明かない」

それに時彦も頷き、春菜も立ち上がった。

「夕飯でも食べるながら話すか。梓彦、悪いが食料を調達に村まで行ってきてくれ。春菜は、寝る場所の準備でも手伝ってくれ。汚くて寝れんだろうから」

それに頷いて、横穴から出ると、薄暗い場所に慣れた目には痛い夕日が目に入った。

ちようど向かいの山に掛かった太陽に、春菜は少しばかり驚いた。いつの間にかそれほど時間が経っていたらしい。

23、軋轢

家の裏手にある井戸で水を汲む時彦の隣で、春菜は水を受け取る。二人で一杯づつの水を家へと運びこむと、雑巾を浸し、固く絞ってから床を拭く。

二人で半分づつ雑巾をかけながら、梓彦が食べ物を持って帰ってくるまでに、綺麗にしてしまおうと、積もった塵を拭き取っていった。時彦は長く家に帰っていなかったようで、舞い込んだ砂埃や塵が積もって、一拭きする度に雑巾が真っ黒になった。

「ねえ、時彦、何でここでは力を使えたの？」

黒くなった雑巾を桶で洗い、固く絞りながら、春菜はそう切り出した。

「何で、と言われると、俺も良くは知らん。本来、退魔師は神々の許可なく力を使えないのは話したな？」

それに頷いて、春菜は床を拭く。

「だが、物の怪が出た時にしか力を使えないのでは、どうやって力を使う術を身につけると思う？」

「あ…いきなり実戦…な訳ないか」

言われてようやく思い当った。

物の怪が出なければ使えない力。

それは力を扱う技を受け継ぐにはあまりに困難だ。

「ああ。この村には、一か所物の怪が出なくても、力を扱う許可を与えられた土地がある。村の子供はみな、そこで力を扱う事を学ぶ」

「そこだけ？」

「ああ、村の中心にある、そこだけが、物の怪が出ずとも力を扱う唯一の場所だ。だから、退魔師にとって、この村は特別なものなんだ。退魔師達は、そこが唯一の場所だと信じている。いろいろな場所を巡ったが、俺もそんな特殊な場所は見た事がない。そして、唯一の例外はここだけだ。この家の周辺だけは、そのたった一つの

例外だ。理屈は知らんぞ。ただ、ここでは力が扱える。その事実だけだ、詳しい事は分らん。神の気まぐれか、温情か、何にしるありがたい事だな」

「そんな場所があるんだ。考えてみたら、そうだよな。練習出来る場所がなきゃ、退魔師も途絶えちゃうよね。でも、不思議だね、何で使えるんだろう」

真つ黒になった桶の水で雑巾をすすぐ。

最後にもう一度絞って、残りの床を拭く。

「さあな。伝承では、神々も物の怪に苦慮して、退魔師の為にわざわざそういう場所を作ってくださったって話したが、玉依姫のいらつしやった時代にまで遡る古い話しだからな。真偽の程はわからない」

「神様と話せるの…？」

根本的な疑問を口にする、時彦は少し難しい顔をして考え込んだ。神々の話しは良く出てくる。

許可が必要であつたり、と頻繁に出て来るが、それほど神が近い存在で、実際にいる事が、春菜にはどうにも不思議だつた。

「実際に話したという人間に会った事はないが…。だが、実際に退魔師は、力を扱う時には、神に伺いを立てている。そして、許可されるこそ使えるようになるからな。存在は近くを感じるが…」

「許可されなかった人っているの？」

「物の怪が現れてれば、そう滅多に断られないな。物の怪がいなければ、許可されないが。ああ、たまに人間嫌いの神もいて、その神の土地では許可が得られない事もあるらしい」

「え！許可が得られなかったらどうするの？」

物の怪に生身で対抗できるとは春菜には思えなかった。

生身でなくとも、武器は意味を持たない存在に、力なしで対抗できるとは思えない。

「そうになったら、逃げるしかないよな！。逃げ切れとは思えないが」

時彦の返答に春菜は顔を顰める。

「怖いね。退魔師だからって、物の怪に対抗する手段を必ず得られる訳じゃないんだね」

「ああ。だから、退魔師は信心深いぞ。神々に嫌われたら終わりだからな」

言いながら、一通り雑巾をかけ終わった室内を見渡ししてから、時彦は桶を持って立ち上がった。

「そっちも終わったか？桶の水、換えに行くぞ」

それに春菜も、自分の桶を持って立ち上がる。

黒くなった水を空けて、新しく水を汲んでもらいながら、ふと村の方を見ると、暗闇に明かりが見えた。

「誰か来る。梓彦かな？」

不規則に小刻みに揺れるそれは、木立の陰に時々隠れながら近づいて来るようだった。

「ああ、そろそろ往復する時間だろ。ほら、春菜の分。もう一回雑巾かければ、掃除は終わりだ」

言われて、桶を抱えると家に向かう。

簡単に、先ほどうっかりと塵を拭いた床を拭く。

時彦もそれに続いて家に入る。

後から来る梓彦を思っただけ、家の戸口を開け放したまま、雑巾をかけ始めた。

「あれ？時彦、そう言えば何で術は物の怪がいなくても使えるの？私を呼んだ術も力使うんだよね？」

不意にその事に思い至って、隣で雑巾をかける時彦に尋ねる。

「ああ。本当は少しは使えるんだ。ただ、何か物の怪に対抗できる程の力を許可なしに扱えないだけで、少しは許可がなくても力は使える。あれもそうだ、春菜が見つけた刀。あれに憑いた物の怪の気を払った時にも力を使っただろ？」

言われて春菜はそれを思い出す。

「そう言えば…」

あの頃は、力の事も退魔師の事も何も知らなかった為、疑問にも思わなかったが、確かに時彦は力を使っていた。

「あれは、自分の内側に宿る力を使ったんだ。自分の力だから、限界はあるし、大した事が出来る程あるわけでもないから、術や、物の怪の気を払う程度の事しか出来ないが…」

へえ、と呟いて春菜は首を傾げた。

「自分に宿る力って、使って良いの？ちゃんと使った分は補われるの？」

なんとなく、自分のうちに力がある事は感じられるが、増減はあまりないように感じられた。

「使った分は戻るらしいぞ。ただ、限界まで使うと、死ぬ事もあるらしいがな。命の源がなくなるまで使ってはこの世に存在できなくなるんだろっ」

事も無げに言われ、春菜は小さく身震いした。

滅多になくなるまで力は使い切る事はないのだろうか、なんとなく恐ろしかった。

「ねえ、時彦はなんで退魔師になったの？」

思わず尋ねたのと、ほぼ同時だった。

屋外で何か物音が響いてきた。

足音のような物と、何か鈍い音、草のざわめくような音。

「梓彦：かな？」

思わず時彦の方を向いて言うと、時彦はわずかに険しい顔で戸を窺っていた。

「さあ、動物か何かかもな。ちょっと見てくる。ここで待ってる」

言って腰を上げる時彦を目で追う。

「梓彦か？」

言いながら外に出て行く時彦の姿は、すぐに春菜の位置からは見えなくなった。

「お前っ！帰ってたのか？」

驚いたような男の声が響き、春菜は首を傾げた。

どうやら梓彦ではなかったらしい。

時彦の低い押し殺したような声が聞こえたが、何と言っているかまでは分からなかった。

それに対し、相手の男の声は興奮しているのか、やけに大きく聞こえてきた。

「お前には関係ないだろ」

「死んでなかったんだな。てっきり死んだとばかり思ってたぞ」

どうやら、二人いるらしい男の声に春菜は眉を顰める。

あまり良い雰囲気ではなかった。

どこか声に嫌なものをを感じる。

「中に梓彦もいるのか？」

軽そうな男の声が家へと近づいてきた。

「いや、今はいない」

時彦もまたそれに続いたのかようやく声を聞き取れた。

へえ、と言う声と同時に、男の影がわずかに戸口から覗いた。

馬鹿にしたような色を浮かべた瞳と一瞬視線が交わった。

「おい」

感情を押し殺したようなどこか怒りを感じる時彦の声と同時に、どこか驚いたような表情を浮かべた男の影が見えなくなった。

どうやら、時彦に家から引き離されたようだった。

「お前、女なんか連れ込んでたのか？」

軽薄そうな声が響き、もう一人の男も興味を示したように、声を上げた。

「へえ、そりやまた奇特な女もいたもんだな。ちょっと会わせろよ」

嘲笑、とも取れるような声が響く。

更に表情を陰しくして、春菜は立ち上がった。

「時彦？」

戸口から顔を覗かせると、家と男達の間立つ時彦の背中が見えた。その向こうに、少し離れて男が二人立っている。

「春菜、出てくるな」

険しい表情のままに時彦が振り返る。

「だって……」

何と答えて良いか分からず、口ごもるが、穏やかでない雰囲気、自分だけ家の中にいるのに耐えられなくなったのだ。

「ほんとに連れ込んでるよ、女」

背が高く、適当に髪を一つにまとめ、陽気そうな口元を曲げて、嫌な笑いを貼り付けて男は言った。

「どこで引つ掛けて来たんだ。お前なんかにはもったいないな」
もう一人のどこか不機嫌そうな目をした男もそう返す。

「たまたま途中で拾っただけだ。用がないなら、さっさと帰れ」
時彦は相変わらず無表情な声音で答える。

冷たい声音に驚いて、時彦を見上げると、時彦は春菜には見向きもせず、ただ二人を見据えていた。

「なんだよ、久し振りなのに冷たい奴だな」

背の高い男は言って、時彦に近づく。

微動だにしない時彦に詰め寄るようにする男に、相変わらず冷たい声で時彦は答えた。

「お前らと慣れ合う気はない」

切り捨てするような声音に、男は尚も笑う。

「ねえ、君」

時彦の肩越しに、男は春菜に笑いかけた。

それまでの人を馬鹿にしたような冷たい笑みではなく、女好きのしそうな笑みが浮かぶ。

「何かあったら、村まで来ると良い」

言われた意味を一瞬理解できずに、春菜は首を傾げる。

それに、男は一見優しい笑みを深める。

「例えば、こいつが意に沿わない事をした時、とかね」

男が囁くように言うと同時に時彦が殴りかかった。一歩下がって、軽々とそれを避け、男は笑う。

時彦も本気で殴る気はないらしく、それ以上は追わない。

「ね？乱暴な男だろ？」

笑いかける男に、春菜は顔をしかめる。

仲が良いからの軽口とは思えない雰囲気、男は纏い、それでも春菜には優しい笑みを向ける。

「そんな言い方止めて」

思わず春菜が言い返すと、男はわずかに驚いたように春菜を見た。

「へー、懐かれてるんだな、お前」

時彦を見ると、男は笑顔を潜め、でも、と言葉を続けた。

「でも、あんまり近付かない方が良く。神に見放されなくなかったらね」

表情を消した男の視線に射竦められ、春菜はわずかにたじろいだ。

「何、それ」

時彦は、何も言わず、身動きもしない。

ただ、強い視線で男を見ていた。

「禁忌を犯した血、領域を犯した血だ。こいつの祖先は神を冒瀆した。だから、神様に、疎まれるかもしれないよ」

無表情にそう言つと、最後に男は口の端を持ち上げた。

「…何それ」

怒りに声が震えた。

無表情のまま、かすかに瞳を揺らして、時彦は春菜から視線を逸らした。

時彦が呼び寄せを使わない、と言つた理由を理解して春菜は男を睨み付けた。

「時彦の御先祖様が何したかなんて知らないけどね、大事なのは本人でしょ？親とか先祖とか関係ない」

そこで、大きく息をつく。

無性に腹が立っていた。

時彦が、目を見開いて春菜を見ているのに気付いたが、止まらなかった。

「本人にはどうしようもない生まれで差別するような神様なら、私

はいらない。こっちから願ひ下げよ」

言い切つて、男を見る。

呆れたような、呆氣に取られた表情を浮かべて男は春菜を見ていた。

「お前ら、何やってるんだ」

怒りを含んだ大きな声に、男を睨み合っていた春菜と、呆然としたような表情で春菜を見ていた男は、はっとして村へと続く暗闇へと視線を向けた。

暗いので、はつきりとは見えないが、大きな梓彦らしき人影に、ほつと春菜は肩の力を抜いた。

「梓彦……」

名を呟いたのは、先程から黙っていたもう一人の男だった。

どこか慌てたような声音に、背の高い男も動きを取り戻した。

「何をしてる」

重ねて問う梓彦の声は、表情同様厳しいものだった。

「何でもない。旧友に挨拶に来て何が悪い。たまたま通り掛かったら珍しい顔を見かけて、久しぶりの再会を喜んでただけだ」

対する男は、反対に柔らかい声音で言うと、取り囲むように立つ三人を見た。

「じゃあ、俺達は村に戻るよ」

片手を上げて言うと、男は立ち塞がるように立つ梓彦の脇をすりぬけた。

そのまま立ち去る二人を睨むようにして見送ると、梓彦は溜め息をついて春菜に向き直った。

「無茶苦茶な奴だな」

面白がっているような、呆れたような微妙な声音で梓彦は呟いた。

「だって、感じ悪いんだもん。何あれ」

怒りがまた沸き上がってきて、春菜は口を曲げる。

「なぜお前が怒る。あまり罰当たりな事を言うな」

時彦の呆れた口調に、春菜は顔をしかめる。

「まあでも、実際ちよつとはすかつとしたけどな」

にやりと笑って言った梓彦に、春菜は目を見開いた。

「梓彦！今、初めて通じあえた気がする！」

思わずそう言っていると、梓彦は途端にいつもの仏頂面に戻った。

「だが、本当にあまり罰当たりな事は言わないよ」

ぼそりと呟かれたそれに、春菜は、はい、と返事を返した。

あまり罰当たりだと言っ意識はなかったが、とりあえず頷く。

「それで、お前晩飯はどうした？」

時彦が家に入りながら尋ねると、梓彦は両手に持った荷物を軽く持ち上げた。

「家に行ったら、煮物とか、明日の分の野菜や米持たされた」

言いながら、梓彦もまた戸をくぐった。

その背中と、村の方を見比べ、春菜は最後に崖に視線を移した。

いつも通りの時彦と梓彦の姿が、あれが時彦にとって普通なんだと春菜に告げていた。

何となく、時彦が村から離れ、一人で崖の下に住んでいる理由が分かってしまった。

家の背後の崖が、昼間以上に黒々と覆いかぶさって見え、春菜は慌てて二人の後を追って家へと入った。

24、郷愁

「これが、術に使用した刀だ」

梓彦が持つて来た夕食を食べ終わり、一息ついた頃だった。

結局、春菜は時彦にあまり村との関係などを聞く事が出来ずに夕食を食べ終わった。

ゆらゆらと、蠟燭が不規則に揺れる中、時彦が取り出した刀に春菜は首を傾げた。

「懐剣：よりは少し長いか。凝った作りだな」

梓彦は刀を受け取り、検分するように眺める。

春菜もまた梓彦の持つ刀を見る。

気のせいだろうか、と思いながら懐に手を入れる。

細身の刀身。

黒の地に繊細な銀細工。

柄の先からは、装飾の為であろうひだが数本と、乳白色と、白く煙ったようなわずかに透明感のある空色の玉を数珠状に繋いだものが、それぞれ一本づつ。

取り出した刀を隣に並べると、色こそ違えど、寸分違わぬ様相だった。

「春菜、それは何だ」

梓彦の問いに、春菜は視線を上げる。

ついで隣に座る時彦に視線を向けた。

「物の怪の気が付いていた刀を町で見つけて、時彦からもらったの」

「どう言う事だ？」

今度は、時彦に問う。

「驚いた、気付かなかった。春菜を拾って、二日目だったか？町に出た時に、露店に並べられていたんだ。春菜が物の怪の気に気付いて、気を払った後に、俺は使わないから、春菜にやったんだよ」

「物の怪の気に気付いた？」

怪訝な表情で、梓彦は春菜を見る。

「ああ、言つてなかつたか？春菜は、物の怪の気や、力を感じる事が出来るらしい。どうやっているのかは知らないが、実際、物の怪が現れる時には常に俺より早く気付いていた」

さらに怪訝そうな表情を作る梓彦に、春菜は居心地の悪さを感じ、視線を時彦に向けた。

「時彦、お前はもう少し考えろ。なぜ刀の造作の酷似に気付かん。春菜の事もそうだ」

呆れたようにして言う、一度春菜に視線を向けてから、梓彦はすぐに刀に向き直った。

「…分かんない。春菜に縁えにしのある物なのか？」

刀を眺めながら呟く梓彦に、春菜は否定する。

「私、知らないよ、刀なんて初めてみたし」

それに時彦がやんわりと首を振った。

「そうじゃない、春菜の魂、つまり前世での縁だ」

「前世？」

首を傾げると、二人から肯定が返って来た。

「…人ってほんとに生まれ変わるの？」

神様もいるならば、生まれ変わる事も信じられるような気がしたが、それでも思わず確認する。

「ああ。一度出来た縁は、消えずに何かしらの繋がりが残る。深ければ深い程に強い繋がりが。つまり、前世の春菜にとって余程の縁がある物であり、これを通じて春菜の力の端を掴み引き寄せた、つて事か？」

春菜への説明であつたはずの時彦の言葉は、最後には梓彦への確認となる。

「おそらくな」

言つて、梓彦は釈然としない様子で春菜を見る。

「それならば、春菜は時彦によつて過たずに呼び寄せられた事になるが…だが、なぜ春菜なんだ？横穴の壁には書かれた当時の春菜が

死に、例え生まれ変わっていても、まるで必ず助けになると信じて疑わないかのような内容だった。結局わからず仕舞いか」溜息とともにどう吐き出して、梓彦はようやく刀から手を放した。「やっぱ、わからないか」

感情を表さないように努めたが、それでもわずかに声が震えた。言いようのない不安が広がる。

春菜にとってこの世界は決して悪い印象がある訳ではなかった。それでも、どうしようもない不安や孤独は常に身の内にあった。

「仕方ないよね」

笑おうとしたが、わずかに頬が引き攣ったような感覚に、上手く笑顔を作れたか分からなかった。

「それにしても、そっくりだね、この刀」

話題を変えようと、視線を下に向けながら言う。

「二組一対なんだろうな。それ、両方とも春菜が持っておけ」

時彦の言葉に、春菜は視線を上げる。

「良いの？」

「ああ。俺が持っていては仕方ないしな。それに、お前に縁の深い物だ、持ち主はお前だろう」

あまり実感はないが、こくりと頷いて春菜は刀を手にとった。

それでも、手に取った刀は何となく手に馴染み安心した。

「とりあえず見落としがないか、明日もう一度調べてみるか」

「そうだな。それと時彦、お前もう一度その術をやってみたらどうだ。術の仕組みが分かれば何か手掛かりになるかもしれない」

梓彦の提案に頷いて、時彦は軽く伸びをした。

「で、お前どうすんだ？家帰るのか？俺は別に泊まって行っても構わんが」

「ああ…泊まって行って良いか？」

それに、おう、と短く返しながら時彦は荷物を漁る。

「布団は使えたもんじゃないだろうから、雑魚寝で我慢してくれ」

取り出した布の片方を春菜に渡しながら言われ、春菜は一つ頷いた。

こちらに來た最初の時よりも夜は冷え込むようになり、夜露や風を凌げるだけで十分ありがたかった。

布に包まりながら、随分寝る時間が早くなったな、と春菜は一人小さく笑った。

春菜はどちらかと言えば夜型で、なかなか寝付けず遅くまで起きている事が多く、代わりに朝にはとても弱かった。

けれど、こちらに來てからは陽が沈むとすぐに夕ご飯を食べ、そのまま眠りにつき、朝は日の出とともに起きる、と言う規則正し過ぎる生活を送っている。

夜に何かテレビのような娯樂がある訳でもなく、歩き通して疲れた体は自然に睡眠を欲した。

そのまま朝になれば自然に目が覚め、春菜にとっては信じられないような生活だった。

寝る準備に入った二人を尻目に、春菜は部屋の隅に寝転がった。

火を消して、完全な暗闇に部屋が包まれてからどれ程たっただろうか。

闇の中、なかなか寝付けずに、春菜は寝返りをうった。

動かずに、じっとしていると、そのまま闇に侵食されてしまいそうで怖かった。

一人でいると、自然に思考が家族の事や友達の事、学校の事になる。帰れるかもしれない、と思った事によって、ついまたあの世界の事を思い出してしまった。

また連日の移動により、春菜にも体力が尽きたらしく、一日歩き通していても、疲れきってすぐに寝てしまうような事はなくなっていた。

寝てしまえば余計な事は考えなくてすむと分かっている、なかなか眠気はやってこなかった。

お母さん、心配してるかな、とふと思った。

一度思うと、何かが決壊したように、様々な事が思い出された。

学校は、いつも通りなんだろうな、と思い体を丸め小さくなった。

「……だめだ」

小さく、本当に小さく呟く。

二人を起こさないようにゆっくりと、静かに起き上がった。

そのまま、極力音を立てないように注意しながら戸に手を掛ける。

小さく軋む音をたてて、戸口はゆっくりと横に滑る。

戸口を開いた途端に、家の中より少しばかり冷たい外気が入り込んできた。

熱くなっていた頭や、思考、全てから熱を奪われるようで心地が良
い。

空気が冷えると、透明度を増すんだな、と思いながら夜の闇の中に
滑り出た。

月はなく、星ばかりが夜空を埋め尽くしていた。

昼は感じなかったが、背後に迫る崖も家を取り巻く森も、黒々とし
て春菜に迫るようで、小さく身震いをする。

外気に当たった事で、少し沈んでいた思いから離れられたような気
がして、春菜は家の外壁にもたれて、そのままずると座り込ん
だ。

冷やされて目頭も熱くなっていた事を自覚していた。

ふわり、と力が頬を撫でる感覚がした。

春菜を優しく包むようにして、力が周囲に自然と集まった。

「慰めて、くれてるの…？」

思わず呟くと、それに反応するかのように、力が小さくざわめいた。

力は、私のような力を扱える者には優しい。

いつか聞いた有間の声を思い出し、頭を膝に埋めた。

でもね、勘違いしてはいけない。力の意思是、女神の意思の残
り滓。

あの、力に目覚めた村で言われた言葉。

力に意思はない。私を守る事もあれば、時には傷付ける事もあ

る。

有間は、あの時淋しげな笑顔で春菜に告げたのだ。

力は優しい……まるで意思を持つかのよう。やはり優しいんだ。時にそれがどれ程残酷に感じる事があったとしても。

春菜には、意味がよく分からなかった。

ただ、有間の標準が淋しげで胸が痛かった。

「残酷、かあ……」

あの時は分からなかったが、今は少しだけその意味が分かるような気がした。

酷く孤独を感じていた。

人のいない、ただ優しいだけの力に包まれている孤独な世界。

ふわり、と柔らかな感触に頭から包まれ、春菜は驚いて顔を上げた。頭から掛けられた布を掻き合わせる。

ちらりと横に視線を向けると、無言のまま隣に時彦が腰を下ろした。しばらくその横顔を見ていると、やがて時彦も春菜に視線を向けた。一瞬交わった視線は、すぐに時彦が前を向いた事によって逸らされた。

「風邪、ひくぞ」

「……うん」

ぼそりと言われ、それでも心配されている事は伝わってきて、春菜も小さく頷く。

「大丈夫か……？」

「うん」

今度は少しはつきりと頷く。

不意に時彦が横を向き、春菜と目を合わせた。

瞳に浮かぶ表情を読み取れず、春菜もまた時彦を見る。

「……帰りたいか？」

口にするのを迷ったのだろう。

僅かな沈黙の後に時彦が発した言葉は酷く真摯な響きを伴っていた。真っ直ぐに、決意を込めて、そこに後悔をわずかに滲ませて、時彦

の声は春菜に響いてきた。

「……うん。…帰りたい」

時彦の視線を受け止める事が出来なくなって、前を向いてぽつりと呟いた。

時が止まったようだった。

時彦は身じろぎもせずにいる。

「悪かった」

重い沈黙を破ったのは時彦の言葉だった。

吐き出すように言われた言葉に、春菜は隣に視線を向けた。

まだ春菜に視線を向けていた時彦と目が合う。

そこに浮かぶのは、懺悔と後悔、そして自嘲の色と、諦め。

「俺はお前が望む限り、絶対にお前を帰す。見つかるかは分からないが、絶対に方法を探すつもりだ。帰れるまでは、絶対にお前の面倒を見る。もし…もし、もし万が一、どうしても方法が分からなくても、俺は一生お前を護る」

瞳に強い色を浮かべて、時彦は春菜を真っ直ぐに見つめて言った。

呆氣に取られたようにして聞いていた春菜は、驚きに目を見開いて時彦を見つめた。

厳しい表情をふっと緩めて、時彦は優しい、けれど、どこか憂いを帯びた表情を作った。

「だから…だから、あまり心配するな」

時彦の方が泣きそうな声音に聞こえて、春菜は首を横に振った。

「何、それ」

こらえようとしたが、声が震えた。

「ご、ごめん、時彦…」

肩を震わせ、春菜はとうとう堪えきれずに吹き出した。

「何それー、プロポーズ？」

「ぶ、ぷろ？」

突然声を上げて笑い出した春菜を、困惑したように時彦は見る。

「おい」

一向に笑いの収まらない春菜に業を煮やしたのか、無然とした表情で言われ、春菜は目尻に溜まった涙を拭った。

「ごめん、我慢出来なくて。お腹痛いー」

まだ顔に笑みを貼付けたままの春菜を時彦はじろりと睨む。

「人がせつかく心配してやってるのを」

怒ったようにしながら、どこか安堵したような時彦の表情に、ようやく春菜は笑いを収めた。

「ごめん。でも、嬉しかった」

ちゃんと気持ち伝わるように、時彦の目を見る。

「だけど、駄目」

一つ息を吸って、春菜は言葉を続ける。

「負い目や、償いで結ばれる関係って悲しい。お互い辛いだけだと思う。ただ、相手を思ってた行為全てが、過去の償いになっちゃうなんて、ただ責任感からの行動になっちゃうなんて、私は嫌だから、駄目。きつとそんな関係、何も残らない。私、時彦の事嫌いじゃないよ。良い奴だと思う」

笑って言う春菜を、時彦はただ真っ直ぐに見る。

「これが嫌な奴だったらさ、何やってんだ、死ぬ気でどうにかして帰しやがれ、この野郎、だけどね」

冗談めかして言うと、春菜は視線を下に向けた。

「それにね、私こども、ここで出会った人も好きなの。お別れは悲しいし、帰りたくないって意味じゃないよ。すぐ帰りたいけどね」

「別に俺は、償いだけで一生面倒見てやる程お人よしじゃないぞ」
無然とした表情のまま時彦は言う。

「そこまで出来た人間じゃない。春菜だから言ってるんだ」

それに、春菜はきよんとして時彦を見た。

「なんかそれじゃ、ほんとにプロポーズみたいじゃん」

「ぶるぽうず？」

「いや、こっちの話し。って言うか時彦、あんまり好きな子以外にそんな事言っちゃ駄目だよ。勘違いされるよ？」

「……。とにかく、あまり無理するな」

奇妙な表情で春菜を見ると、一つ溜め息をついて時彦はゆっくりと口を開いた。

「え？」

視線を絡め取られたようで、逸らす事が出来なかった。

「唐突に何も知らない場所に放り込まれて、平気な訳ないだろ」
真剣な目線に、言葉に詰まる。

「…何で、そんな事言うの？ 思い出さなくなんか、ないのに」
一度思い出したら、耐えられない気がしていた。

それでも思い出してしまふ世界。

春菜は目を逸らす事に必死になってきたのだ。

「我慢、するな」

不意に時彦の手が春菜の頭に乗せられた。

大きな少し骨ばった手が、ぽんぽん、と二度三度落とされる。

「……私は、時彦が悪いなんて思っていないよ？ たまたまで、運が悪かっただけで、時彦を恨んでなんかいないよ…」

言い訳のように、春菜は言う。

春菜をこの世界に呼び出した時彦の前で、帰りたいと嘆く事はそのまま何故呼び出した、と時彦をなじる言葉になるような気がして、言わずにはいられなかった。

「…分ってる」

時彦は否定の言葉は言わなかった。

それでも、その表情から時彦が責任を感じている事も、後悔している事も十分すぎる程に伝わってきた。

伝わってきたが、言葉を止める事が春菜にはできなかった。

「帰り、たい…」

今まで口にしないようにしていた言葉。

呟くように、吐き出すように言くと、胸の奥底にしまい込んでいた感情が春菜の心をあつという間に覆いつくした。

「家に帰りたい、みんなに会いたい…」

一言口にする度に、春菜の目に涙が溢れ、やがて頬を伝いだした。今にも壊れそうな感情を孕んだ声に、時彦は思わず春菜の肩に腕を伸ばした。

そのまま、肩を抱き寄せると、春菜は抵抗もせず俯いて泣き出した。

「時彦の馬鹿…我慢、してたのに」

嗚咽の合間に、言う春菜の言葉を時彦は黙って聞いていた。

「何で、私なんだろう？…私、帰れる？家族にも、何にも言ってない…きつと、心配してる」

小さく相槌を打ちながら、時彦はただ耳を傾けている。

「帰れなかったら、どうしよう…帰りたい。帰りたいの」

そのまま涙が溢れて止まらなくなった。

とうとう、言葉を紡ぐのも出来なくなり、そのまま泣いた。ひたすらに泣いた。

それまでこれ程泣いた事があつたかと思う程に。

「大丈夫だ、絶対に帰してやる」

静かにけれど力を込めた声を耳元で聞きながら、春菜は嗚咽を堪えながら涙を流した。

春菜が落ち着くまで、時彦はずっと春菜を支えるように抱きしめていた。

「時彦、ごめん」

ようやく落ち着いて春菜がそう声を上げたのは、二人にもどれ程時間が経ったのか分らなくなった頃だった。

「いや、俺も悪かった」

「でも、泣いたら、なんかすっきりしちゃった」

目もとに溜まった涙を拭い、泣き腫らして赤くなった眼で、はにかんだように春菜は笑った。

いまだに時彦に抱き締められるようにして座っていたため、横を向くとすぐ近くに時彦の顔があつて、春菜は少し気恥ずかしく思いな

がら、小さく礼を言った。

それに、時彦も、驚いたような表情で春菜を見ると、すぐに小さく笑んだ。

「もう、大丈夫だから。ごめんね」

言って、少し体をはなすうにすると、時彦はすぐに腕の力を抜いて、春菜に回していた腕を解いた。

「ここが、好きって言ったのと、時彦のせいじゃないって思ってるのは、本当だからね」

誤解していないか不安になって、念を押すように言っていると時彦は苦笑して黙って頷いた。

そのまま、黙って二人で座っていると、不意に時彦が口を開いた。

「俺の一族は、大君を生み出した一族だ」

唐突に話し出す時彦に困惑したが、春菜は黙って耳を傾けた。

「正確には、俺の祖先の兄が大君の先祖だ。そんな訳で呪われた血を生んだ一族として、退魔師連中からの評判は良くない。とうとう俺が一族の最後の一人だ」

「何で話してくれたの？」

尋ねると、一瞬の沈黙の後に答えが返ってきた。

「知リたがつてるんじゃないかと思つて。あいつらの事もあつたからな。それに、何となく話したくなつた」

頭を掻きながら少し罰が悪そうに言う。

「私には、神様とか全然分からないんだけど、やっぱり大事なの？」

「当たり前だろ」

春菜の言う意味が良く分からなかったのか、時彦は首を傾げながらそう言った。

「なら、何で神様のせいにして人を嫌いになるの？会った事も会話した事もない神様なのに。自分のまわりにいる人たちが大切じゃないの？どうして、自分の目で見た事で判断しないの？何で？……時彦に言つたって仕方ないんだけどね」

はっとして、春菜はそう最後に付け足した。

「大切だから大事なんだ」

ぽつりと、時彦はそう口にした。

「大切だから、護ってくれる神々が大事なんだ。ある意味利害関係だよな。でも、それ以上に、神々への畏敬の念や、尊敬もある。例えば、それは恩人のような感情かもしれない。俺達が生きていけるのは神々のお陰だ。絶対的な恩があるんだ。時に荒らぶる神もいる。それも含めて神なんだ。きっとそれは、人間なんかより絶対的に優位で強く超越した存在への畏れでもある。神々への信仰心と言ったところで、神々の力を畏れての行動なんだろうな」

それは少し分かるような気がして、春菜は黙って頷いた。

「で、そんな畏れ多い現人神と子を成した、など悪い冗談にも程がある。俺だって、それは良い事だとは思えない」

「ご先祖様がした事なのに？」

「正確には違うけどな。やはりそれは良くない事だろう。神への冒涇だ」

時彦の言い様に、春菜は少し考え込む。

「でもさ、玉依姫も、仮にも神様でしょ？力で男に負ける訳ないよね？恋人同士だったんじゃないの？」

「さあな。昔の事だから分らないが、退魔師としては、大君の祖先が玉依姫をたぶらかして、騙すようにして関係を持った、って事になってるけどな」

「…玉依姫と、時彦のご先祖様が、好き同士だったら可哀そうな話しだよな」

何が、と問われ、春菜は考えながらゆっくりと口を開く。

「だって、好きな人の子供を産んだのに、誰も祝ってくれないんだよ。世界は認めてくれなくて、拳闘相手の仲間だった人達から子供は命を狙われて…可哀そうじゃない？玉依姫、悲しかったんじゃないかな。だから、行方を眩ませたんじゃない？」

「……一応、玉依姫が姿を消したのは、俺の祖先に騙され、傷心した姫はとうとう人間を見限ってお姿を隠した、って言われてはいる

ぞ」

念のため、というように時彦は退魔師に伝わる逸話を話す。

「ふーん。どっちにしろさ、何で神様と恋愛した位でこんなに村八分状態なのか、私には理解不能」

分る気もするけど、分りたくもない、と矛盾する事を言いながら、時彦に視線を向けると、呆氣にとられたような時彦と目が合った。すぐにはつとしたように苦笑いを浮かべて、時彦は口を開いた。

「お前は時々信じられないような事を言うな……。まあ、気持ちももらっておく」

言いながら、時彦は立ちあがる。

「あまり長居すると、風邪ひくぞ。そろそろ家に入れ」

春菜は目の前に差し伸べられた手を見てから、時彦に視線を向ける。

「……ありがと、来てくれて」

時彦の手を掴み、立たせてもらいながら言つと、時彦が笑ったような気がしたが、しっかりと確認する前にいつもの無表情に戻っていた。

24、郷愁（後書き）

ちゃんとパソコンさえ開ければ、ちゃんと更新出来るんですが…。なかなか開けない事も多くて、いつもお待たせしてすみません。一応、今のところ40話完結を目指しているのですが、予定は未定です。今回、文字数8000字。普段なら5000か6000字…予定狂う感しまくりです。私の場合プロットは書きながら姿が変わります…。少しでもお楽しみいただけていれば幸いです。次回更新は、10月初めを目指します。

25、術

寝不足と泣きすぎで、腫れぼったい目を擦りながら春菜が朝食をとったのは、普段より少しばかり遅い時間帯であった。

泣き疲れからか、倦怠感を身に纏いながら、もそもそと食事を口に運んでいる最中にその訪問者は現れた。

「その娘は誰だ」

頭に白いものの混じった老齡の男は、家に入るなり春菜を一瞥すると強い声音で時彦に尋ねた。

春菜は一先ず箸を置いて、黙って成り行きを見守ろうと、突然の訪問者に視線をやった。

老いてなお萎びる事なくしっかりと太い声音とたたずまいから、昔は退魔師として腕を鳴らしていただろぅ事が分かる。

「拾いました」

時彦もまた固い声音で返す。

「ここに連れて来たと言う事は、嫁に迎えるつもりか？みだりに村に人を入れるでない」

「物の怪に襲われている所を助けた身寄りのない娘です。頼る縁者もなく、連れ歩いていたまでです」

聞き慣れない時彦の丁寧な言葉遣いは、何かを拒絶するかのようで春菜は、訪ねて来た男同様、全くの無表情で対峙する時彦にちらりと視線をやった。

「なぜ適当な村に預けて来なかった」

疑問と言うよりは攻めるような口調で男は続ける。

「むやみに人を入れてはいけない村であるのは分かっていますが、決して余人を入れるなどの掟がある訳ではなかったと記憶していますが。現に今までも外界を封鎖しているはずではないと理解しています」

「それは間違っではないが、わざわざ人を招いて歓迎するような

村でもない」

あくまで男は突き放すように言葉を並べる。「そうですね。招いたのが、穢れた一族の末裔ともなれば、なおさらでしょうね。近隣の村ともわずかにしる交流はありますし、人が訪れた程度で目くじらを立てる必要がありますか？」

「その娘に信が置ける、とお前の身を持って保証するなら構わん」
無表情だった顔を、少しばかり不機嫌そうなものに変えて男は忌ま忌ましげにそう言った。

「何かありましたら、そうします。何かあった方が、とうとう根絶やしに出来て一石二鳥でしょうね」

相変わらず何の表情も浮かべない時彦を男は睨み付けるようにして見ると、気を落ち着けるように息をついた。

「さて、本題だが」

長い前置きに、あれが本題ではなかったのか、と少しばかり胸を撫で下ろして、春菜は成り行きを見守った。

「年明けまで村に留まれ。村で話し合った結果だ」

「俺がいたところで、いらぬ波風が立つと思いますが」

棘を含んだ言い方をする時彦にちらりと視線をやって、男は鼻を鳴らした。

「だから年内と言っている。あまりに村をあけすぎだ、お前は。分担してやる村内での仕事がある。お前がそれに協力する事を期待している訳ではないが、一年毎に村と外を行き来するのは掟だ。不本意ではあるが、守らぬ者がいると、示しがつかん」

不機嫌そうに言くと、男は時彦を改めて見る。

「とにかく、年内は村に留まれ。そうすれば、こちらも特に関わるつもりはない」

言って男は立ち上がる。

「……わかりました」

渋々と言った様子で小さく頷くと、時彦もまた立ち上がった。

「感じ悪」

思わず呟くと、男を見送った時彦が苦笑しながら振り返った。

「言ったところで、どうにもならん」

「だって気分悪いじゃん」

顔をしかめる春菜の隣に腰を下ろして、時彦は無表情のまま言葉を続けた。

「仕方ない。退魔師は、こうやって一族を守ってきた。退魔師の減少はそのまま、仲間の死に繋がる」

そうじゃない、と言う反論の言葉を飲み込んで、春菜は食べかけの朝食をつついた。

「悪いな、しばらくここで足止めだ」

黙り込んだ春菜が怒っていると勘違いしたのか、時彦はそんな事を口にした。

春菜が怒っているのは、村の掟ではなく、あの男の時彦への態度についてなのだが、時彦は見当外れな事を言い、春菜はさらに表情を険しくした。

盆地の気候の特性が、季節が移り変わり始めた現れか、陽が落ちると途端に冷え込み肌寒い。

もう数刻もしないうちに陽も暮れるだろう時間だった。

一日を洞窟の中で過ごしたものの、新たな成果はなく、二人はとにかくもう一度その術を再現しようと洞窟の家の間の少し開けた空き地で動いていた。

特に手伝うことも出来ずに、春菜は座ったままその様子を眺めていた。

簡単な祭壇のような物が組まれていく。

祭壇と言うあまりに簡素な印象を受けるそれに、時彦は小太刀を乗せる。

その前に木を積むと、火を焚く。

同時に、それまで手伝っていた梓彦が、火の前に立つ時彦から距離

を取り、春菜の横まで下がった。

それが術の始まりのようだと気づいて、春菜も時彦に視線を送った。小太刀を手に取り、時彦は炎に翳した。

そのまま時彦は動かずに立ち尽くしている。

背後にいる春菜には表情は見えないが、何やら集中しているのだろう様子は伝わり、黙って目を凝らした。

周囲の力に、何か手掛かりはないかと思ったのだ。

良くは分からないが、何となく時彦の周りには力が多く集まっているような気がした。

「違う」

唐突に気付いた。

思わず小さく声を発した春菜に、梓彦が訝し気な視線を向けた。

力は、時彦の周囲に集まっているのではなく、春菜と小太刀の間に緩く集まっているのだ。

一筋の力の道のような物を、どこか視覚や触覚に頼らない別の感覚で感じた。

その道に惹かれるように力が漂ってくる。

不意に、体を引かれるような感覚に襲われた。

その奇妙な感覚にたたらを踏む。

突然よろめくようにして前に出た春菜に驚いたのか、梓彦が春菜の腕を掴んだ。

「おい、どうした？」

慌てたような梓彦の声に、驚いたのか、時彦も振り返った。

「あ、ごめん」

思わず交互に二人の顔を見比べた。

「どうした？」

小太刀を手にしたまま時彦が歩いてきた。

春菜と小太刀の間にある何か。

それが、更に強くなり太くなり、周囲の力を巻き込むようにして、春菜に絡み付くように迫る。

そのような錯覚に襲われた。

「っや、やだっ！」

一歩後ろに下がり、顔を庇うように腕を上げた。

反射的につぶつた目を、そろそろと開いた。

春菜に向けて伸ばした手が行き場を無くして、宙に浮いていた。

驚いたように固まっていた時彦は、一度手を握り締めるとすぐに下ろした。

「どうした、大丈夫か？」

微妙な距離間のまま、時彦はどこか傷付いた表情を浮かべていた。

「ごめん、違うの、刀が…」

感じる物をどう表してよいのか分からず、言葉を濁す。

「なんだか、怖くて」

「昨日は普通に触っていなかったか？」

訝し気な時彦に、春菜は困って視線を小太刀に向けた。

「昨日は、違った…今急に…。嫌な感じじゃないの、何か、圧倒されそうで怖い。それに…」

続く言葉を飲み込み、春菜は小太刀を見る。

今もまだ春菜と小太刀を繋ぐように何かがあった。

見えはしないが、繋がっている、と言う確信。

触れる事も出来ないそれに、指を伸ばした。

そこにある、と確信している見えない何かを辿るようにして、小太刀に手を差し延べた。

一瞬躊躇した後に、春菜は時彦から小太刀を受け取った。

「春菜？どうした？」

言われて、始めて春菜は涙を流していた事を自覚した。

「あれ？おかしいな、どうしたんだろ」

拭っても拭っても、次から次に溢れてくる、理由すら分からない涙を止める事は出来なかった。

「何でだろう、すごく、悲しい…。悲しくて懐かしい」

「それ貸せ」

突然背後から伸びてきた逞しい腕に、手にしていた小太刀を奪われた。

途端に、今の今まで感じていた狂おしい程の切なさや跡形もなく消え去った。

ぼろぼろと泣いていたにも関わらず、その感情を唐突に見失って、

春菜は反応出来ずに小太刀を取り上げた梓彦を振り返って固まった。

「落ち着いたか？」

こくりと頷くと、梓彦は呆れたように春菜を見た。

「なら早く涙を拭け」

言われて慌てて着物の袖を拭く春菜を見ながら、梓彦は言葉を続けた。

「それで、術は失敗したのか？」

春菜は時彦と顔を見合わせた。

「成功、したよね？」

時彦に尋ねると、時彦もまた自信なさに頷いた。

「おそらく」

二人の煮え切らない返答に、梓彦は不機嫌そうに目を細めた。

「で、結局どういう事だ？」

「なんて言うか、急に引張られて。ここに来る時も、同じような感覚があったから、きっと成功したんだと思う」

「その後は？」

尋ねられて、春菜は返答に詰まった。

春菜自身にも良く分からない事を説明するのは、酷く難しかった。

「分からない……ただ、なんか小太刀それが怖くて。あれが縁、かな？ ちやんとね、それと私が繋がってるって分かった。それが、強くて力が集まってきた、すごく大きくなって飲み込まれそうで、怖かった。それに、小太刀それを見ると、何だか悲しくなってきた……すごく、悲しい事を思い出しそうで」

今は全然何も感じないけど、と笑って付け加えた。

「でも、何だったんだろうね？ もしかして、前世の記憶かな？」

梓彦から小太刀を受け取りながら言うと、時彦はさあな、と首を傾げた。

「退魔師に聞くな。専門外だ」

「でも、何となくこれは私の物だ、って思った。どうしてか分からないけど、この剣は、二つとも私の物だよ。きっと、私以外持ち主にはなれない」

それに時彦は訝し気な表情を作った。

「なぜ？」

「だから、分かんないんだって。何となくそう思っただけ」

「お前は、何となくが多過ぎる」

呆れたように、溜め息混じりに時彦に言われ、春菜は言葉を詰まらせた。

「それは良いが、何か分かったのか？」

黙って何か考え込んでいた梓彦に言われ、二人は首を傾げた。

「手掛かりなしか」

溜め息混じりに言われ、春菜もまた溜め息を落とした。

「どうする？もう何か分かりそうな当てはないんだろ？」

「……ああ」

梓彦の言葉に、時彦は酷く言い辛そうに同意した。

青冷めた顔をした春菜に梓彦は視線をやった。

「俺は、村でその小太刀と、春菜を呼び出したような術がないかを調べてやる。何か出かかりがあるかもしれないが、時彦では無理だろうからな」

言って、時彦にそれで良いか、と確認を取る。

「…頼む」

珍しく殊勝な態度の時彦は、そうだ、と思い出したように声を上げた。

「朝、村の奴が来た。年内に俺も村にとどまる事になったから、手伝えそうな時には俺も村に顔を出す」

村で何か耳にしていたのか、特に驚いた様子もなく梓彦はただ頷い

た。

25、術（後書き）

今月始め目標と言いながら、はや月末…。次こそは早めの投稿が出来るように頑張ります。次かその次か、近いうちによやく物語も動き出す予定。カンの良い方はもういろいろと気付いてらっしゃるかもしれませんが…。では、よろしければまたお付き合いください。

26、釣り合い

「一晩考えたんだが」

そう梓彦は、朝餉を片付け終わった頃に切り出した。

結局昨日も術やら何やらで遅くなり、梓彦は泊まっていたのだった。

「春菜、力の扱い方を時彦に習ったらどうだ」

時彦と梓彦が視線で何やら会話したのを見て取って、二人の間でこの話しは既に話し合われていた事柄なのだと伝わって来た。

「物の怪の気にも、力の感覚にも鋭い。それはおそらく力を扱う上では有利なはずだ。退魔師と行動を共にするならば必然的に物の怪にも出会う。ある程度身を守る術を持っていた方が良いだろう」
時彦が重ねてそう告げた。

春菜は何と答えて良いか分からずに、ただ黙って聞いていた。

彼らを信じていない訳ではないが、酷く微妙な立場なのではないかと思ったのだ。

ここで物の怪が出た訳ではないにも関わらず時彦が力を使った時の梓彦の表情や態度、発した言葉、その全てが何の制約も受けずに力を扱える事がどれほど有り得ない事なのかが身に染みて分かったのだ。

更に退魔師と朝廷は対立関係にあると言う。

そこで、大君の一族の特権とすら思える、力を自由に扱える能力、それを時彦達に告げるのは勇気のいる事だった。

春菜が悪い訳ではないが、何か裏切りのようにすら感じられた。

「何も物の怪と戦えと言っている訳ではない。ただもしもの時のためだ」

春菜が何事か考え込んでいるのを、違った風に勘違いしたのか時彦はそう言って笑ってみせた。

「時彦、違うの。物の怪と戦うのが恐いとか、そうじゃなくて……」
どう言ったものか、と一度口を噤んで春菜はわずかに考え込んだ。

「あのね、有間と一緒にいた時に知ったんだけど、私……その、有間と同じ、みたい……」

「……は？」

意味を図りかねると言った表情で、二人揃って春菜を見返す。

「だから、私も力を扱えるみたい……。有間は、きつと私もどこかで大君の一族の血を引いてるんだろう、って……」

尻すばみに小さくなりながら、そう告げた。

二人は何の反応も表さずに春菜を見ている。

さすがに居心地が悪くなってきた頃に、ようやく時彦が口を開いた。

「それはつまり、力を扱う事に何の制約もないと言う事か？」

確認するように問われ、春菜はゆっくりと頷いた。

「私もね、知らなかったの。ただ、有間という時に物の怪に喰われかけて」

口にした途端、ぎよつとしたように目を見開かれ、春菜は続く言葉を見失った。

「喰われかけた？」

「うん、物の怪の中に入っちゃって。取り込まれる前に何とか出れたから大丈夫だったんだけど」

春菜の説明に、さらに啞然として二人は固まった。

「それで、それから力を使えるって分かったんだよね」

「常識外れにも程があるぞ」

ようやくそう呟いたのは梓彦だった。

「なら、力は不自由なく扱えるのか？どの程度出来る？」

時彦に聞かれて、春菜は首を傾げた。

「分からない。実際に力を使ったのは数える程だし、私は知識がないから……。出来るなら、いろいろ教えて欲しい」

それに、時彦は分かった、と頷いた。

「春菜、それは絶対に村では漏らすなよ。大変な事になるだろうから。話せば下手をすれば命の保証はないと思え」

梓彦の厳しい言葉に、神妙な面持ちで頷く。

「とにかく、俺は小太刀について何か分かるかを村で当たってくる」
何か考え込んだ表情で梓彦はそう言い、どこか探るような視線で春菜を見た。

翌日から時彦は、春菜に様々な話を話すようになった。

力の使い方に関しては、何を教えても教えた以上の事をやってのける春菜の様子に早々に教えると言う行為を諦めたのか、世界の理や、春菜にとっては迷信のような常識を教え込むようになった。

「力は全て女神のものだ」

村に滞在して一月が経とうかと言う頃だった。

「引いては、玉依姫のものでもある。八百万の神々のものではない」

「でも、神様から許可を得たら力を使えるようになるんでしょ？」
胸に浮かんだ疑問を口にする。

自分のものでない力を使用する事を許可するのは、酷く奇妙な事にした。

「厳密には、神にも人とはまた違った制限がある、と言う事だ。何の制限もないのはこの豊芦原では玉依姫ただお一人だ」

時彦はいつも、春菜が口にする疑問を一つ一つ解説しながら話しを進めて行く。

「神々には、力が顕現するものに対して制限がある。例えば、火の神であれば、力を持って創造出来るのは火のみだ。山の神なら、山に関わる事、水の神なら、水を、と言ったようになる。司る事象に関わる事にしか力を使えない」

春菜が理解しているか確認しながら、時彦はつまり、と言葉を続けた。

「つまり、神は力による創造の幅に、人は力を自らの意志のみで扱う事に制限がある。だからこそ、神もまた退魔師を必要としている」
春菜が首を傾げると、時彦は口の端を持ち上げた。

「神にとつても物の怪は、やっかいな存在だ。全ての根源である力を喰らう存在など、豊芦原にとつて脅威でしかない。物の怪にとつて全てが力によつて存在している豊芦原は全てが食料のようなものだ。神にとつても厭うべき存在だ。火の神であれば、自力で撃退も出来るだろうが、物の怪に戦うには不利な神は、人に力を使う許可を与える事によつて物の怪を抜う」

「ふーん。じゃ、人と神様は、どっちが本当の神様…女神様？に近いんだろうね。神様なのに、神様の神様がいるつて変な感じ」
春菜の言葉に時彦は、苦笑する。

「お前はいちいち考え方が変わっているな。どっちが近いものにも、人は神の許可がなければ力を使えないんだ。ただの無力な生き物だ、考えるまでもない。人の上に神が立ち、その神々を纏め上げるのが、女神であり玉依姫だ」

時彦の言葉は完結で、何の迷いもない。

事実を、真実と疑わない揺ぎ無さがあつた。

「常識つてさ、やっぱり常識の外にいないと、それが真実であるかどうかも分らないよね。別に、疑う訳じゃないよ？でも、私は神様がいるのかいないのか、つてところからこの常識に躓くから」

時彦が少しばかり眉をひそめたのに、春菜は慌てて最後にそう付け足した。

「むしろね、私の世界では、神様がいない方が常識に近くて。大真面目に神様がいて話す人なんていなかった。習慣は残つてても、それは文化であつて形だけのものだったしね。何が真実か、なんてきつと第三者が見極めないとわからないものなんだよね。真実つて、一つしかない、つていうけど、本当は一つしかないのに見えないものなんだな、つて思つて。もう私の常識は壊れすぎて、何が真実かなんてさっぱりだよ」

笑つて言つと、春菜は不意に片手を上げた。

ふわり、と風が起こり、髪が揺れる。

「こんなのだって、非常識。この世の成り立ちは、科学や物理とか、

そんなことが全て。科学で説明できないものは何一つない。そんな世界。それが当たり前で、常識で、真実だと思ってただけだなー」笑って春菜はそう言う。

不思議なほどに抵抗がなかった。

神の存在にも、力の事にも。

それは、春菜自身が、この世界と春菜の世界を意識的に無意識的には、別の世界であるどこかで認識してしまっているからなのかもしれないなかった。

春菜には、どうしてもこの世界が春菜の知る世界には繋がらなかった。

「私の時代にはさ、神様とか、力とか、物の怪とか、どこに行っちゃったんだろうね？過去と未来で、繋がってるんだよね、ここそこは」

半ば独り言のようにつぶやく。

時彦に答えを期待していた訳ではなかったが、思いがけずに返答が返ってきた。

「お前が戻れば、確認できるだろう。何が真実なのか。お前はもう、お前の時代の常識外の事を知ったんだからな」

思わず黙って時彦の目を見た。

見上げる形になった春菜の頭に手を置き、乱雑にかき乱して、時彦は苦笑した。

「そんな顔をするな。お前が望む限り、俺が帰してやるさ、絶対に」そんなに情けない顔をしていたのか、と顔に手をやりながら春菜はそれに頷いた。

何の保障もなかったが、そう言ってくれる時彦の心遣いが嬉しかった。

梓彦は、毎日のように時彦の家に通っていた。

特に何も資料が見当たらないのか、あまりかんばしい進展はないようだったが、時彦と春菜の様子見がてらに、夕方頃に来ては夕飯を

共にして行くのが日課となっていた。

案外まめな性分なのかもしれない、とそんなことを思いながら春菜はそれなりに安穩とした日々を送っていた。

「春菜、お前、力の扱い方はどうなんだ？順調か？」

唐突に発せられた梓彦の言葉に答えたのは、時彦だった。

「どうもこうも。玉依姫の血筋とは恐ろしいぞ」

溜め息交じりに言うと、恨めしげな視線が時彦から送られ、春菜は小さく肩を竦めた。

「まあだが、それならば力について知るのもあながち間違いじゃないかもな」

考え込むように言うと、梓彦はゆっくりと言葉を続けた。

「春菜がこちらにきたのも、力と関係があるんだ。力や術について知れば知るほど、帰る方法に近づくかもしれない」

「そうは言われても、あまりに漠然としすぎてて、よく分かんないけどな」

春菜は苦笑交じりに呟く。

「あまり力を使いすぎると、村の連中に気づかれるからな。そろそろ村番ではなかった連中も帰ってき始めているしな」

「ああ、もうそんな時期だな」

「何かあるの？」

二人して何か納得している様子にそう尋ねる。

「退魔師の儀式のようなものがあるんだ。正確には真似ごとで、大した意味はないんだが、年末に一日、退魔師の一族が一同に会する。そういう日としての意味合いもあって、続けられてる、物の怪払いの儀式のようなものだ。気休め程度で大した意味はないがな」

時彦の説明に、春菜は曖昧に頷いた。

「お正月の里帰りみたいなもの？」

「まあ、間違いではないな。昔、玉依姫が行っていた大袂を真似たおおはまね退魔師の儀式でな。年に二回、玉依姫は大袂を行って、この地を物の怪から守っていたらしい。それを受け継いで、真似まねことながら、

退魔師でその儀式を受け継いでいる。宮中でも似たようなことをしているらしいが、そちらもやはり形式的なもので、どちらにしろ物の怪を実際に払うことはできないようだがな」

気のない様子で簡単に説明すると、時彦は夕飯の片づけに取り掛かる。

「大袂？」

聞きなれない単語に聞き返すと、梓彦が、頷いた。

「ああ。夏と、年の末の晦日つこもりに二回ある。まあ、読んで字の如くだな。物の怪を払うんだよ。物の怪、つまり穢れを払う行事だ。玉依姫が大袂を行っていた時には、大袂にはおもに二つの意味があったらしい。一つは、国家や民草の穢れを祓い、安寧を祈るもの。もう一つは、物の怪から人々を守ること、だ。実際には後者に重点を置き、穢れを払うだのなんだのは、形式的なもので、神としての玉依姫の姿を示すためにしていたとも言うな。物の怪を払うだけならば、人の前に出ずとも出来たようだったからな。まあ、何分古い時代だ、詳しくはわからんが。とにかく、国家の安寧を祈る祝詞などからなる部分は、朝廷の奴らが受け継いでいる。退魔師は、物の怪の部分だな。もちろん、ただ人の退魔師ごときに、玉依姫が行っていたような大袂はできず、本当に気休め程度の効果もあまりないような大袂だがな」

模範解答のような説明を梓彦はすらすらと口にした。

「…梓彦ってさ、以外と頭脳派？」

一見、梓彦の体格や荒々しい風貌からして、いかにも歴戦の猛者、と言った印象を受けるが、その実梓彦は、たいていの事に知識造形が深く、慎重な性格のようだった。

「頭まで筋肉でできてるような体だけど、以外と頭が切れるんだよ、こいつは。性格も案外繊細な奴だしな」

からかうような調子の時彦に春菜は小さく笑い声を漏らした。

「そう言う時彦は、案外猪突猛進型だね。考えなしって言うか」
笑い含みに言うと、梓彦がしめたとばかりに口を開いた。

「まったくだ。こいつは頭は悪くないが、使い方を知らん」

「二人って、見た目と役割が反対だね。釣り合いは取れてるけど」時彦も体格はしっかりとしているが、端正、というよりは鋭いという表現の合うような風貌をしているため、春菜の印象では山の男のようなどころのある梓彦とは役割が逆だった。

「俺は褒めたのに、なんでお前はけなすんだよ」

不満そうな口ぶりの時彦に、梓彦はふん、と鼻を鳴らした。

「あれが褒めてたのか？とにかく、大袂も近いんだ。時彦、あまり揉めるなよ」

最後に釘を刺すと、梓彦は立ちあがった。

「帰るのか？」

「ああ。そろそろな。また明日来る」

短い挨拶をすませると、梓彦はいつものように村へと帰っていった。

26、釣り合い（後書き）

またまた大変お待たせいたしました。

読んでいただいてありがとうございます。

次、ですね。

次からちゃんと物語が動き出します。

…遅いですね。

展開が襲いな、といつも反省するのに、結局また遅くなるのはどうした訳か。

今日のは、予備知識補足というか、世界観の補強というか。

そんな要素の強い内容で、読んでる方からするとつまらないのでは、と思ってみたり。

今回のだけでなく、面白いのかつまらないのかなんて、書いてる側にはわからないものですね。

では、次回こそあまり間があかないようにしたいと思います。

よろしくお願いします。

27、大被

しんと張り詰めたような空気に、春菜は目を覚ました。

頬に触れる空気の冷たさに、春菜はもぞもぞと体温で温まった布団に潜り込んだ。

前日の夜から急に冷え込み、今朝はいつも以上に寒さで空気が張り詰め、鋭さを増していた。

外はしんと静まり返り、張り詰めた空気に、どことなく時が止まってしまったかのような感覚があった。

ふと隣に目線をやると、布団から覗く半分閉じた瞳に行き当たった。「おはよ。起こしちゃった？」

冷たい空気によって、目は完全に覚めていたが、布団の温もりから抜け出せずにいるまま春菜は時彦に声をかけた。

「…雪が積もったかもしれない」

春菜の問いには答えずに、時彦は幾分眠たげな声で半ば一人言のように呟いた。

「え？雪？」

「ああ。空気がそのような感じだ。もしかすると、相当積もっているかもしれない」

寒さを耐えて布団から抜け出すと、肌を刺すような冷たい空気に包まれた。

白い息を吐きながら、戸口に近づく。

土間に降りると、さらに地面から寒気が忍び寄ってくるようだった。^{かまこ}竈の脇に置いていた桶には家の中だというのに氷が張っていた。それを横目に見て、引き戸に手を掛ける。

「……あれ？時彦、開かない……」

普段であれば、それほどの力を込めずとも開くはずの扉がなかなか開かない。

おかしいな、と思いながらも一度戸にかけた手に力を込めるが、

やはり動かない。

仕方なく、両手を添えて、もう一度同じことを試みた。わずかに開いた隙間から、さらに冷たい空気が流れ込み小さく身震いする。

もう一度、足を踏ん張り、全身で引くようにして戸を引いた。唐突に、何か引つ掛かりがとれたように、大きく開いた扉に、体の均衡を崩してたたらを踏む。

そうして、ようやく顔を上げて、春菜は驚きに目を見開いた。

流れ込んでくる冷氣など、気にも留めずに、春菜は一步、二歩と足を進めて、戸口の手前で立ち止まった。

立ち止まったというよりは、それ以上は進むことが出来なかったのだ。

「時彦！すごい！ほんとに雪だよ！」

振り返って、大きな声を上げると、時彦は布団の上で胡坐を掻いて、こちらを見ていた。

「すごいよ！一晩でこんなに積もるの？」

春菜の腰の当たりにまで積もった雪が、邪魔をして戸が開かなかったのか、と納得して、春菜は白い壁となって春菜の前に立ちふさがる雪に手を伸ばした。

「昨日までなかったのに……」

驚きと興奮に、寒さを忘れて、春菜は冷たい雪に触れる。

春菜はあまり雪を見たことがなかった。

小さい頃から東京住まい。

都心では、滅多に雪など降らず、さらに積ることなどほとんどなかった。

積もったとしても、うつすらと地面が白くなる程度。

これほど大量の雪を間近に見るのは、初めてのことだった。

まして一晩でこれだけの量が積もったなど、信じられない思いだった。

まじまじとただ雪を眺め、白い雪に覆われた外の景色に視線を向け

ていた春菜は、木の爆ぜる音に驚いて後ろを振り向いた。

寒さに耐えかねたのか、囲炉裏に火を起こしていた時彦を見とめて、春菜は慌てて戸を閉めた。

忘れていた寒さを思い出して、慌てて春菜は時彦の傍に向かう。

「そんなに雪が珍しいか？」

そう言えば、初めて霜柱が立った時にも、氷が厚く張った時にも、春菜は同じように驚いて観察していたな、と思いだして、時彦は苦笑交じりにそう尋ねた。

「ごめん、寒かったよね？」

問いかけには答えずに、申し訳なさげな表情で言つて、春菜は火に手をかざす。

「雪なんて、全然降らないから、びっくりしちゃった」

「まあ、一晩でこれほど積もるのは珍しいな」

欠伸を噛み殺して、そう答えると、時彦はぼんやりと戸口に目をやつた。

「これだけ積もったとなると、梓彦は今日は来ないかもしれないな」
半ば独り言のように呟くと、時彦は小さくため息を落とした。

「さあ、さつさと朝飯でも食うぞ。そのあとは、雪かきだ」

嫌そうに顔をしかめながらそう言つと、時彦は朝食の支度に立ち上がった。

まず冷たくなるのは末端からだつた。

両の手足と、耳と鼻。

そこがまず熱を奪われ、痛みを伴う冷たさに襲われる。

同じように鼻を赤くした時彦を見ながら、春菜もまた同じような鼻になっっているのだろうか、と息を吐いた。

すぐさま真白な煙のようになる息にすら熱を奪われている気がして、何やら恨めしかった。

最初のうちこそ物珍しい雪に、ただただ興味を惹かれ、雪かきも何の苦痛もなかった。

しかし、東京では感じることのなかった寒さに、春菜はすぐに辟易した。

「時彦、もう無理…手作業じゃなきゃダメなの？」

もくもくと家の前の雪を掻きわけるとき時彦に声を掛けると、時彦は何が言いたいのだ、と春菜を振り返った。

本当に分っていない様子の時彦に、説明するのも億劫で、だから、と春菜は目の前の雪に積もった雪に目を向けた。

「こう言うこと！」

言葉と同時に、最近では完全に意のままに操れるようになった力を使う。

まるで重さを感じさせない動きで、ふわりと雪が持ち上がり、目の前にあった雪は両脇にうず高く積まれ、一本の道が現れた。

楽でしょ、と振りかえると、呆れたのか驚いたのか、判別のし難い微妙な表情を浮かべる時彦と目が合った。

「駄目だった？」

時彦の表情に不安になって尋ねると、いや、と時彦は首を横に振った。

「なんとなく、罰当たりな気がしてな…」

言葉を濁す時彦に、春菜は苦笑した。

退魔師にとって、力をは神聖なもので、物の怪を払うためのとても大切なものであるという認識が強いらしかった。

そのため、いくら時彦の家周辺では自由に力を使えると言っても、やたらと力を使うことはなかった。

火を起こすのも、何をするのも、全てが手作業だった。

「使えるものは、使つとかないと」

それに、完全に割りきった様子で春菜は返した。

雪もまた、自然界のもの。

生命があるわけではないが、この世のものが全て力によって形造ら

れるなら、雪もまた然り。

生命が宿らない分、力を通わせれば、簡単に春菜の意にそって動き出す。

それは空気、つまり風や水、火なども同じだった。

実際に創り出すことも、また今のようすでにあるものに力を送り込んで操ることも、命が宿らないものに対しては簡単なことだった。「お前ら……人に見られたらどうする気だ」

唐突にかけられた声に驚いて振り向くと、ちょうど春菜が雪をどけてしまったところに梓彦が立っていた。

「梓彦。来ないかと思っていたぞ」

幾分驚いたように時彦が声をかける。

「仕方ないだろう。明日は大袂だ。お前と連絡を取るように言われた」

何かあったのか、眉を寄せながら言つと、梓彦はすぐに春菜に目を向けた。

「それにしても、随分力の使い方に手慣れているな」

「え？」

梓彦の目の奥に良く分からない感情が浮かんだような気がして、春菜は首を傾げた。

何か、考えているような、言つなれば何か春菜に対して疑惑を抱いているような探るような視線だった。

「それで、なんだ？何か言われて来たのか？」

時彦は特に何も気付かない様子で梓彦に要件を促した。

「ああ、大袂には参列するだけで良い、役割は特に与えない、だよ。それと、春菜も連れて来るように、とのことだ」

「春菜も？」

わずかに表情を険しくして時彦が尋ね返すと、梓彦は無言で頷いた。

「大丈夫だとは思うが、一応離れないように気をつけておくんだな」それに頷き返して、春菜は梓彦にもう一度視線をやった。

しかし、もう梓彦の顔には先程の表情が浮かぶことはなかった。

その日はそれ以上雪が降ることもなく、よく晴れたままだった。

けれど、真白く染まってしまった景色の下から色が現れることはなく、雪はきらきらと光を反射するばかりで一向に溶ける気配はなかった。

晴れたまま一日が終わり、翌日にもまた、雲一つない天気は続いていた。

春菜には経験のないことだったが、良く晴れた夜の翌朝はその分冷え込む。

いつだったか理科の授業で習った放射冷却を言う単語を思い浮かべて、春菜は白い息を吐きながら空を見上げた。

梓彦も昨日は帰らずに時彦の家に泊まったため、春菜たちは三人で時彦の家を出た。

昼もすぎ、日が傾き少し経った頃だった。

大袂は、夕暮れから夜にかけて行われるらしく、三人もそれに合わせて家を出ていたため、まだ日は十分あるが、少しばかり斜めに日が頬を照らした。

一番先頭を上背のある梓彦が進み、次いで春菜が、最後に時彦が並び、一列になり雪を掻きわけるようにして進む。

梓彦が十分雪をかきわけてくれるものの、それでもやはり慣れない雪道は歩き辛く、体力も体温も奪われた。

それを一人で雪を掻き分け、道を作りながら特に疲れた様子も見せずに進む梓彦の体力に改めて関心しながら、春菜はただただ雪に足を取られないように歩くことに集中していた。

後ろでは時彦が春菜の様子を気にかけては手を貸してくれたりもしていたが、それでも腰近くまである雪道を歩くのは相当な労力を要した。

村に着く頃には疲れきっていた春菜は、雪掻きの済まされた道に入り、安堵の息を吐いた。

「行くぞ」

時彦に声をかけられ、頷き返すと、春菜は人気のない村の通りに目をやった。

もうすでに、大袂の行われる場所に移動してしまったのか、村には人がなかった。

梓彦、時彦の二人は迷いのない足取りで進んで行く。

村の中心部に向かうように歩きながら、二人は終始無言だった。

少しばかり歩いた先に、大きな壁が現れ、中では火が焚かれているのか、明かりが漏れてきていた。

入り口には、外を見張るように二人の村人が立っていた。

時彦たちの姿を見ると、二人はこちらに向き直ったが、特に何も声をかけられることなく三人は壁の内へと足を踏み入れた。

途端に水を打ったような静けさに包まれた。

時彦が足を踏み入れた瞬間、その場に集まっていた村人たち全員の視線が時彦に集まった。

次いで隣同士小さく囁き交わす声に満ちた。

どれも好意的とはいえない難しい視線だった。

好奇の目は春菜にも注がれ、あまり聞いていて楽しくはないような話し声が耳に入った。

時彦は相変わらず無表情だったが、梓彦は不快げに眉を寄せていた。

「よお、久しぶりだな」

どこことなく聞き覚えのある声に横を見ると、いつだったか時彦の家を訪れた二人組の姿があった。

「元気だったか？」

春菜は笑いかける男に表情を消して視線だけを向けた。

「連れないね。そんなに冷たくしないでよ」

ひよろつと背の高い男は言いながら春菜の顔を覗き込んだ。

わずかに眉を寄せて男から距離を取る。

「邪魔だ、失せろ」

低い声に驚いて横を見ると、やはり無表情のままに睨むようにして

春菜の前に立つ男を見る時彦がいた。

「これだから野蛮な奴は怖いねえ」

言って男は、にやりと笑って春菜を見た。

同時に何か言い返そうとした時彦に視線をやると、顎で随分奥の方に組まれた祭壇を指し示した。

「残念、もう時間だ」

ちょうど祭壇には数人の人影が現れたところだった。

同時に鈴が高く涼しげな音色を響き渡らせた。

それは瞬く間に人々の間に行き渡り、鈴の残響が消える頃には完全な静寂が訪れていた。

壇上には三人の姿のみだった。

どこからかもう一度、高く鈴の音が響いた。

それに周囲の人々がいずまいを正す気配が伝わってきた。

そして、三度目の鈴で不意に力の感覚が強まった。

その場にいた退魔師全員が、力を使い始めたのだと気付いて、春菜は困惑して時彦を見上げた。

しかし、力の感覚は強まるばかりで一向に何かが起こる気配はない。周囲を観察して、ようやくただ力を自然に通わせているのだと春菜が気付いた頃に四度目の鈴が鳴った。

長い時間を過ごしていたようにも、とても短い時間だったようにも感じる不思議な感覚だった。

何とはなしに、大地の力強さが増したように感じられ、清々しい気分になる。

「どうした？」

周囲に視線を巡らせる春菜に、時彦は訝しげにそう声をかけた。

「なんか、力が溢れてる感じが…」

どう表現したら良いものかと言葉を濁すと、時彦は小さく笑ってみせた。

「当然だ。大袂は大地に力を通わせる儀式だ。大地に力が満ちることで、物の怪から守られる。まあ、これは、この場所にしか効かな

い。一步外に出れば無効だ」

時彦の話によると、力の使用が許されるのは、この建物内のみで、例えば力による風も、一度外に出ればまるで何もなかったように霧散して、そよとも髪を動かすことすらないと言う。

「本来の大被ならば、豊葦原全体を力で守ることが出来るがな」

最後に付け足して、時彦はそれっきり口を閉ざした。

梓彦は梓彦で、いつものように黙りこくっていたため、必然的に春菜も口を閉じるようになった。

村人は、この後呑み明かし、数少ない再会を喜び会うのだという。

しかし、時彦たちは元よりそれに参加する気は毛頭なく、このまま帰宅することになっていた。

五度目の鈴の音に、ようやく人々は動き出した。

鈴の音だけで、全てが取り仕切られているようだった。

ゆっくりと動き出した人の動きに合わせて、春菜達三人も足を進めた。

ほぼ最後に来たため、すぐに外に出ることが出来た。

積もる話しに夢中になっているのか、すでに外に出ている人の数は少ない。

肌を刺すような寒さに身震いをした春菜は、すぐ側の建物の影に黒い人影があるのに気付いて目を止めた。

暗いため人相は良く見えないが、一人のようだった。

顔の向きから、こちらを見ているようにも見える。

村人だろつか、と思いながら目を離すことが出来なかったのは、ぼんやりと闇に浮かび上がるその背格好にどことなく見覚えがあるような気がしていたからなのか、春菜自身にも良く分からなかった。

なぜか目を反らすことが出来ずに、体の動きもいつの間にか全て停止していた。

「春菜」

呼ばれたのは分かったが、反応することが出来なかった。

「誰だ」

厳しい声で時彦は誰何^{すいか}する。

人影は一步前に進み出る。

月光の元に、鮮やかな笑みが現れた。

「春菜、迎えに来たよ」

現れた人に、どう反応すれば良いのか分からずに、脳裏を様々な思いが巡った。

退魔師と彼は、敵同士ではなかったのだろうか。

「有間……」

名前を呼んだ声が、わずかに震えた。

28、対立

凍えるような寒さすら忘れて、春菜はただ有間を見ていた。

有間は、ふわりと微笑むと春菜に手を差し伸べた。

「行こう、春菜」

梓彦も時彦も珍しく驚きのあまり呆けていたのか、有間の動きに我に返ったようにして春菜を背に庇った。

「何の用だ」

時彦の背に庇われ、視界を奪われた春菜の耳に梓彦の低い唸るような声が届いた。

「だから、迎えに来たんだ。君たちに用はないよ」

有間の静かな声が響く。

「おい、何してる。邪魔だ」

周囲には、退魔師が大勢いることを完全に失念していた春菜は、背後からかかった声に肩を震わせた。

「まずいな」

舌打ちとともに梓彦は言葉を吐き出す。

何がまずいのだろう、と思った時には既に遅かった。

一瞬、しんと静まり返った後に、どこかから、皇子、と呟く声が漏れた。

直後、悲鳴と怒号に溢れ返り、いつの間にやら、周囲から人が消えていた。

春菜たち三人と、少し離れて民家を背に立つ有間を取り囲むように人垣が出来た。

しかし、空いた距離とは反対にそこにいる全員が、恐ろしいほどの激情を目に宿していた。

一人一人の憎しみが、合わさり束になり、大きなうねりになってさらに凶暴さを増して有間に向いていた。

人の感情が、これほど恐ろしいと感じたことはなかった。

「有間皇子か」

声を発したのは、梓彦並みの体軀を誇る男だった。

人垣の前に出ると、彼は有間をにらみ付けるようにして見据えた。問いかけと言うよりは、確認と言う感覚の強い言葉に、有間は薄く笑った。

「私は、残念ながら、朝廷の用で出向いた訳ではない。そちらが手を出さないのならば、私は特にこの村に何かしようというつもりはない。わざわざ大君のご機嫌伺いをする必要もないからね。もちろん、そちらが、手を出すのであれば、私も容赦はしないが。退魔師の村を潰したとなれば、大君も喜ばれるだろうしね」

有間の言葉に、男は黙り込む。

握り締める手に力が籠るのが見て取れた。

周囲を取り囲む男たちの大半は同じ反応であった。

しかし、基本的に大袈に武器を持ち込むことは許されていない。

その為、ほとんどの男たちは何も武器を手にしていなかった。

「村を潰すつもりがないなら、なぜここに来た」

男の問いかけは最もだったが、春菜はそれに身を固くした。

「落した物を、拾いに」

有間は、穏やかな笑みを浮かべたままにそう答えた。

春菜、と名前を呼ばれ、春菜は時彦の前に出た。

同時に、退魔師の間にざわめきが広がった。

「どういうことだ、時彦！」

すぐに広まった時彦への疑惑、不信は、時彦の血筋からしてもおさまりがつかないように見えた。

「騒々しい……。問者ではない。問者であれば、私がわざわざここに来るはずもない。そもそも問者を送りこむ必要が私にはない」

周囲の敵意をもとめせずに、有間は言う。

いつの間にか松明を手にして人々が少し距離を置いて、有間を取り囲むようにしていた。

その炎に照らされ、有間の顔には不規則な影が揺らめいた。

「聞いてくれ！春菜は、時彦が物の怪に襲われているところを助けた娘だ」

染み渡る不信を拭うように、唐突に大声を上げたのは、梓彦だった。低く良く通る梓彦の荒々しい声は、ざわざわとしていた退魔師を黙らせる。

有間は特に何を言うでもなく、面白がっているかのように梓彦を見ていた。

「その後、時彦はこいつに遭遇し、怪我を負わされ、その時に春菜は一度連れ去られた。それを助けだして、ここまで連れて来た、それだけの経緯だ。春菜自身は退魔師の側でも、朝廷の側でもない」
言って、梓彦は春菜に視線を向けた。

その視線に言葉を失い、春菜はただ梓彦の目を見た。
奇妙な視線だった。

梓彦の感情がうまく読み取れなかった。

悲しげな、何かを畏れているような、不思議な色合いを浮かべている目は、何かを悟り、覚悟を決めた人の目のようだった。

静かな、落ち着いた目に、なぜか恐ろしさを感じて、春菜は梓彦の着物の裾を掴んだ。

「梓彦……？」

何を言ったものか分からず名を呼ぶと、梓彦は落ち着かせるように、春菜の頭を二、三度軽くたたいた。

「そう言う訳だ。特に春菜を連れて行った所で、退魔師に不利益はないはずだ」

有間の声にはつとすると、いつの間にか有間は春菜たち三人の目の前にいた。

柔和な表情で笑みを浮かべる有間の顔が、松明の光に照らしだされる。

中性的な美しさを持った有間は、独特の存在感を放っていた。

その存在感に圧倒されたようにする退魔師達をぐるりと見回して、有間はさらに笑みを深めた。

「今、我々が戦うのは、得策ではないはずだ。おそらく、どちらもただでは済まない。特に退魔師にとってはそうだろうね」

一歩前に進むと、有間の時彦の隣に立った。

時彦は、隣に立つ有間に視線を向けようとせず、虚空を睨んでいた。

有間もまた、時彦には目を向けず、片手で一抱ほどの鏡を抱き、もう片方の手を大きく開くようにして退魔師たちを見回した。

「私は春菜さえ連れ帰ればそれで満足だ。退魔師にそれを邪魔だとするほどの理由はあるか？もちろん、私が憎いと言うなら、受けて立とう。しかし、かなりの確率で私は生き残り、退魔師は大きな痛手を受けるだろうね」

有間の姿は、正に人々を統べる者のようであった。

独特の存在感を放つ恵まれた容姿。

人の注目を浴びることに動じず、優雅な美しさすら感じる身のこなし。

全てが、人の関心を引かずにはすまない何かを持っていた。

それに気圧されたように退魔師達はただ有間を凝視していた。

武器もないままに相手にできるような相手でないことは十分理解しているのだろう。

誰も動こうとはしなかった。

けれど、有間に対する敵意は揺らぐこともなく、鋭さを増していた。きつと、と春菜は唐突に思った。

有間がここにいる時間が長くなればなるほど、退魔師との衝突は避けられなくなる。

そのうちに、憎しみが武器もない不利な状況だとか、そういったことすら意味をなさないほど大きくなる。

そうなる前に、出来るだけ早く離れなければ、と突然の衝動に、梓彦の前に出ようとしたが、それを察した梓彦に留められた。

「梓彦、私行くから……」

困惑してそう告げるが、梓彦は振り返ろうとしなかった。

「なぜ、止める？」

同時に聞こえた有間の声は、梓彦に向けられたものではなかった。何が起こったのか瞬時には理解できなかった。

時彦が殴りかかるうとするかのように、動いた。

右腕が大きく振りかぶった。

しかし、同時に有間がそちらに視線を向けた、それだけで時彦は有間によって地面に倒されていた。

「時彦！」

思わず大声を上げる。

「有間、止めて！私一緒に行くから！」

「大丈夫。殺しはしない」

安心させるように笑みを見せると、有間は時彦に向きなあった。退魔師は誰も助けようとはしなかった。

声を上げる者すらいない。

どこか冷めたような目線だった。

「春菜は同意したようだけど？」

地面にうつ伏せの状態で、顔だけ上げて時彦は有間をにらみ付けた。

「この状況で春菜が断るわけがないだろう？俺は、本当に春菜が望むなら止めぬ」

それに一瞬、有間は寂しげな表情になった。

本当に一瞬の内のことだった。

一番間近にいた時彦以外の誰も気付かないほどのわずかな時間。

「ちよつとこちらにも事情があつてね。どうしても春菜を都に連れていかなければならなくてね。手段は選んでられない」

極小さな声だった。

時彦にのみ聞こえるほどの。

最後には、自分自身に言い聞かせているような、そんな響きの言葉だった。

「他の退魔師たちは特に異論はないようだ」

何の動きも見せない取り囲む退魔師達を見て、有間は苦笑めいた笑

いを浮かべた。

「有間！行くから、時彦を放して。時彦も、止めて」
必死な様子の春菜を抑えたのは、やはり梓彦だった。

「有間皇子」

低い声に、有間は顔を梓彦に向けた。

「初めて見る顔だね。何だ？」

「悪いが、春菜は渡せない。これは俺一人の意志だ」

背中しか見えない春菜には、梓彦の表情を窺い知ることはできなかった。

ただ、酷く梓彦の行動に混乱していた。

「春菜が、どれ程行くと云っても、俺は認めない。行かせてはならない」

どこか奇妙な言葉だった。

春菜自身のため、と言いながら、言うなればもつと何か大きなものへの義務が使命のようなものを感じさせるものだった。

「俺は、春菜を知っている」

「梓彦？」

梓彦が何を言っているのかが分らなかった。

急に恐ろしくなって、春菜は梓彦の着物を引いた。

さきほどの、梓彦の目を思い出していた。

「お前も、知っているんだろ？なおさら、渡す訳には行かない」
急に有間の顔から笑みが消えた。

突然の表情の喪失に驚く暇もなく、次に有間の顔に浮かんだのは、
憐みだった。

「…知るべきではなかったね。早死にするよ」

「何を、話しているの？」

何が恐ろしいのか分からなかった。

それなのに、有間と梓彦の会話が恐ろしくてたまらなかった。

おそらく、二人以外の誰も、会話の意味を理解出来なかったのだらう。

「そうかもしれん。が、知ってその為に死ぬなら本望だ」

そう答えた梓彦に、訝しげな視線を送る人々が何人かいた。

「梓彦、私行くから。だからどいて……」

不穏な空気を感じて、梓彦の前に出ようとするが、梓彦は春菜を片手で押し留めたまま動かなかった。

不意に力の集まる感覚がした。

同時に梓彦の意識が春菜から離れ、有間に向いたその一瞬に、春菜は梓彦の腕を掻い潜って前に出た。

「春菜！」

「梓彦！」

梓彦の驚いたような大声と、時彦の危機を知らせる叫び、そして有間の慌てたような表情。

それらに挟まれて、頬のすぐ脇を何かが駆け抜けるのを感じた。

「有間、止めて。絶対ダメ。誰も傷つけないで」

一言一言に強い意志を込めて、そう告げた。

「春菜、そこをどいて」

困ったように、それでもゆずることなく有間は言う。

「何で？何でこんな風にするの？何を二人で話してるの？何を言ってるの？」

腹立たしさを抑えようと務めたが、それでも語尾がきつくなるのを止めることが出来なかった。

「春菜、止める。あいつにだけは着いていくな。何があっても、大君は信じるな」

息巻く春菜を止めようとしたのか、梓彦が春菜の肩に手をかけた。それを振り向き様に乱暴に振り払う。

「梓彦、何を言ってるの？さっき、何をしようとした？何で？私のこといけすかない、とか言ってた癖になんでそんな事しようとするの？今、どうして避けようとしなかったの？」

梓彦のすぐ脇に落ちている矢尻に視線を落とす。

有間が、力で操り、梓彦目掛けて放った物だった。

春菜が飛び出したため、慌てて軌道を逸らしたのだろう。

「私が行けば良いじゃない！私、嫌じゃないよ！なのに、何で止めるの？有間も、なんでそれだけで攻撃なんかしたの？私、行かつて言っただのに！退魔師と、有間がいがみ合うの…私は、そんなの嫌なのに」

感情的に半ば叫ぶように言う。

「春菜、良いから逃げろ！」

負けじと声を張り上げる梓彦に気押されそうになりながらも、なんとか持ちこたえ睨みつける。

「何で？」

「絶対に、ついて行くな。大君には何があっても会うべきではない！分かっていないのは、お前の方だ！」

なぜか怒ったように梓彦は怒鳴る。

「止めるなら、容赦はしないよ」

静かな有間の声が割って入る。

それに、春菜が何か言い返す前に、梓彦が応戦した。

「殺すなら殺せ。俺がお前に殺されて、春菜がお前について行かないのならば、命など構わん」

「何でそんなこと言うの！？梓彦、止めて！」

梓彦の言葉も態度も、何もかもが分らなかった。

梓彦の様子に影響されたように、退魔師たちの目にも闘争心が宿り始めていた。

これ以上長引くのは危険だ、と思った時に、矢が風を切る高い音が響いた。

有間を目掛けたそれは、当たることなく、地に落ちた。

それを皮切りにしたように、退魔師達は完全に有間を平穩に逃がす気はなくなったようだった。

「止めて！」

梓彦に止められるのも構わずに、有間の前に飛び出した。

周囲には、目をぎらつかせた人々の輪。

足元では未だに有間に押さえつけられたままの時彦がいる。

「娘！どかぬなら、容赦はせぬぞ！」

どこからか怒号が飛んだがそれしきで動じはしなかった。

「止めてつてば！」

じりじりと輪を縮める人々に訴えるが、耳に入っていないようだった。

「春菜、後ろにいると良い。大丈夫だ」

雪崩れかかるように人々が来る直前に、有間の声が耳元で聞こえたが、それに耳を貸しはしなかった。

「来ないで！」

我慢の限界だった。

どうなっても構わないと思ってしまった。

力を使えることが露見したところで、すでに春菜は退魔師の敵として見なされているだろう、と思ったからか、それともそんなことを考える余裕すらなかったのか、気が着いた時には遅かった。

耳元で風が唸る音とともに、はっとした時には、すでに周囲に退魔師の姿はなかった。

退魔師どころか、足元には地面すらなかった。

隣では有間が驚いた表情をしていた。

「これが、風になるということか？」

興味深げに聞かれたが、春菜は答えなかった。

「春菜が逃がしてくれるとは思わなかった」

気にした風もなく、有間は楽しげにすら聞こえる口調でそう言った。
「有間！私、ほんとに怒ってるの！何で、あんな風に来たの？あんな風に来なくなったら良かったはずでしょ？何にも言わずにいなくなったのは、悪いと思ってる。でも、なんであんな……」

言いながら、適当な人気のない場所に降り立った。

文字通り風の速さで退魔師の村から離れた春菜たちは、どことも知らない山の中にいた。

「春菜」

驚いたような有間の声とともに、柔らかい感触に頬を包まれた。

「悪かった。泣くな…」

困ったような表情で覗きこまれて、ようやく泣いていたことを自覚した。

「誰かが傷つくのは嫌なの…」

呟くように言うと、有間は小さく頷いた。

「努力しよう」

おそらく精一杯の誠意なのだろう。

誰も傷つけずに生きていける立場ではないということは春菜も知っていた。

「何で、あんな風に出てきたの？」

少し気持ちが落ち着いて尋ねると、有間は少し困ったように笑った。その笑顔も優しい気遣うような視線も、別れた時のままだった。

「少し、問題が起きてね。それで、春菜を探していたんだ。今日が大晦日だと言うこともすっかり忘れていてね。あそこまで大騒ぎにするつもりはなかったんだけどね。もう後に引けない状態だったから」

「…そうは見えなかった」

思わず有間に文句を言う。

それにも有間はやはり微笑むばかりだった。

「体面を取り繕うことには慣れているからね。生き抜くためには、どのような状況でも冷静でいることだ」

何でもないことのように言う有間の顔には、何の表情も浮かんでいなかった。

ただ、中身のないふわふわとした空っぽの笑顔だけが張り付いていた。

「忘れない方が良く。これから、行く所は、蹴落とすか蹴落とされるか、邪気悪鬼の巣窟だ。弱味を見せれば付け入られる。常に本音は隠して仮面を被る。それが出来なければ、すぐに命を落とすことになる」

突然、真面目な顔になって、釘を刺すと、有間は春菜の手を取った。
「これから行く場所？」

手を引かれ歩きながら尋ねると、ああ、言ってなかったね、と有間が振り返った。

いつものように、大したことでもないように、有間は春菜に告げた。
「これから、朝廷に行く。大君に会うことになるよ」

28、対立（後書き）

ちよつと、後悔気味な、28話。
こんな風にもっていく予定じゃなかったのに……。

29、三種の神器

「ちょっと待って、大君？天皇陛下：一番偉い人ってことでしょ？
何で私が？」

あまりにも何でもないことのように、有間が告げただため、春菜は事の重大さを理解するのに時間がかかり、わずかな間の後にそう尋ねた。

「そう、私の叔母だ」

相変わらず有間は、ふんわりとした雰囲気のまま言いい、暗闇ながら、迷うことなくしつかりと足を運ぶ。

自分でここまで来たとは言え、現在の居場所すらおぼつかない春菜とは違い、有間にはしつかりと方向感覚があるようだった。

「何で？」

混乱を鎮めようと必死になりながら、疑問を整理する。

暗闇の中、避けきれなかった木々の枝が頬を掠めたが、気にもならなかった。

「春菜のことが、漏れてしまっ…」

言いくそうに、言葉を濁す有間に、春菜は反応に困って、前を行く有間の後ろ姿を見た。

「どうということ？」

意味がいまいち理解できずに、聞き返すと、沈黙が返ってきた。

後姿からは、何も読み取れずに、聞こえなかったのか、と訝しく思い春菜は首を傾げた。

「有間？」

返答を急かすように重ねて声をかけると、ようやく答えが返ってきた。

「いや、春菜が力を使える事が、大君の耳に入ってしまったんだ」
やはり有間は振り向かないままにそう答えた。

「それって、私どうなるの…？」

重大な事に巻き込まれようとしているらしい、とようやく気付いて、春菜は幾分恐ろしく感じながらもそう尋ねた。

「悪いようにはしないだろう。力を扱えると言うだけで、朝廷にとつては貴重だ。神としての威光を体現しているからね。ただ、裏を返せば驚異にもなる。言動には十分気をつけた方が良い」

ようやく、有間は振り返ると、安心させるように微笑みを浮かべた。「まあ、心配しなくても、大丈夫。私も出来る限り助けにはなりたい。ただ、おそらく叔母は、私と春菜をあまり近づけたくはないだろう。私たちが結託すれば、それこそ、朝廷の危機だ。春菜を籠絡しよう、と、叔母はやつきになるだろうね。とにかく、気を張っておくにこしたことはないよ」

「う、うん……」

「本当なら、巻き込みたくはなかったんだけどね……」

珍しく、本当に悲しそうな表情を浮かべた有間に驚いて、春菜は反射的に首を横に振った。

「いいよ、別に。いざとなれば、さっきみたいに逃げちゃえば平気でしょ？」

無理に笑ってみせると、有間もまた、どこか悲しげな笑みを見せた。

「ああ、それで良いよ」

「でも、どうして私の居場所わかったの？それに、何で、私が力が使えるって、漏れちゃったの？」

「それは、これがあつたからね」

言いながら、有間は抱えていた鏡を春菜に見せた。

「それ、何？そういえば、ずっと抱えてたよね」

それどころではなかったために、今まで気に留めていなかったが、鏡を有間が持ち歩いているのかと春菜は首を傾げた。

丸い円形のそれは、いつも春菜が見る鏡ほどには澄んでいなかった。暗がりのため、はつきりとは分らないが、表面は幾分くすんだような色をしていた。

分厚いそれは、人の胸ほどの大きさだろうか。

両手で抱えるほどの大きさはある。

前から見た分には、何の装飾も施されていないように見えるが、おそらく裏には手の込んだ装飾が施されているのだろう。

重さもいくらかあるようだった。

「鏡？」

首を傾げて覗き込む。

何の変哲もないそれを見て、有間を見上げる。

「そう。八咫鏡だ^{やたのがみ}」

「八咫鏡？」

聞きなれない単語だった。

「八咫鏡も知らないのかい？」

驚きを含んだ調子で言われるも、全く心当たりはなく、素直に頷いた。

「八咫鏡は、皇族に伝わる三種の神器の一つだ。三種の神器は知ってるかい？」

「刀とかのだね？名前だけなら……」

春菜は、テレビやら冷蔵庫やらの新三種の神器の印象ばかり強く、本来の三種の神器を全く知らないことに思い当たり、愕然とする思いだった。

「三種の神器は、八咫鏡^{みくさ かむたから}、八咫瓊勾玉^{やさかにのまがたま}、天叢雲剣^{あめのむらくものつるぎ}からなる。これは、その一つ、八咫鏡」

「でも、それでどうやって探したの？」

「神器^{かむたから}と言う程だ。まさかただの鏡と言う訳もない。昔はこの鏡を通して、玉依姫^{たまよりひめ}が、八百万の神と鏡を通してやり取りをしていたと言う。だからなのか、この鏡は、力を扱う者が現れると、光を放つんだ」

有間の言葉に驚いて、改めて鏡を見る。

しかし、今は何の変わりもないただの鏡で、自ら光ることはなかった。

「今は光らないさ。力を扱う者が生まれた時にのみ、一昼夜光を放

ち続けると言うからね。本来なら、赤子が生まれた時に光るのだが、春菜の場合、聞いた日にちによると、こちらにきた時に光を放ったようだね。だから、私もそれは見た事がない」

「へー……」

しげしげと眺めてみても、やはりただの鏡のようなそれに、春菜はそつと手を伸ばした。

思いの他ほんのりと暖かみを帯びたそれに驚いたが、嫌な感じはしなかった。

「そして、これが八尺瓊勾玉だ」
やさかにのまがたま

言いながら有間は、おもむろに懷に手を入ると、首に下げていた勾玉の連なつた飾りを外した。

「八尺瓊勾玉には、力を込めて使っていたらしいが、古いことだから、詳しくは伝わっていない。どちらにしろ、これらには力を扱う

ことの出来る者が現れた時に果たす、重要な役割がある」

言いながら、有間は八咫鏡の前に八尺瓊勾玉をかざした。
やたのかがみ

十個の半透明の不思議な光沢を持った白い勾玉が連なつたそれが、鏡の前に垂らされた瞬間、不意に勾玉が明るい光を発した。

ぼんやりと、半透明な勾玉の内側から柔らかな朱色あけいろの光を発する。

「綺麗……」

思わず呟くと、光を発していた勾玉がふわりと浮き上がった。

かと思うと、先を何かに引つ張られているかのようにして、春菜の方を指し示した。

「こうやって、力を使える者を探索出来る。古くは生まれ変わった

赤子の玉依姫を探すために使われていたらしい。最近では、全く使

われていなかったが、こうやって、春菜の居場所まで、鏡と御統が

案内してくれた」
みすまる

「御統？」

「ああ、八尺瓊勾玉は別称が多くてね。八尺瓊之五百箇御統とも言

うんだ。御統は首飾りと言う意味だね」
みすまる

言いながら、有間は不意に春菜を振り返った。

真つ暗な森には、明かりは全く見えない。
有間の顔すらしっかりと判別できない。

そのせいで、表情までしっかりと見てとることはできなかった。

「春菜：すまない」

ともすれば、下草を掻き分けていく音に紛れてしまふような声音だった。

「有間？」

聞き間違いかと思いながら、有間の表情を見るが、有間はどこか悲しそうな表情で春菜を見ていた。

「何を謝ってるの？さっきの事？」

「…それも、これから。私は、春菜に会うべきではなかったかもしれない」

少しの沈黙の後にそうとだけ言うと、有間は春菜から視線を外した。前を向いて歩く有間の背中へは、まるで春菜を拒絶しているようで、話しかけることが出来なかった。

有間は、春菜が闇雲に降り立った山の中の位置をほぼ正確に把握していたようだった。

村に程近い森の中に繋がれていた馬は、村人に見つかることもなく、静かに主人の帰りを待っていた。

「退魔師に見つからなくて良かったね」

馬上に先に上がった有間に手を差し出され、春菜はそのまま馬の上に引つ張り上げられた。

「ああ。あのような逃げ方をすれば、近くに馬がいるとは思わないだろう。そもそも退魔師はあまり私を追わない。ほとんどの者が出会わないようにしているようだからね」

有間の前に収まり、視線が少し高くなる。

ゆっくりと急ぐでもなく、有間は穏やかな速度で馬を走らせた。

「このまま都に向かうよ。急ぐ必要は特にない。ゆっくり向かう。」

山を越えるが、ゆっくり行っただとしても、四日もあれば……」

言いかけて、不意に有間は口をつぐんだ。

怪訝に思い、見上げると、何か思い悩むかのように前を見る瞳に行き当たった。

その瞳が、春菜を見下ろし、どこか不安を抱えたように不安定に揺らぐ。

「春菜、もし、もしも春菜が望むのなら、私は……」

最後まで言わずに、有間はまた春菜から視線を逸らし、前を見据えた。

きつく唇を噛み締めるのが目に入り、有間が何かを逡巡しているのだろう事が窺える。

有間が何を言いたいのかがうまく読み取れず、春菜は首を傾げた。不意に、有間が笑い声を漏らした。

いつもの柔らかい微笑みではなく、自嘲の響きを含んだ乾いた笑い声だった。

「有間？」

先ほどから様子のおかしい有間に、春菜は控え目に声を掛けた。

「どうしたの？」

有間は、春菜の問いかけに、すぐには答えなかった。

規則的な馬の蹄の音と、腰から伝わってくる振動に身を任せながら、春菜は黙って返答を待った。

初めは恐ろしかった馬の背が、今では規則的な揺れも、蹄の音も時には心地よいと感じるまでになっていた。

衝撃をうまく受け流す方法もいつの間にか分かるようになってきていた。

久し振りの感覚には懐かしさすらある。

「すまない」

ぽつりと絞り出された言葉は、また謝罪の言葉だった。

それに少しばかり苛立ちを感じ、春菜は口を開いた。

「……ねえ、さっきからどうして謝るの？理由も言わずに謝ってばか

りいるの、卑怯だと思う」

言葉を選ぼうと、考えたはずだったが、いつの間にか少し厳しい調子を含んだ声になっていた。

「さっきだって、私には、有間は何にも話してくれない。何を謝ってるの？ 私に対して何かやましいことでもあるの？」

「…卑怯、か。その通りだ」

自嘲の色をそのままに、不意に有間が口を開いた。

「本当は、私は春菜を都に連れて行くべきではないと思っている。それにも関わらず、私は春菜を迎えに来た。こうして、連れて行くこうとしている。叔母に春菜を会わせるべきではないと、分かっているのに」

「でも、それは…」

有間のせいじゃない、と言いさした春菜を遮り、有間は続けた。

「そう。叔母の命だ。けれど、私が神器を持っていれば、そのまま叔母に背けば春菜はおそらくもう叔母に見つけることはなかっただろう。今とて、このまま都に向わなければ、それですむ事だ。それなのに、春菜にとって、良い事はないと分かっているのに、私は都に向かおうとしている。このまま、都に向かわず逃げての良い、と春菜に言う事すらできずに。卑怯であることも、憶病であることも否定のしようがない」

一つ、大きく息を吐くと、有間はまだ一度春菜に視線を合わせた。

「春菜、私は都に向かうべきではないと思う。春菜はどうしたい？」

「どうして、大君に会うべきではないの？」

先ほどの話では、有間はおそらく身の危険はないと言っていたはずだった。

そもそも、王制とは程遠い民主制度の中で育った春菜にはうまく現実味を持つて考えることが出来ないでいた。

「春菜は、必ず勢力争いの駒にされるだろう。力を持つことは、敵も作る。朝廷は人の皮を被った魍魎ワウリョウの巣窟だ」

これから先の事を予見しているかのように、有間は確信を持った様

子で言う。

「…もし、都に行かなかつたらどうなるの？」

「朝廷かた追われるだろうね。ただ、神器はこちらにある。蝦夷えぞの地にも逃げ込めば、見つかることはないだろう」

有間の言葉に春菜は考え込んだ。

逃げることは、もう帰れないことと同義のように思えた。

なぜそう思ったのかは分からないが、逃げると言うことは、この世界で生きる決心を固めたということになる気がしていた。

それが、春菜に有間の言葉に頷くのを戸惑わせていた。

第一、有間にそれほどの負担をかけることが、春菜には心苦しかった。

朝廷で有間の立場が危ういことは聞いていた。

それでも、有間は今まで朝廷から逃げようとはしなかった。

それはつまり、留まり続けるそれだけの理由があったということなのだろう。

それを今、春菜が理由で朝廷に背を向けさせることが正しいことなのか、春菜には分からなかった。

「…分からないよ。私、この世界の事も、朝廷の事も分らないんだもん。有間が朝廷に居続けた理由も、今朝廷に背を向ける理由も。でも、もし今朝廷に行かないで逃げたら、私もう家に帰れない気がする。だから、都に行きたい」

分からないなりに考えて出した答えに、有間は小さく頷いた。

「なら、都に行こう。出来る限りは助けられるように、私も気をつけてはいるが、気は抜かないようにした方が良い。都に着くまで、まだ時間もある。出来る限り今の朝廷の勢力関係などは話しておこう。頭に入れておいた方が良いだろう」

それに、春菜は黙って頷いた。

29、三種の神器（後書き）

あまりに漢字が多すぎて、もう駄目です。

30 少女（前書き）

本当に、更新途切れ途切れですみません…

30・少女

春菜が目を覚ましたのは、もうすぐ昼になろうかという頃の事であった。

焚き火のすぐ傍に座っていた有間は、春菜が起きたことに気づくと、焚き火にくべた薪を剣の先でかき回した。

「おはよう。疲れは取れたかい？」

「有間：腰が痛い…」

起き上がろうとした途端、腰に走った痛み顔に顔を顰めると、どうにか春菜は地面に座り込んだ。

「それはそうだろうね。昨夜はさすがに疲れたろう」

「何で有間はそんなに平気そうなの…」

涼しい顔で言う有間を恨めしげに見ながら言う。

二人が村から出て馬を走らせるのをやめたのは、明け方の事だった。深夜から馬の背に乗り続けた春菜は、慣れない馬での移動によって、腰を痛めていた。

「馬に乗るにはコツがいるからね。いきなり長時間乗れば、当然痛みもするだろう。今日はあまり進まないことにしよう」

それに少しばかりほっとして、春菜は顔をしかめながら焚き火の傍へとにじり寄った。

真冬の朝の寒さの中での野宿はさすがに堪えた。

夜中に有間が少しでも体を休められそうな場所を探してくれたが、それでも氷が張る程の寒さだ。

とても完全に寒さを凌ぐことは出来なかった。

春菜が寝る時と同じ場所に同じ姿勢で座る有間に、ふと春菜は首を傾げた。

「有間、ちゃんと寝た…？」

それに有間はわずかに驚いたような表情で春菜を見た。

「…いや、私は大丈夫だよ。寝ないのには慣れている」

何でもないと言う表情で言いながら、有間は焚き火を刀でかき回す。それに、ふと寒くないようにと火を起こし続けてくれていたのだろうかと思ひ申し訳ない気持ちになる。

「悪いが、食べ物を持ち合わせはあまりなくてね、これを食べたら立つて、一つ目の村かどこかですぐに休もう」

言葉と共に有間はどこから取り出したのか餅を火で炙り始めた。

それを横目で見ながら、急に空腹を覚えて、春菜はこくりと頷いた。

人々は、あまり移動しないものらしい。

そう有間に聞いて、春菜は村人たちが奇妙な視線を向けてくることに納得した。

村を離れて旅をすると言うことは、それだけで死を覚悟しなければならぬものだと言う。

何より、田畑を見守らなければならないため、人手のいる彼らには、住み慣れた村を離れるということが、まず無理なのだと言う。

例外は、退魔師と、貴族や数少ない各地の特産物などを携えた行商の者のみ。

農民は、ただ時々近場の大きな町で立つ市に行くか、税を収めに都に行くか、以外で村を離れることはない。

つまり、ふらりとやってきた春菜と有間のような見知らぬ人間というものは、酷く奇妙に人々の目には映るのだという。

昼過ぎに見かけた村から少し離れた、見捨てられたような小さな小屋を見つけ、二人はそこで体を休めた。

久しく誰も住むことがなかったのか、荒れた様子を見せ始める小さな家は、寒さを凌ぐには十分だった。

「ねえ、有間」

小さく声を掛けると、視線だけを春菜に向けて有間が先を促すようにうなずいた。

「有間は、前に時彦と前に会ったことがあったの？」

唐突に尋ねた春菜に、有間はわずかに不思議そうな表情を作ったが、すぐにいつもの曖昧な笑みを浮かべた。

「ああ、少しね。あまり生きている退魔師に知り合いはいないから、珍しいかもしれない」

わずかに沈黙を落として、すぐに有間は言葉を続けた。

「幼い頃、私が初めて都から一人で出た時にたまたま出会ってね。

当時は知りもしなかったが、奇妙な縁えにしもあつたものだ。今は別たれているが、元は一つの家系。その無用の末裔同士。後で知った時には、奇妙なものだ、と思ったが……」

そこで不意に口を噤むと、有間は春菜から視線を逸らした。

続く言葉を待っていると、もう話す気をなくしたのだろうか、と思い始めた頃に、有間はぼつりと独り言のようにつぶやいた。

「けれど、知らぬままなら、どれ程良かったか」

危うげな響きを孕んだ声に、はつとして、有間の表情を窺ったが、有間はいつものようにどこか儚げな笑みでどこか遠くを眺めるような瞳で空を見ていた。

「……さて、私は少し村の様子を見て来る。出発は明日にしよう」
言いながら立ち上がると、有間は暗くなる前には戻る、と言い残して小屋を出て行った。

一人になった小屋の中で、春菜は小さく息を吐いた。

なんとなく、悲しい気分になってしまったのを振り払おうと、ゆるく頭を振った。

それとほぼ同時か、それよりもわずかに早く、暖かな風に撫でられたような感覚が頬に走った。

隙間風にしては暖かく、不思議に思っ顔を上げた。

その視線の先、鼻が触れそうなほど近くに、真っ黒な瞳が浮いていた。

あまりの驚きに、声を上げることすらできずにいると、瞳がわずかに距離を取った。

それで、ようやく瞳の持ち主が、幼い少女であることが分かった。

痛いほど強く脈を打つ心臓を沈めようと勤める春菜を見て、少女は小首を傾げた。

どうして、そんなに驚いているの？とでも言いたげな仕草だった。

「あなた、だあれ？どうやって入ってきたの？」

出来る限り平静を装って声をかけるが、少女は座り込む春菜の顔を覗き込み、もう一度首を傾げるのみで、返答をしない。

「この村の子？」

重ねて問うと、ようやく少女はふるふると頭かぶりを振った。

同時に、少女の柔らかなそうな黒髪がさらさらと揺れる。

「どうやって入って来たの？」

その問いには答えずに、少女はただ春菜の目を覗き込んできた。

「…お姫様？」

「へ？」

唐突に少女が、まったく予想をしていなかった単語を発したため、思わず素っ頓狂な声を上げた春菜に、少女は重ねて問いかけた。

「姫様でしょ？」

先ほどより、はっきりと聞こえたそれに、聞き間違いではなかったことを確認して、春菜は思わず自身に視線を下ろした。

身に着けているものは退魔師の村で着ていた、ごく普通の着物で、みすばらしくはないが、おおよそ綺麗であるとか、豪華であるとか、お姫様という単語から連想されるようなものは身に着けていない。

返す言葉が出てこずに、あっけに取られたまま黙っていると、少女は何やら一人納得したらしく、丸い目を更に大きく見開いて春菜を見る。

好奇心旺盛そうな真つ黒な瞳に、期待のようなものを滲ませ、少女は嬉しそくに笑った。

「ね、言ったでしょー。やっぱり姫様だよー」

春菜に掛けられた言葉なのかと思ったが、どうも違うらしかった。不意に春菜の横に視線を向けた少女に釣られて右を向く。

いつの間に隣にいたのか、突然現れた二人目の少女に驚いて声を上

げそうになったのをどうにかこらえる。

全く同じ顔をした少女だった。

双子でも、こうも似るのか、というほどにそっくりな顔をした少女達を見比べる。

これほど至近距離で見ても、全く見分けがつかない。

「えー、そんな事こなた言ってなかったよー」

「言ったよー」

全く同じ声でなされる会話に、不意に春菜は既視間を覚えた。

長く語尾を伸ばして歌うような会話。

幼いそっくりな声をした少女たちの会話。

のんびりとした会話のやり取り。

どこかで、聞いたような気がして春菜は少女たちを眺めていたが、何気なくやった視線の先に氷ついた。

「ねえ、あなた達、誰？」

そろりと立ち上がりながら尋ねると、少女達は同時に春菜の方に顔を向けた。

「かなたー」

「こなたー」

交互に告げられたそれが、名前だと理解するのに、わずかに時間を要した。

「私達、一度会ってる？」

尋ねると、少女達は同時に顔を見合わせた。

そして、全く同時にこくりと頷いた。

「…あなた達は、人じゃないの？」

宙に浮いた少女達の足元を見つめながら、ゆっくりと問いを発すると、彼女達は、それにもまたこくりと頷いた。

30 少女（後書き）

女の子達、かなたとこなたって名乗らせました。

ずーっと前から、名前どうしようかなあ、と考えてました。

で、結局、彼方此方から、「かなた」と「こなた」にしようと決めました。

今日、ふと検索かけたら、らきすた？ですか？におんなじ名前の双子ですか？そんなキャラがいることが判明。

名前変えようかと思ったのですが、もう思いつきませんでした。

だって、そんなのを理由にただでさえ遅れてる更新をさらに遅らせる気にはなれなかったんです。

すいません。

31・御使い

その場から逃げる気にならなかったのは、少女達からは危険な雰囲気は全く感じられなかったからだ。

だが、それに完全に安心することも出来ず、すぐに逃げ出せるようにと立ち上がったまま春菜は少女達を見下ろした。

視線の高さを合わせようと思ったのか、少女達は、ふわりと浮き上がる。

あまりに自然な動きに、違和感すら感じさせずに少女達はくるくると春菜の周りに浮かぶ。

「人間じゃなかったら、何？」

身も蓋もない尋ね方だったが、他に言葉が思いつかず、浮かんだままに疑問を口にした。

少女はふわふわと楽しげに浮かびながら、同時に首を傾げた。

「あなたはなあに？」

「わかんない。こなたはなあに？」

「わかんない」

言い合つて、もう一度首を傾げると、二人同時に春菜を見た。

「あなたとこなたはねー」

「主様にお仕えしているのー」
めしさま

二人で言いあつて、何が楽しいのか高い笑い声を響かせる。

「主様？主様つて誰？」

「主様は主様」

「とーっても偉いの」

「とーっても怖いの」

くすくすと笑い合う二人の返答は要領を得ない。

見た目通り物言いもどこか幼い。

「主様がねー、仰つたの」

「姫様のお傍にいなさい、つて」

二人で一つの言葉を器用に言い繋いで少女達は、春菜の周りをくくりと一周した。

「ねえ、姫様って人違いじゃない？」

どう考えても、春菜には彼女達にも、彼女達の言うところの主様にも面識はない。

もちろん、姫様などと呼ばれる心当たりもない。

「うっん。姫様は姫様だよー」

「間違えないもん。絶対分かるもん」

口々に言われ、納得は出来ずとも、幼い二人に言ったところで埒があくはずもない、と半ば諦めの溜息をつき、春菜はどうしたものかと考えを巡らせた。

「主様からの伝言ですー」

不意に、思い出したように少女の片方が声を上げた。

途端に二人して真面目な表情になり、ぴたりと動きを止めた。

今までの幼さがなくなり、見た目は同じく五歳か六歳ほどの少女のまままだと言うのに纏う雰囲気までもが変わったようだった。

やますえのおおぬしのかみ
「山末之大主神より、あまつひめぎみ天津姫君へ申し上げます」

「これなる二人は風神ふうじんの末席に連なるもの。微力ながら、力添えにはなることと思う。我もまた、変革を願う」

気高さすら感じる、どこか冷たい表情で、二人はつい先ほどまでの口調とはかけ離れた内容を紡いでいく。

神懸かりというのは、このようなことを言うのだろうか。

二人の話しでは神懸かりどころか、彼女たちは神そのものらしいが、春菜はそのようなことを考えていた。

真っ黒な長い髪に、黒い瞳。

それが更に彼女たちの真白な肌を際立てる。

その白い肌が、氷のような冷たさを連想させるのかもしれない。

揺らがない凜とした静けさに包まれた彼女達は、その見た目の幼さに似つかわしくない美しさがあった。

「だからねー」

歌うような独特の声にはつとすると、少女達はいつのまにか、幼さを取り戻していた。

「かなたとこなたは、姫様のお傍にいるのー」

にこにこと、無邪気な笑顔を浮かべて彼女達は言う。

おそらく、春菜が何を言った所でその事実が変わりはしないのだろう。

「二人は、その姫様のお傍で何をするの？」

「姫様の望むことをするの！」

二人同時に言い切った言葉には、微塵の迷いも感じられなかった。

それが、幼い子供特有の、これと信じた者、例えば親のような全幅の信頼を寄せる者に言われたことに、疑いを挟むことができないためなのか、それとも使命感故なのかは分らないが、彼女達には彼女達なりに貫くべき信念があるようだった。

「だから、かなたとこなたは、姫様のお傍にいるの！」

「こなたとかなたは風だからどこにでも行けるよー」

「彼方から此方まで、どこにでも二人で行ってたの！だから主様にかなたとこなた、って名前を頂いたのー」

「ちゃんと何でも出来るよー」

「どんなに遠いところですぐ行けるのー」

口々に出来ることを言いながら、にこにこと二人は春菜を見上げる。すごいでしょ、とても言いたげに目をくるくると動かす。

「姫様は何をして欲しい？」

純粹に、役に立ちたいという気持ちが伝わってくる。

「ありがとう、でも私は姫様なんかじゃないわ。きっと主様、間違えてしまったんだと思うよ」

ゆっくりと言い含めるように告げると、きょとんと瞳を丸く見開いて、二人は同じ表情で春菜を見る。

「だからね、一度主様のところに戻った方が良いと思うよ？」

言い終わるか終わらないうちに、二人はふるふると頭を振った。
かぶり

「主様間違えないよー」

「それに、かなたとこなたも分かるもん」

全く春菜の言うことを聞き入れようとしない二人に、春菜は困ってどう言おうかと考えながら、ゆっくりと言葉を続けた。

「あのね、でも私、二人に会ったのは山で一回だけでしょ？それに、主様ともお会いしたことなんてないの。だから、きっと人違いだと思っただけ……」

会ったこともないどころか、まだ春菜が生まれてすらいない時代の住人に知り合いなどいるはずもなく、ましてや伝言を託される覚えなど全くない。

この春菜には判り切った事実をどう伝えれば、彼女達は受け入れてくれるのだろうか、と考え考え、ゆっくりと伝えるが、二人は意に介した風もなく、笑い声を上げた。

「そうよ。主様は、姫様にはお会いしたことないもの」

「かなたとこなたもなかったもの」

「会ったこと、ないの？」

二人の発言に驚いて問い返せば、二人は当然とばかりに同時にこくりと頷いた。

「でも、それじゃ姫様なんて知らないし、分らないんじゃないの……？」

「分かるのー」

春菜の中では、説明するまでもない理論が二人には全く通じないらしく、二人同時に迷いなく断言された。

「どうして……？」

それ以外にどう言えば良いのか分からず、そう尋ねた。

すると、二人は顔を見合わせてから、唐突に表情を消して春菜を見上げた。

「それは、人為らざるモノだから」

言葉を失って二人を見つめると、不意に笑顔が向けられた。

「だから、貴方は姫様！」

「だから、かなたとこなたは、ここに居るの！」

それ以上、反論のしようもなく、春菜は諦めて小さく頷いた。歓声を上げて喜ぶ二人は、ただの幼い少女にしか見えない。

これからどうしたものか、と喜ぶ彼女達を尻目に思案していると、がたりと戸外から物音が響いた。

直後、扉が開き食糧を手にした有間が戸口をくぐった。

「春菜、食べ物交換してもらってきた。まず、少し食べよう」

手にした藁で編まれた籠のような物を持ち上げながら、有間はそう口にした。

咄嗟に、かなた、こなたと名乗る二人の少女のことをどう説明したものか迷い、固まったまま有間を凝視する春菜に、訝しげに有間は首を傾げた。

「どうした？」

何か違和を感じて、返答に窮した春菜にさらに有間は不審げに目を瞬く。

思わず、春菜は横に立つ二人をまじまじと見た。

確かにまだいる。

有間は、春菜から視線を逸らそうとはしない。

「春菜？何かあったのか？」

困惑を滲ませた声色に、春菜まで混乱を覚え、二人の少女と有間を見比べた。

「え？」

思わず間の抜けた声が漏れたが、何かあったとしか思えない二人の幼い少女の出現をまるで無視したような態度に、何を言えばいいのか、言葉を見失ってしまったのだ。

「春菜？」

呆けたように虚空と有間を交互に見つける春菜に、さすがに心配になり、有間は春菜の肩を掴んだ。

「どうした？大丈夫かい？」

まるで二人の少女は目に入っていないような態度に、春菜の混乱はさらに増す。

「有間？え？…何で？え？」

系統立てて言葉を紡ぐこともままならずにいる春菜の耳を、少女達の鈴を転がすような声が打った。

「唯の人には、見えないの」

「だから、気付けない」

にこりと微笑んで言うと、少女達は有間の体に取りついた。

体重を感じさせない動きで、二人の幼い手が有間の腕に絡められるけれど、有間は全く気づく風もない。

良く見れば、少女達が触れた着物は、ほとんど形を変えることもない。

「ね？見えないでしょー」

くすくすと笑い合い少女たちは楽しげに有間の上でふわふわと飛ぶ。
「春菜！」

呆気にとられてその様子に目を奪われていると、思いの他すぐ近くで響いた声に驚いて有間に視線を戻した。

間近で見つめる心配気な表情に、慌てて、何、と返すと安堵と呆れをない交ぜにしたような声が返ってきた。

「体調が悪いのかい？ぼんやりとして…」

気遣わしげに眉を寄せる有間に、春菜は曖昧に微笑んだ。

「だい、じょうぶ…」

ふわふわと楽しげに揺れる少女達に半ば意識を取られながら、なんとかそう返す。

「見えるのはー」

「姫様だけー」

歌うように、笑い声を響かせながら、二人は言い合う。

姿どころか、声すら聞こえないのか、有間は全く間近で空を舞う少女たちに気づく素振りも見せない。

「私だけ…？」

思わず版数するように、口の中で呟く。

「そーなの」

「力を使える姫様だけ」

「人には見えない」

「力を使えない、ただの人には見えないの」

尚も歌うように独特の調子で、二人は言う。

それに疑問を覚えて、春菜は首を傾げた。

「最初は、見えなかった…」

思い浮かべたのは、最初に少女達と邂逅した場面だった。

山の中、有間の供に囲まれ、車の中での出来事だった。

姿は見えずとも、声だけが響きそれに怯えたことを覚えている。

「でも声は届いたもん」

「それに、姫様はまだ目を覚ましてなかったんだろうって」

「主様がおっしゃってたの」

意味を考えるが、上手く飲み込めない。

「でも、有間は、力を使える…」

「足りないの」

「足りないの」

二人でそう告げると、少女たちはまた笑い声を響かせる。

何が足りないのだろうか、と考える前に、強く肩を揺さぶられ目の前で険しい表情を浮かべる有間に意識が戻った。

「春菜、誰と話している」

険しい表情を崩さずに、有間は春菜に問う。

「誰って…」

どう答えたものか、と少女に視線をちらりとやって、春菜は返答に窮した。

これ程はつきりと自分に見える存在が、違う誰かには、その存在すら認識できないことが、酷く奇妙で困惑を誘う。

「女の子がいるの」

どう説明しても、真実味を持たせることは不可能に思われて、結局春菜はただそう述べた。

31・御使い（後書き）

なんとか、今月中に投稿できました。

次も近いうちに更新できる…かもしれない。
ようやく中盤に差し掛かろうかという頃です。
ええ、まだまだ序盤でした。

もうすぐ中盤。

そして終盤はまだはるかかなた…

今のところ、50話はくだりません。

100話いないに収まるように努力します。。。

32・都

「女の子？」

険しい表情のまま、そう繰り返す有間に気圧されて、春菜はこくりと頷いた。

「神様？みたい、多分」

春菜は言いながら、本当に彼女達は神様なのだろうか、とふざけ合う二人を見る。

今は全く神々しさのかけらもない。

空中に浮いていることを除けば、ごく普通の幼い少女達だ。

良く考えれば、春菜も空に浮いたことはある。

そう考えれば、普通の少女と言えなくもない。

白い肌に瓜二つの顔。

黒い髪を肩の下あたりまで伸ばし、さらさらと指通りの良さそうな髪を揺らして笑う二人はまるで、この世の不幸などまるで知らないかのように愛らしい。

おかつぱ、というには長いが、まっすぐに切りそろえられた髪形は良く彼女たちに似合っている。

そんなことを思いながらじゃれあう二人を目の端にとらえていたが、神という単語に、有間の瞳が幽かに揺れた。

奥に覗いた感情を読み取る前に、有間は春菜から目を逸らした。

「なぜ、そんなに自信なさに言う？神と名乗ったのではないのかい？」

表情から険しさを消し、そう尋ねた時には、もう有間の表情からはどのような感情も読み取れなかった。

「風神の末席に連なるもの、って言ってたんだけど…なんか、あまりに神様っていう言葉の印象と掛け離れた二人で…」

春菜の戸惑いを余所に、当の二人は有間から興味を失くしたのか、ふわふわと二人して何がおかしいのかニコニコと笑いあっている。

「なぜ、ここに来たのだろうか？何か言っていたかい？」

周囲を見渡しながら、言う有間に、春菜はこくりと頷いた。

「うん。なんだか、人違いみたいなんだけど……。主様、って二人は呼んでるんだけど、主様に言われて私のところに来たみたい……。誰か姫様を探してるらしいんだけど、その姫様を助けて、傍にいるよと言われてるみたい。人違い、って言っても信じてくれなくて。一緒に都に行っても良い？」

尋ねると、ふつと有間は笑みを浮かべた。

「良いも何も。私には存在すら認識出来ないのだ。どうしようもない」

それに、と言って有間はふつと周囲に視線を巡らせた。

「神が取る行動に私のような人が口を挟んでどうなるものでもないしね」

最もな意見に、春菜も押し黙った。

二人と二柱の行程は奇妙なものだった。

神と名乗った少女達は、積極的に春菜たちに関わろうという気はないらしく、いつもふわふわと周囲を気まぐれに遊び回っていた。

有間は連れの神がいることなど、すっかり忘れてしまったかのように今まで通りに振る舞い、春菜は視界に入る彼女達に時々意識を奪われる、といった何とも奇妙な関係の旅の供だった。

最初の夕餉の際に、かなたとこなたは何か食べるのだろうかと思い、問いかけると、いらないけど食べられる、との返答が返ってきた。食べたいかどうか尋ねると、二人は顔を見合わせるようにして、少し考え、それからちよつとだけいる、と言う。

なくても死にはしないが、やはり食べることは好きなのだという。かなたとこなたは、何やら春菜に良く懐いた。

こんなに好かれる理由も良く分からないながら、だんだんと春菜は二人が可愛らしいように思えてきて、彼女たちが神だということも気にならなくなってきていた。

何しろ、彼女たちの見た目は幼い。

言動までも幼い少女たちのようで、愛らしく見える。

どうしても人とは別の次元の違う生き物だとは思えなかったのだ。

「ねえ、有間、都はもうそろそろ近い？」

「あ、ああ。もう数日後には着くと思うよ」

夜、夕餉も食べ一息ついた頃にそう尋ねると、有間は神妙な面持ちでそう答えた。

いまだに有間は、春菜を都に連れて行くことについて思う所があるらしく、時折考え込んでいるような表情を見かけた。

「都ー？」

「姫様、都に行くのー？」

珍しくかなたとこなたが、そう問いかけてきて、春菜は、うん、と頷いて見せた。

「なんでー？」

「どうしてー？」

「なんかね、大君様が、会いたいんだって」

不思議そうな表情の二人にそう言うと、二人は揃って顔を見合わせた。

「おおきみ様？」

「うーん。人間の中で一番偉い人」

天皇の定義について、良く分からず春菜は少し考えてからそう答えた。

正確には神様なのかもしれないが、偉い人であることには変わりないだろう。

「ふーん」

「ふーん」

分かったのか、分かっているのか、不思議そうな表情のまま二人

は春菜から離れて行ってしまった。

「彼女たちかい？」

頷いてそれを肯定すると、有間は周囲を見回した。

「もう、どこかに行っちゃったよ。なんだか不思議そうな顔してたけど」

「そうか…」

思い詰めたような表情のまま、有間は黙り込んでしまった。

「どうかしたの？」

そう尋ねても、何でもない、と言うばかりで、有間はそれ以上何も話そうとはしなかった。

最近、有間はこのように考え込んでしまうことが多い。

都も近いと言うし、有間も考えることが多いのだろうか、と無理矢理に自分を納得させて、春菜もそれ以上詮索しようとはしなかった。

有間の言の通り、二日後には、もう都は目の前と言う位置にまで春菜は来ていた。

山に守られるようにして在る都は、酷く懐かしい光景のようで、春菜は無言でその光景を見降ろしていた。

京の姿は、平城京など、春菜の考える碁盤の目のような様子ではなく、寺院や住居のようなものが緩く集まって都の姿を表していた。春菜の感覚からすると、村と言う印象を受ける。

しかし、これまでに目にしてきた集落と比べると、規模も大きく建物の作りもしっかりとしていることは、遠目ながらしっかりと見て取れた。

「もう、この山を下りたらすぐに都だ。昼過ぎには、宮に着くだろう」

馬を操りながら、有間はそう言うと、並足で進み出した。

「大君にはいつ会うの？」

「早ければ今日の夜にでも。大君もお待ちかねのようだったから、

慌ただしくなるかもしれないが、到着したら、お召しがかかるまでは待機になるね。着物も揃えさせないといけないしね」

着物、と言言葉に以前有間と共にいた時に身に着けていた豪華な衣装を思い出した。

春菜としては、動きやすい今の着物の方が好きなのだが、仮にも一国の主に会うことになるのだから、このような格好のままと言う訳にもいかないだろう。

そこまで考えて、春菜ははたと思い当たって、有間を見上げた。

「有間、どうしよう。私礼儀作法とか、全然分らない…」

数か月を過ごして大分事情は分かるようになったものの、基本的に春菜はこの時代のことに疎い。

大君に会う際の礼儀作法など分かるはずもない。

「大丈夫。ちよつとやそつとの粗相くらいでは、大君も怒りはしないだろう。何しろ力を扱える者だからね。でも、身のこなしとか、最低限の謁見の作法などはちゃんと教えるから、大丈夫。それに謁見の際には私も共に行くからね。心配することはないよ」

ふんわりと柔らかな笑みとともに、そう言われて春菜は小さく頷いた。

「でも、多分大君もそこらへんは配慮して、完全に私的な謁見になると思うから、そう気負うことはないよ」

励ますように付け足して、有間は少し考えるように口を噤んだ。

「春菜、一つだけ、言って置く。都は、策略が多い。誰も信じるべきではない、特に甘い言葉を紡ぐ輩は信が置けない。危ないと思つたら、限界だと思つたなら、その時は何も気にすることはない。私に何も言わなくても良い。迷わず逃げろ」

いつもよりも、強い口調で、強い色を浮かべた瞳で有間はそう告げた。

それに、コクリと春菜は頷く。

きつと、有間は頷かなければ納得しなかった。

もし、逃げたなら有間の立場はどうなるのだらうと思ったが、きつ

と聞いても有間は答えてくれないことも分かっていた。それに有間は満足そうに、そして少し悲しげに微笑む。

「さあ、では行こうか。魑魅魍魎の住处へ」

有間の館は、宮にほど近い場所にあった。

宮は、遠目に見ても立派だった。

春菜の感覚では、宮と言うよりも寺院と言うような印象が強かったが、実際に天皇が住み場所んど見たこともなかったから、そう感じてしまうのも仕方のないことかもしれない。

普通の村の家は、茅葺^{かやぶき}の屋根が多く、一間か二間ほどの小さな作りが多かったから、堀に囲まれた有間の屋敷も宮も、とにかく大きく見えた。

実際の建物以上に、庭と言うか、いくつかある建物の間の空間も広くゆとりがある。

渡り廊下のようなもので繋がれていて、いかにも貴族の屋敷と言う佇まいだ。

寝殿造り、と言う単語を思い出した、春菜は改めて周囲を見回した。それよりは、少し、というか大分質素な造りなように思えたが、それでも十分にこの時代からすると豪華なのだろう。

「春菜様っ！よくぞご無事で…」

背後から聞こえた、掠れた声に振り返ると、懐かしい顔が泣きそうにゆがんで春菜を見ていた。

「八菜女！」

思わず、春菜は大きな声を上げて小走りに近づいて来た彼女を迎えた。

「ああ、本当にあの後、私はどれほど心配したか…」

涙を浮かべて言う八菜女に申し訳なくなつて、春菜は小さく謝った。

「ごめんなさい。連絡を取れば良かったのだけど…」

「いいえ、ご無事だっただけで、十分です」

にこりと笑って言うと、八菜女は滲んでいた涙を拭う。

「わたくしがまた、春菜様のお世話をするように仰せつかっていただきますので、よろしく願いますね」

優しい声音に思わず春菜も笑みが零れた。

「嬉しい。よろしくね」

有間も、時彦達も優しいが、やはり同年代の女の子が近くにいると言うのは、それだけで嬉しいものだった。

「では、早速お召し替えを」

促されて、春菜は八菜女の後について歩き出した。

今の楽な着物に慣れていたため、綺麗だが、少し窮屈なあの着物をまた着るのかと思うと、少しだけ憂鬱だった。

32・都（後書き）

本当にお久しぶりです。

ダメ作者です。

きっと、前に読んでくださった方がいらっしやるならば、もう内容忘れたよ！馬鹿野郎！ってくらいな放置ぶりでした…。

申し訳ないです。

飛鳥時代って、何気に資料少ないんですね。

建物とか、衣装とか、いや、衣装はそこそこあります。

ただ、衣装とか当時の宮の様子とか、貴族はどこに住んでいたのか、とか、役人はどこにいたのか、とか、いろいろ。

私の調べ方が下手なのかもしれませんが。

おかげで、後から「うわっ、これこの時代なかった！」とかたまにあります…。

その都度修正したりはしているのですが、どうも調べが足りていないみたいです。

それにしても、もっとぱっぱと早く書けると良いのですが。

ちゃんと簡潔させるように更新がんばります、ごめんなさい！

33、謁見

聞こえないようにこつそりをついたつもりだった溜息を聞き咎められて、春菜は苦笑いを浮かべた。

「どうかいたしましたか？」

不思議そうに尋ねる八菜女に、首を横に振って、春菜は居住まいを正した。

やはり、この着物は着慣れない。

綺麗だとは思うが、やはり動きにくい。

裳が足に纏わりつくようでどうにも歩きづらい。

考えようによつては、歩幅の制限される着物の方が動きにくいのだろうが、それでも春菜は袍ほうの下に履くまるでスカートのようなこれが苦手だった。帯もなく、上着のような袍は、長紐で結ばれているだけのため、その意味では楽だったのがせめてもの救いだ。

「失礼いたします」

几帳きちようの陰から、知らない女性の声が聞こえた。

「何か？」

対応したのは、八菜女で、春菜は黙ってそのやり取りを眺めていた。何やら、無闇に春菜は返事をしない方が良いらしかった。

一度、外から声をかけてきた采女に、八菜女よりも早く返事をしてしまったことがあった。

あの時は、八菜女からやんわりとはしたない、と諫められたのを覚えてる。

この部屋も、几帳という綺麗な色に染め上げられた布で出来た衝立みすや、御簾に囲まれていて、ろくに外の景色も見えなかった。

「春菜様、有間皇子がいらしているようです。今お通しいたしますね」

柔らかい微笑みを浮かべて八菜女は耳打ちするようにして、春菜に伝えた。

その微笑みにつられて、春菜も思わず笑みを浮かべてしまったが、その直後に八菜女が含みを持たせたような笑顔を浮かべたのを見てすぐに後悔した。

「よろしかったですね」

からかうようにして、でも嬉しそうにその声をかけてきた八菜女に春菜は、思わず動きを止めた。

何か、誤解されているような気がしたが、それを確かめる前に、御簾を上げて有間が入ってきた。

思わずうらめしく思っ有間を見ると、有間は不思議そうに首を傾げた。

「どうかしたかい？」

「…何でもない」

有間はさらに首を傾げたが、すぐに春菜の前に腰を下ろした。

「大君から呼び出しがあつた」

唐突な一言に、驚いて春菜は有間を見た。

「今日？」

「ああ。叔母君はどうしても、春菜に早く会いたくて仕方がないらしい」

吐き出すように言う有間は、春菜の知らない顔で。

返答に詰まる春菜の様子に気付いたのか、有間はふわりと微笑んだ。

「こらえ性のない叔母で、申し訳ないのだが、今夜遅くなってしまふが行かなければいけなくなった。八菜女、夕餉の後に春菜の準備を頼む」

「承知いたしました」

静かに八菜女が返すのを満足気に見て、有間は言葉を続けた。

「それと、少し春菜と二人きりで話したい。人払いを頼む」

それにも八菜女は静かに頭を下げると、優雅な身のこなしで立ち上がった。

それを見送ってから、有間は改めて春菜に向き直った。

「急で悪かったね。旅の疲れも取れていないと言うのに。ああ、所

作については、気にしなくても良いよ。大君には簡単には事情を説明している」

「え、でも、良いのかな。いや、ちゃんとしなきゃダメと言われても、礼儀作法なんて分からないんだけど…」

飯にも一国の主に会おうとするのだ、作法を気にするな、と言われてもどうしても気になる。

「大丈夫だ。春菜は気にする必要はないよ。ただ、大君が、春菜に会って何を話したいのかが、少し気になってしまっただけ」

「何を、話すか？」

「ああ。本当は、私も何のために叔母が春菜をここに呼び寄せたのかは知らないんだ。私は信用されていないからね。ある程度の想像はつくが…まあ、おおよそ当たっているだろうけどね」
皮肉めいた笑みを浮かべる。

それが、有間らしくないような気がして、気になった。

「前にも話したことはあるよね？力を使える者は朝廷にとって貴重だと」

それに春菜はこくりと頷く。

「だからこそ、立場も危うい。叔母は春菜が自身の権力の弊害になると思えば、おそらく亡き者にしようとするだろうし、使えると思えば、籠絡して良いように使える駒とする。そのようなものだろう」

「亡き者…」

「ああ。でも、春菜は別に権力を欲しがらる訳でもない。おそらく命の危険はないだろう。それに、ちよつとやさつとでは、私達のような人間は殺せない。いざとなれば逃げれば良い話だしね」

安心させるようにして、有間はそう続ける。

「特に今は、私が唯一朝廷で力を使える力を与えられた者だ。叔母達は余程私の存在が恐ろしいのだろう。私に対抗出来る春菜のような存在は喉から手が出るほど欲しいだろう」

そう言うと、有間は少しだけ言葉を区切った。

「今、朝廷は危ない状態にある」

唐突にそう切り出した有間の表情は真剣なもので、春菜は黙ってこくりと頷いた。

「良いかい。朝廷は退魔師と対立していると言ったね？退魔師の勢力の方が、朝廷よりも優勢だ。私がいなければね。力は使えずとも物の怪と戦う一族だ。朝廷の兵士ではなかなか太刀打ち出来るものでもない。それもあって、朝廷は表だって退魔師と戦おうとはしていない」

「退魔師の村も、平和そうだったしね…。大君への敵意はあったみたいだけど」

春菜は、村の様子を思い出しながら言う。

少なくとも、戦争をしているような、そのような殺伐とした雰囲気はなかった。

「ああ。朝廷で、対退魔師の目的で動いているのは、私だけだ。それは、戦力的な問題もあるが、私だけならば、もしもの時にも朝廷は私の個人的な行動だったと正当性を主要できるからだ」「そんな…」

言葉をなくす春菜に、有間は薄く笑みを浮かべた。

「前に話しただろう？大君は私を殺したいんだ。退魔師に殺されれば、儲け物だ。退魔師は、最近ではもう物の怪で手一杯だ。わざわざ朝廷に刃を向けるとは思えない。朝廷が何もしなければ、このままの状態が続くだろう。目下、叔母の最大の脅威は私だ。つまり、春菜は叔母にとっては脅威にもなり得るが、手懐ければこれ以上ない強力な武器になる、そう言う存在だ」

こくりと頷くと、有間は心配気な表情を向けてきた。

「そこだけは忘れないでいてくれ。叔母が何を言うかは分からないが、それだけは春菜に分かっていて欲しかった」

「うん、大丈夫。忘れない」

真剣に、今聞いたことを肝に銘じ、春菜はそう答えた。

「じゃあ、後で迎えに来る」

言って立ち上がると、有間は不意に振り返った。

「もし、私に何かがあつた時や、逃げようと思った時には退魔師の村に向かうと良い」

「え？退魔師の？」

「そして、彼を探すんだ」

「彼？時彦のこと？」

「違う。私が春菜を迎えに行つた時にいた、体格の良い退魔師だ」

「梓彦？私を庇おうとした人のことだね？」

確認すると、有間はそれに頷く。

「でも何で？」

時彦ならばともかく、まさか梓彦の名前が出てくるとは思わず、首を傾げる。

「何でも、だ。もしもの時に思い出してくればそれで良い」

それ以上何も言う気はないのか、そのまま部屋を出て行つてしまつた有間を見送つて、春菜は一人首を傾げた。

こつそりと溜め息を落として、春菜はそつと居住まいを正した。

大君との謁見のため、八菜女に支度をしてもらったものの、豪華なそれは、春菜を疲れさせるには十分だった。

綺麗だと思う。

思うが、やはり機能的でないそれはやたらと動き辛い。

十二単でないだけ、まだマシなのかもしれない、と自分を慰めて、

春菜は背筋を伸ばした。

春菜と有間が通されたのは、中庭に面した大きな部屋だった。

庭で焚かれている火に照らされて室内は明るい。

今回の謁見は私的なもののようで、庭には武器を携えた警護の者達がいいたが、それも大きな声で話さない限り聞こえないような距離にいるのみだった。

「その娘が春菜か？そのように畏まるでない」

澄んだ声に春菜は、有間に倣って下げていた頭をそつと上げた。

「有間、ご苦労であつたな」

「とんでもありません、叔母上」

「いつもそちには無理ばかりを押し付けて、我も心苦しい。しかし、常に期待に答えてくれるそなたはほんに頼もしい」

「恐縮でございます。そのようにお心をかけてくださるだけで、私には十分すぎることです」

大君は、良く通る声で有間を労うと、すぐに春菜に視線を向けた。

「どれ、良く顔を見せておくれ」

言つて、大君は、春菜のすぐ近くにまで来て腰を下ろした。

庭の炎に照らされる彼女は、美しい女性だった。

顔の端々に年齢による衰えは現れていたが、それでも彼女の美しさは健在している。

どこことなく、有間に似た整った面差しは、優しげではあつたが、抜け目のない、自信に溢れた眼差しには、こちらを伺うような視線があつた。

「美しい。肌も髪も。在りし日の玉依姫は、このようなお姿であつたかもしれない。そう思わんか？」

「そうかもしれませんね」

答えた有間は、柔らかい表情ではあつたが、目だけは真剣な色を浮かべていた。

「春菜とやら、簡単に有間から事情は聞いておる。難儀なことであつた。少し話しがしたいと思つておつたのじゃ。急に呼びつけでしまったが、二人で少し話をせんか？」

「二人で、ですか？」

ちらりと有間に視線を送つてから、春菜はそつと聞き返した。

「そうじゃ。何もとつて食おうと言う訳ではない、そう構えずとも良い」

優しげな笑みを湛えて言うと、大君はくるりと振り返つた。

「有間、良いな？少し二人にしてくれるか？」

大君の問い掛けに、有間の表情がわずかに強張ったが、それも一瞬のことだった。

「……承知いたしました。ではまた後ほど、春菜を迎えに参ります」
深々と礼を取って、有間は、安心させるように春菜に少しだけ困ったような微笑みを向けた。

34、試し

春菜のすぐ目の前に座って、大王は、おおきみにこりと微笑んだ。

「春菜、そちは力を使えるそうじゃな」

探るような視線を向けられてわずかにたじろいだが、春菜はそれを肯定した。

「どうじゃ、少し見せてくれぬか？」

「ここで、ですか？」

大王の真意が汲み取れず、戸惑って聞き返す。

「有間はなかなか見せてはくれぬ。実は、力を扱っている様子を見たことはほとんどないのじゃ」

完全な興味本位からの頼みなのか、それとも違う狙いがあるのかは分からなかったが、無下に断ることも出来ずに、春菜はこくりと頷いた。

何をしようか、と少し逡巡した後、そつと掌を上に向けた。

「おおっ……」

突然、小さく炎が上がったのに驚いたのか、大王はわずかに身を引いたが、すぐに興味深げに春菜の手の少し上で燃える小さな炎をしげしげと見つめた。

「なんと、素晴らしいものじゃのう……」

ほう、と溜息を洩らす大王は、何とも言えない表情を浮かべていた。「無理を言つて悪かった。なんとも、素晴らしき力じゃ。それなのに、今の朝廷ではもうその流れも途絶えようとしている」

悲しげに頭を振ると、大王は春菜の顔を覗き込んだ。

「今、朝廷でその力を授かった者は、有間一人じゃ。我も、我の子らも、誰一人として力を授かることは叶わなかったのじゃ。長い時を経て、血は薄まってきておる。今では、玉依姫の血を引くとは言っても、何も特別な力のない者ばかりじゃ。嘆かわしいことじゃ」
そう言つて、大王は言葉を切った。

「そなたは、後の世から来たと有間から聞いておる。どのような経緯で今そなたがここに居るのかは分からぬが、我らの血が、しっかりと受け継がれていることは、嬉しく思うぞ。薄まって消えてしまふ運命かと思うておった力じゃ。何と喜ばしいことか」

喜色を浮かべる大王に、戸惑いながら春菜は黙って耳を傾けた。

どうしても、有間の話から想像していた大王と、目の前の大王が重ならない。

拭えない違和感に不安を覚えながら、それでもどうすることも出来ずに、饒舌な大王を見つめた。

「……なぜ、私を都に呼んだのですか？」

そつと尋ねると、大王は目を細めて春菜を見やった。

口の端を持ち上げて、笑みの形を作ると、大王は春菜の表情を覗くようにして、ゆっくりと口を開いた。

「……なぜだと思う？」

質問に質問で返されて、春菜は言葉に詰まった。

いろいろと、有間から聞いてもいた。

思い当たることもあった。

けれど、そのどれも口にしてはいけなような気がして、口にすべき言葉を見失ってしまったのだ。

「どうじゃ？遠慮はいらぬ。正直に申せ」

どう答えたものか、と思索していると、こちらを見る大王の目に試すような色を認めて、春菜は覚悟を決めてゆっくりと息を吸った。

「では、恐れながら申し上げます。大王は、力を扱える駒が欲しかったのではないのでしょうか？」

すつと、大王の顔から表情が消えるのを見ながら、春菜は笑みを浮かべた。

「私は、この世界に来てから、様々な場所で、様々な物を見てきました。退魔師と行動を共にしたこともあります」

そこで、ゆっくりと息をつく。

正直に思っていることを言って、大王がどう出るか、春菜には予想

もつかなかったが、それでも言うべきだと思った。

大王の本音を引き出すには、優しい仮面を取り払わなければならない。

このまま、本音も分からないままに今日の面会を終えれば、そこで大王との関係が決まってしまうように感じていた。

今、大王は自分を見極めようとしている。

大王の目に浮かぶ色を見て春菜はそう悟っていた。

大丈夫、と言い聞かせもう一度口を開く。

「今、朝廷で力を使えるのは、有間皇子一人のみと聞きおよびいます。大王はその力を授からなかったと、先ほども仰っていましたね。それは、大王にとって大きな脅威なのではないでしょうか？もちろん、有間皇子が朝廷に反旗を翻すような方だとは毛頭思っておりません。けれど、可能性を考えた時には、大きな脅威であることには違いありませんよね？」

じつと春菜を見つめたまま大王は反応を返さなかったが、春菜は笑みを浮かべたまま言葉を続けた。

「せめてもう一人、例えば私が居れば、それで上手く釣り合いが取れる。そういうことだと思っっているのですが、どうでしょうか？」にこりと微笑みかける。

我ながらとんでもない啖呵を切ったような気がしたが、もう後には引けない。

大王は、じつと春菜の目を見る。

「……そなた、何を言ったか分かっておるか？」

「はい。勿論承知しております。ですが、大王も私を試しておられるようでしたので、下手な小細工はなしに本音を申し上げようと思いました」

「では、我のもとに来て、そなたはこれからどうするのじゃ？そなたは、我が何か命じたとすればどうする？」

「それが何かによります。賛成出来ることで、私が力になれることであれば協力いたします。ですが、賛成しかねることでしたら、協

力するつもりはありません」

はつきりと拒否の言葉を口にする。

背中を冷や汗が伝うのを感じた。

大王は、何と返すだろうか、と不安に思いながらも出来るだけ堂々と見えるように背筋を伸ばして返答を待った。

じつと春菜を見る大王の目を見返して、どれ程の時間が経っただろうか。

とても長く感じたが、実際にはほんの一瞬の出来事だったのかもしれない。

不意に、くつと息を漏らす音が響いた。

と思うと、大王の口が孤を描いた。

静かだった部屋に、笑い声が響いて、ほっとして良いものか反応に困って、春菜は背中を丸めて笑う大王を見た。

「さすがじゃ、いや、その位でなければ逆に信じられぬ」

未だに引かない笑いの合間にそう言う、大王はもう一度くつと笑い声を洩らした。

言われた意味が良く分からず首を傾げるが、大王はそんな春菜の様子を気にすることなく言葉を続けた。

「そなたの言っていたことは、おおそ当たりじゃ。そなたが虚けならば、良いように丸めこんで手駒にしてやろうと思っていたが、とんだ期待外れじゃな。それもそうじゃ。虚けの訳がないことは、考えれば分かったであろうに。我こそ虚けじゃったわ」

「あの…」

会話にならず戸惑う春菜に手を振って黙らせると、大王は笑いを納めて春菜を見た。

「それで良い。協力出来ることだと思えば、協力してくれ。無理だと思えば、何もせずとも良い。だが、そちも言っておったが、有間とそちを不用意に近づけるのは、こちらとしては望んでいない。そちの住まいは宮中に用意させる。我も特に、そちに何かをさせたいと思った訳ではない。何かあれば協力を願うことがあるかもしれぬ

が、ゆるりと宮中で過ごせば良い。それだけで波風が立たなくなるであろう。そなたがいるだけで周囲の有間への恐怖や不信感も和らぐであろうしな」

言つて、大王はそれにしても、と感慨深げに言葉を続ける。

「そちの啖呵、なかなかの物じゃったぞ。大臣の連中に聞かせたら、何人が卒倒したであろうな」

「えっと、それは…すみません」

やはり無礼だっただろうか、と小さくなつて謝ると、大王は気にした風もなく、笑つた。

「何、謝ることはない。我も興味深かつた。春菜、今日は遅い。一度有間の屋敷に戻れ。近日中に宮の準備を整えて迎えをやろう。それと、宮中に来た際には、またゆつくりと話しをしたいと思います。そちの居た後の世のちの話しとやらも聞きたい。またよろしく頼むぞ」

快活に笑つと、大王は手を叩いて人を呼んだ。

「有間をここへ」

現れた人に、そう命じ大王はもう一度春菜に向き直つた。

「すぐに有間もここへ来るだろう。共に帰るが良い。ところで、春菜は年はいくつじゃ？」

「十五です」

「十五か…」

何やら考え込んだ大王に首を傾げたのと、有間が戻ってきたのはほぼ同時だった。

「おお、有間」

それに気付いて思考の糸を途切れさせたのか、大王が顔を上げた。

「お話しはもう終わられましたか？」

少し心配気な表情の有間はちらりと春菜に視線をやってから、大王にそう問いかけた。

「ああ。なかなか面白い娘じゃ。気に入った。数日後には春菜の宮を宮中に用意させる。すぐに移動出来るように支度を整えておけ」

「宮中にですか？」

予想していたのか、有間は驚いた様子は見せなかったが、かすかに表情が険しくなった。

「そうじゃ。明日詳しいことを伝える。お前はもう一度明日の午後にでも来い」

「……承知、いたしました」

険しい表情のまま、有間はそう答える。

「もう二人とも下がって良いぞ。夜遅くに御苦労であつたな」

言つて、大王はすぐに立ち上がると、部屋を出て行った。

それを見送つても有間は相変わらず険しい表情のままで、珍しい表情に春菜は戸惑いつつ、彼の後について宮中を後にした。

34、試し（後書き）

予定より早く書きあがったんで、投稿しちゃいます。
次も、早く出来るように頑張ります。

やっぱり間あけない方が書きやすくはあるんですよ。
がんばります。

35、大切なモノ

何度目かの溜息に小さくなつて、春菜は有間の表情をうかがつた。

「まずかつた、かな？」

そつと尋ねると、普段の柔らかい表情からは一転して呆れたような視線を向けられた。

「それは、そうに決まっている」

「そつだよね…自分でも、なんであんなに正直に言つたのか不思議で…」

「馬鹿正直にも程がある。もう少し言い様がなかつたのか？」

有間は珍しく怒っているのか、しきりに溜息をついている。

「叔母上も、人が悪いが…春菜も春菜だ」

帰る道すがら、大王と話した内容を掻い摘んで説明して以来、有間はずつとこの調子で、今更ながら春菜も大それたことを言つてしまつた、という実感を得ていた。

「叔母上が春菜を試そうとしたからと言って、何も真正面から受けて立たずとも、もう少し上手くかわす方法もあつただろうくに…」

「そつ言つまどろっこしいやりとりには慣れてなくて…。それに、最初にしっかりと振舞わないと、後で困つたことになるような気がして」

「それもそつだが…」

まだ納得いかないのか、有間は厳しい表情を崩さなかつたが、やがて諦めたように一つ頭を振つた。

「まあ、この時代の常識に囚われることがないのは、春菜の長所でもあるしね。もう終わつたことを言つても仕方がない。遅くなつてしまつたし、今日は休もう」

そつ言つて、お休み、と言つ言葉を残して、有間は屋敷の奥へと消えて行つた。

春菜は出迎えに出てくれた八菜女の後について、彼女用に、と宛が

われた離れへと向かった。

「謁見はいかがでしたか？」

足元を明かりで照らしながら、八菜女は柔らかな声音で尋ねてきた。
「うーん、ちよつと言いすぎちゃったかもしれない…」

口元を袖口で隠しながら、八菜女は上品に笑い声を漏らした。

「何やら、有間皇子がお困りのようでしたね。でも、大王は春菜様を気に入ったとおっしゃっていたのではないのですか？」

「仰ってはいたけど、ちよつとね…」

言葉を濁す春菜をそれ以上追及せずに、八菜女は小首を傾げた。

「そうですか？大王はどのような方でしたか？」

話題を変えてくれたことにほっとして、春菜は大王の姿を思い浮かべた。

「綺麗な方だった」

「有間皇子の叔母君ですものね。さぞ美しいことでしょうね」

言って、八菜女はうつとりとしたような表情を浮かべた。

「でも、有間とはあんまり似てなかったかも…。雰囲気が全然違ったから。堂々としていて、厳しさも兼ね備えているような風貌だったから」

「国を統べるお方ですものね。きっと、玉依姫にも似ていらっしやるのでしょうね。叶わないとは思いますが、一目で良いのでお目にかけたいものですね」

「お会いしたいものなの？やっぱり」

そう尋ねると、大きく頷く八菜女にそんなものなのか、と思い先ほどまで一緒にいた大王の姿を思い浮かべた。

「玉依姫の子孫ですもの。もちろん有間皇子もそうなのですが、そのような神聖な血筋に連なる方がどのような方か、気になるものはありませんか？」

熱心にそう語る八菜女の顔は、純粹な憧れと、畏怖の念に染められていた。

大王との謁見の翌日、昼過ぎのことだった。

「姫様っ！」

久しぶりに耳にする高い声とともに、背中に軽い衝撃が走った。

「姫様っ！」

今度は、突然目の前に上から少女が降ってきた。

と、思うと飛びつくようにして春菜に抱き付いてきた。

「かなた、こなた、どこに行っていたの？」

数日ぶりに現れた二人の少女に驚いて声をかけると、二人は春菜から少し離れてから春菜に見覚えのある荷物を差し出した。

「これ…どうしたの？」

「取りに行つてのー」

「二人で行つてきたのー」

差し出された細い二つの小太刀を受け取って、春菜は目を丸くした。確かにそれは、時彦の家に置いてきたはずの小太刀だった。

「姫様の、大事なモノだから」

すつと真剣な表情をして言う二人に春菜は、言葉を失った。

「だから、取りに行つたの」

それで、ここ数日二人の姿が見当たらなかったのか、と納得する。普段から、すぐ傍にいるかと思えば、しばらく姿が見えずにふらふらとしていることも多い二人だったが、どうしてか二人には春菜の居場所が分かるらしく、必ず戻って来るため、姿が見えないことをあまり心配してはいなかったのだが、まさか退魔師の村まで行っていたとは思わずに、まじまじと手にした小太刀を見つめた。

「それとねー」

「これにも姫様の気配がついてたから、持ってきたのー」

もう一つ、差し出された荷物に気付いて、春菜はさらに驚いた。

「これ、私の持ち物だって、分かったの？」

「うん」

「姫様の気配はすぐに分かるよー」

通学バックを差し出されて、春菜はさらに目を丸くしながらそれを受け取った。

「それ、姫様でしょー？」

相変わらず交互に喋りながら二人の言葉は重なることはない。

「そうだよ。どうもありがとう」

鞆の中身を確認して、微笑みながら礼を述べると、二人はくるくると春菜の周囲を飛び回った。

鞆を脇に置いて、春菜は改めて小太刀に向き直った。

「ねえ、これ私のつて言つてたよね？」

そつと、小太刀を鞘から抜きながら尋ねると、かなたとこなたは興味深そうにそれをじつと覗き込んできた。

「そうだよー」

「姫様のだよー」

二人は何が可笑しいのか、けらけらと笑いながら、言葉を紡ぐ。

「どうして、これは私の物なの？」

「姫様が創ったモノだから」

「私がつくった？」

つまり、生まれ変わる前、前世の私が造ったと言いたいのだろうか、と首を傾げた。

「ずっと前にね、姫様が創られたの」

「だからね、その子達の主は姫様あめじしかいないの」

相変わらず二人の説明は要領を得ないが、春菜もこのやり取りに付き合つのに慣れてきていた。

「どうやって造ったの？」

「炎から」

「水と風から」

春菜が首を傾げたのを見て、分かっているかと思つたのか、二人はにこりと笑う。

「この子はね」

言つて、こなたは黒地に銀の装飾と、空色と乳白色の玉が綴られた

刀に手を添えた。

「水と、風から創られたの」

「この子はね」

今度はかなたが、黒地に金の装飾と、桃色と乳白色の玉が綴られた刀に手を添える。

「炎から創られたの」

二人は顔を見合わせると、くすりと笑いあう。

それが、年齢に似合わず妖艶で春菜は思わず目を奪われた。

「だからね、この子たちは双子なの。二つで一对の小太刀」

「本質は、相反するモノだけど、だからこそ、背中合わせの一对」

「それを、私が作ったの？」

そう確認すると、二人はそろって頷いた。

「姫様が、ご自分のために創られた護り刀」

「一番最初にお創りになられたの。鏡と、勾玉と、刀と一緒に」

ね、と二人で顔を見合わせると、二人は言葉を続ける。

「とつても、大事なモノなの」

「この世に二つとない宝物」

だから持っていてね、と言われて春菜は気圧されるようにして頷いた。

「春菜様」

突然背後から掛けられた声に、驚いて首を竦めるようにしてから、春菜は慌てて振り向いた。

「有間皇子がいらっしゃいました。お通してもよろしいでしょうか」

几帳の裏から響いて来たのは、八菜女の声で春菜は慌ててどうぞ、と声を掛けた。

その言葉が終わるか終わらないかで、すぐに有間が部屋の中へと入ってきた。

「皇子ー」

「皇子だー」

春菜の首に抱きつくようにしていた二人が、揃って声を上げるが、当然ながら有間は気付く素振りもない。

「春菜？どうかしたかい？」

おかしい表情をしていたのか、有間が訝しげにそう尋ねて来て、春菜は慌てて首を横に振った。

それを怪訝そうに見て、有間は春菜の手元に視線を移した。

「春菜、それは？」

今度こそ、はつきりと表情を険しくして、有間が低い声を出した。

「あ、これ？今、こなたとかなたが持つて来てくれたの？」

なぜ、と重ねて低い声で問われて、春菜は少し戸惑って、首に纏わりつく二人に視線を向けた。

「私の物だから、って。大事な物なんだって」

まだ、詳しい事を聞き出せずにいたため、取り敢えず今の時点で分かっていたことを、そのまま伝えた。

それに何を思ったのか、有間はさらに表情を険しくした。

「少し、見せてもらっても良いかい？」

「良いけど……」

ついぞ見せない厳しい表情に、春菜はおずおずと手にしていた刀を有間に差し出した。

そつと壊れ物を受け取るようにして、小太刀を手にすると、有間は真剣な眼差しを刀身に向けた。

「綺麗な、刀だな」

ぼつりと、そう呟くと、有間は春菜に小太刀を返した。

「装飾も素晴らしい。刀身も美しい」

何か誤魔化すような有間の笑顔に、それ以上追及出来ずに、春菜は小太刀を受け取る。

「大事にした方が良い」

それにこくりと頷いて手の中の小太刀に改めて視線を落とした。本当に美しい小太刀だった。

装飾品だと言われても、納得出来る美しさだ。

思わず見惚れていると、有間から名前を呼ばれて我に返った。

「今日、叔母上に会ってきた。明日には宮中に移るように、このことだった」

それにはっとして頷く。

「それと、馴染みの童わらわが采女うねめを付けても良い、とのことだったが、八菜女を連れて行くかい？」

「え、良いの？」

思わず声を上げると、有間の後ろに控えていた八菜女がうつすらと微笑んだのが目に入った。

「あ、でも、八菜女は？私に着いてきても良いの？勝手も違うだろうし、嫌だったら本当に遠慮せずに言っただけです」

「私は構いませんよ。春菜様と共に宮中に上がれるのでしたら、この上ない幸せでございます」

につこりと、晴れ晴れとした笑顔を見せる八菜女に春菜もまた笑顔を返した。

35、大切なモノ（後書き）

更新、遅くなってしまってますみません。

しかも何にも進展していないという……………

本来なら、この章はもっと先のあんなことやこんなことのはずだったのに…。

いざ書くと文字数が増えて増えて。

次回は、有間過去編…にたどり着きたい。

けれど無理かなあ。

って感じです。

頑張ります。

36、宮中

有間は少し大げさではないか、と思うほど春菜のことを心配していた。

何か言ってきたり、そう言う行動は起こさないものの、共に新しい春菜の住まいへと向かう道中でもずっと心配そうな表情で何やら考え込んでいたようだった。

大王と有間が会った時にでも、何かあったのだろうか、と春菜も案じていたが、有間が口に出そうとしないことを追及するのも悪いような気がして、結局なにも聞かないままにしていた。

春菜に用意された宮は、有間の離れよりも大きく豪華なものだった。移動と言っても、実際に春菜は体をただ移動させただけで、身の回りの物や調度品はすでに用意されていたり、有間が用意してくれたものを、童達が運んだりしてくれているため、疲れることもなくゆつくりと出来た。

有間は、作業の様子を見て来ると言っただけ戻ってこない。

何も働かないことに、罪悪感もあるが、何かしようとすれば、恐縮されて逆に相手を困らせることになることは、すでに理解していた。それにしても、と春菜は一つ溜息を落とした。

宮中に入ってしまったと言うことは、今までよりも行動を制限されると言うことになる。

それはつまり、この時代の女性の習わしにある程度従わなければならないことを示しているのだろう。

これでは、帰るための方法を探すこともままならない。

方法を探すと言っても、春菜には検討もつかないため、何をどうすれば良いのかさっぱり分からないのだが、宮中に居ると言うだけで、何やら囲われてしまったように感じて少し不安になっていた。

「春菜様」

八菜女は相も変わらずたおやかな仕草で春菜の前に座る。

自分などより、よっぽど良家のお姫様然としていると感じながら、その所作を眺めていたせいだろうか。

どうかいたしましたか、と不思議そうに問われて春菜は首を横に振った。

ありまのみこ
「有間皇子と離れてしまうのは、寂しいですか？」

からかうような笑みを浮かべて、八菜女は春菜の目を覗き込んでくる。

この時代においても、この年頃の少女がこう言った話題を好むのは、共通のことかもしれない、などと春菜は人ごとのように考えて、苦笑を洩らした。

「きつと、こちらへも通って来てくださいますよ」

春菜の苦笑をどうとったのか、八菜女は慰めるような口調でそう告げる。

「ええつと」

どう言おうかと思って、春菜は続く言葉を見失った。

実際に、春菜と有間は八菜女が思っているような恋仲ではないのだが、そこを否定してしまつて良いものかと疑問に思つたのだ。

実際問題、春菜が有間に会うとすれば、つまりはそのような有間が春菜の元へ通つて来る、と言うこの通い婚制度はとても魅力的なのだ。

そう言った目的ではないにしろ、春菜の詳しい事情を知っていて、なおかつ朝廷で力を使える者と言う同じ立場から有間と協力すべきことも多いだろう。

何より、春菜にとってここで頼れる者として思い浮かぶのは有間の他にはいない。

「なんて言うかさ、私と有間は、そんなんじゃないんだよね」

しばしの逡巡の後に、春菜は口を開いた。

「違う、と申しますと？」

小首を傾げる八菜女にちらりと視線をやつて、春菜はどう説明しようか、と思ひながら言葉を選びながらゆっくりと話した。

「有間は、私を助けてくれただけで。私の立場を考えて、有間は否定しないでいてくれたんだけど、実際には私一度も有間とそう言う関係になったことはないんだ」

「え？ですが、寝所を共にされていたのでは…？」

「うん。それは、そうなんだけどね。別にしてくれ、って有間が言ったら、私の立場がなくなる、と思ったみたいで、一緒の部屋で寝てはいたけど、手は出されなかったと言うか…」

八菜女は目を丸くして、春菜の言葉を聞いている。

「それはまあ…殿方として、どうなのでしょう…。すぐ隣でこんなに美しい方が寝ていらっしゃると言うのに、見向きもされないなんて…」

真剣な表情で、八菜女はそう呟く。

「え？八菜女？」

何やら雲行きが怪しいことに、春菜は慌てて八菜女の名を呼ぶが、八菜女はそれに気付く様子もない。

「昔から有間皇子は、特に姫方と噂されることもありませんでしたが、女子がおなこお嫌いなのでしょうか？尊い血筋の方ですし、血を残すことも大事なお勤めでしょうに…」

嘆かわしい、とても言いたげに八菜女は一人で呟く。

「春菜様も、それではあまりに不憫ではありませんか。なぜそのような態度を取られるのでしょうかね」

「え？私？」

突然、自分の名前が飛び出したことに驚いて聞き返す。

不憫と言われるような出来事があったらどうか、と首を傾げる。無理強いをされたでもなし、特に何も不憫と言われなければならないようなことはなかった、と春菜は記憶している。

「不憫、って何が？」

本当に分からずに首を傾げる。

「え？春菜様は、有間皇子をお慕いしていらっしゃるのでしょうか？」
まるで当然のことのようにそう言う八菜女に、春菜は目を丸くした。

「私が？有間を？」

驚いて聞き返すと、八菜女はこくりと頷いて、違うのですか？と逆に聞き返された。

「有間のことは人としては好き、だけど…」

人としては確かに好きだ、と春菜は一人頷いた。

ただ、それ以上の感情を持っているか、と聞かれると、違うような気がする。

「八菜女、あまり春菜を困らせるな」

柔らかい声に驚いて顔を上げると、几帳の陰から有間が苦笑を浮かべながら姿を現した。

まあ、と声を上げて八菜女は慌てたようにして頭を下げた。

顔が熱くなるのを感じて、春菜は有間の顔をちらりと見上げた。

「ずっと、聞いてたの？」

「そうではないよ、今来た所だ。何やら春菜が返答に窮しているようだったからね」

違ったかい、と柔らかな笑みを向けられれば、それ以上言うのは墓穴を掘ることになりそうな気がして、春菜は黙り込んだ。

「皇子、ずっと居たよー」

だから、もうこの会話は終わりにしよう、と思った時だった。

すぐ隣から、呑気な声が聞こえてきた。

「ねー。ずっと几帳の陰にいたよねー？」

そうなの、と視線で尋ねると、二人は揃ってこくりと頷いた。

さらに顔が熱くなった気がして、春菜はそつと頬を手で押さえた。

特に、誤解されるようなことは言わなかったはずだ、と自分の発言を思い出して確認する。

よし、ない、と自分に言いきかせて、じろりと有間に視線を向けた。

「有間。ずっといたでしょ」

疑問系ではなく、あえて断定系で言った。

「誤魔化さないでね。知ってるから」

憮然とした表情でそう言うと、諦めたように有間は苦笑を浮かべた。

「気付いてたのかい？声をかける機会を見失ってね。自分の噂話を
されている時に声をかけるのは、どうにも気まずい」

肩を竦めるようにして、有間は春菜の目の前に腰を下ろした。

「八菜女、あまりおかしな話を春菜に吹き込まないでくれるかい
？」

「そうよ。ただ有間は女の人に興味がないだけよね？」

澄ましてそう言うと、八菜女の動きが停止した。

びっくりしたように、春菜を見つめる彼女を横目に見ながら、同じ
く驚いたように目を見開いた有間に、ね、と微笑みかけた。

「私は良いと思うよ？男同士でもね。そういうのも一つの個性じゃ
ない？それに、有間は綺麗な顔してるから、男同士でも絵になるし。
大丈夫、誰にも言わないから安心して」

内緒ね、と八菜女に目配せすると、八菜女は心得たとばかりに神妙
な表情で頷いた。

「春菜、それでは八菜女が誤解をしてしまう」

困ったような笑みを浮かべて有間は溜息を吐いた。

「え？春菜様？それでは…」

「八菜女、誤解だよ。私に、男色の趣味はない」

有間に直接声をかけられて、八菜女は頬を朱に染めた。

「春菜も、適当なことばかり言わないでくれ。それでも注目を集め
る立場だからね」

苦笑とともに言う有間は、特に怒った様子もない。

「じゃあ、盗み聞きのような真似は止めてよね」

そつばを向いてそう言うと、分かったと宥めるように頭の上に手を
置かれ、幾度かそれが上下する。

「でも、確かに春菜の元に通うのは悪くない」

笑みを納めて真剣な表情でぽつりと有間はそう呟いた。

それに、八菜女は袖で口を多いさらに顔を赤らめた。

「ね、私も思った。ちょうど良いよね」

八菜女のそんな様子も目に入らず、有間も同じことを考えていたの

か、と嬉しくなつて、春菜はにこりと微笑んだ。

「人目もあるから、昼間にあまり頻繁に私がここを訪れると、良くないだろうからね。夜ならば上手くすれば衆目も集めないだろう。噂になると逆に目立つことになるかもしれないが…」

考え込む有間に、春菜もまた黙り込んだ。

あまり、宮中の機微は分からない。

有間の判断に任せるべきだろうと思つたのだ。だが、そこですぐ隣で二人で遊んでいるこなたとかなたを目に止めて、春菜ははたと思いついた。

「ねえ、手紙でも良い？」

「手紙？だが、他の者の手に渡つた時のことを考えると…。書簡の頻繁なやり取りはいらぬ憶測を呼びそうだ。恋人同士の歌のやり取りは良く行われているが、大王の目は誤魔化せないだろうし…」

「こなたとかなたに頼んだら、確實だと思つよ」

自分達の名前が会話に出てきたことに気づいて、二人は何やら楽しそうに春菜の回りに纏わりつく。

「ね、出来るよね？誰にも見つからないように、手紙を運んで欲しいの」

そう聞くと、二人はこくりと頷いた。

「出来るよー」

「絶対に見つからない！」

嬉しそうに二人は宣言すると、くすくすと笑い合う。

なんとなく、幼い見た目が不安感を煽らないこともない。けれど、まがりなりにも神様だ。

人間に見つかるようなヘマはしないだろう。

「出来るって」

二人の言葉を伝える。

「どうかした？」

奇妙な表情を浮かべる有間に首を傾げた。

「いや…神に、そのようなことをさせるのは、どうにも…」

渋る有間の周りを、かなたとこなたがくると舞った。

「かなたとこなたは、姫様を助けるの」

「姫様が望むなら、かなたとこなたは、何でもするの」

有間には聞こえていないのだろうが、二人は有間の周囲で言いながらくすくすと笑った。

「大丈夫、やってくれるって」二人の笑顔に、春菜もつられて微笑んだ。

「…分かった、ではそうしよう」

渋々、と言った様子で有間はようやく同意した。

それにしても、と八菜女が言ったのは、有間が帰ってしばらくした頃だった。

「本当に驚きです」

呆けたような表情で、八菜女はどこともない空中をぼんやり見つめている。

「ここに風の神がいらっしゃるなんて…」

本当に、この時代の人々は信心深い。

そんなことをぼんやりと思いながら、春菜はすぐ横でじゃれあうこなたとかなたに目をやった。

玉依姫、という神話上の神の血筋に連なる。

ただそれだけの理由で、大王や有間を神の血に連なる人々として、尊敬と畏怖の念を向けていたこの少女に、身近に本物の神がいると言う事実がどれほどの衝撃を与えたのか、春菜には想像もつかない。ほう、と深い息を吐くと、八菜女は頭を軽く振った。

「でも、驚いてばかりもいられませんね。しっかりしないと、勤めが果たせませんものね」

にこりと笑った八菜女は、まだ少し表情は固いものの、いつもの彼女だった。

36、宮中（後書き）

遅くなりました。

35話です。

有間過去編なんて、嘘っぱちもいいところです。

辿り着けませんでした。

おかしいなあ…。

ところで、この宮、板葺の宮って呼ばれてるらしいです。
珍しい板葺きだったから。

安直な感じの名称ですよ。笑

37、面会（前書き）

大変遅くなりました。

37、面会

昨夜から降り始めた雪は、翌朝には景色を白一色に塗り替える程に積もっていた。

それでもまだ、降り止む様子もなく、空からは大きな雪が舞い降りてきている。

春菜は、御簾を上げてその様子を見るともなく眺めていた。

足元から這い上ってくるような冷氣の中、炭櫃すびつに両手をかざす。じんわりとした温かさが手のひらに当たり心地良い。

「春菜様」

八菜女の声に現実に取り戻されて、春菜はようやく銀色の世界から視線を外した。

「文が届いております」

八菜女は手にした文を春菜に差し出す。

「八菜女、読んでくれない？」

それをやりわりと手で押し戻しながら春菜がそう言うと、八菜女は少し迷うようにしてから、文に目を落とした。

「誰からの手紙なの？」

この時代の文字は、春菜にはとても文字には見えず、まともに読むことも儘ならない。

幾度か苦戦して、春菜は最近では、読むことを諦めていた。

「大王おおきみからでございます」

「大王から？」

何かあったのだろうか、と首を傾げると、すぐに八菜女が文の内容を読み上げた。

「…要するに、顔合わせがあるってこと？」

確認すると、八菜女はこくりと頷いた。

「五日後にあるようですね。葛城皇子かつらぎのみこと大海人皇子おおあまのみこもいらっしゃるようですね」

葛城皇子とは、中大兄皇子のことだろう。

確か、以前に一度有間がそのようなことを言っていたのを思い出して、春菜は一人納得した。

「大海人皇子って？」

「葛城皇子も大海人皇子も、大王のご子息です。大海人皇子が葛城皇子の弟君であらせられます」

「中大兄皇子が、天智天皇でしょ…兄弟って天武天皇だっけ？」

遠い歴史の授業を思い出しながら呟く。

天智と天武、名前が似てるのは、兄弟だからだろうか、と授業中にぼんやりと思つた記憶がある。

「春菜様？どうかされましたか？」

「うっん。大王の息子さんって、二人だけ？」

「はい。そうです。姫君も一人おられますが、皇子はお二人だけですな」

今の大王が誰なのか、春菜には見当もついていない。

中学の歴史の授業で習うほど名の残った天皇ではないのかもしれないが、それでもあの大王は天智天皇と天武天皇と言う、千年以上後の世にまで名の残る重要人物の母親と言うことになる。

「有間は？来ないのかな？」

それに八菜女は困つたように笑つた。

「そうですね…有間皇子は微妙なお立場なので…」

「そっか…そうだったね」

それを言えば、春菜も微妙な立場なのだろうが、八菜女はそこまで言及することなく柔らかに微笑んだ。

乾いた音が、からからと耳を打った。

有間は、風もないのに揺れて音を奏でる拍子木に目を止めると、急いで人払いを頼んだ。

数日前に鳴子を吊り下げるようにしてから、初めてこれが音を奏でた。

微かな緊張を覚えながら、部屋の奥に進む。

腰を下ろすと、どこからか風に舞うようにして、文が手の中に飛び込んできた。

どこから現れたのかも判然としないそれに驚くも、有間はゆっくりとそれを開いた。

したためられていた内容に、微かに眉をひそめてから、有間は小さく溜息をついた。

大王が彼女の皇子達と共に春菜と会おうとしていることは、有間も知っていた。

けれど、これほど早く大王が動くことまでは予想していなかった。当然のように有間に声がかけられることはないが、そこまで有間は期待してはいなかった。

「返事を書きたい。よろしいか？」

どこに向かって話しをしたら良いのか分からず、結局文に目を落としながらそう言う。

間を置かずに、また鳴子が乾いた音を鳴らした。

是の時には、一度、否の時には間を空けて三度鳴らす、という取り決めになっていた。

続く音がないのを確認して、有間は急いで紙に筆を走らせた。

普通、女人との文のやり取りと言えば、趣向を凝らすものだが、出来る限り簡素に、必要なことのみをしたためるように心がけた。

八菜女当たりが目によれば、あまりの赴きのなさに呆れるような文だった。

春菜が、文に対して特別な思い入れがないことは、有間も理解していたが、これほど簡素な文に抵抗がない訳ではない。

しかし、余計な装飾を入れたところで、春菜は特に気に留めもしないのだからことも分かっていたので、あえて華美に飾ろうとは思えなかった。

書いた内容を確認して、文机の上に文をそつと置く。

「よろしくお願いいたします」

それに反応するかのように、鳴子がかからかと音を奏で、ふと視線を落とすと、もう文はなかった。

見えもしない神を見送るように、ぼんやりと外を見つめてから、有間はゆつくりと立ち上がった。

春菜に関することは、気掛かりなことがあり過ぎる程にある。

心穏やかに聞くことの出来ない内容のものもあった。

有間の力は朝廷では諸刃の剣だ。

権力にしろ、有間のみに許された力にしろ、朝廷で影響力を得るために使えば使うほど、有間の立場は危うくなる。

有間の基盤が支えることの出来る限界以上の力を有間は手にしていないからだ。

後ろ盾がない状態で、力を使えば、それだけ自滅を早める。

それが分らないほどに有間は愚かではなかった。

有間に出来ることは限られていたが、春菜の意に沿わない結果を招くことはしたくない。

春菜をここに招いたのは有間自身だ。

有間にはその責任がある。

「春菜が望むのならば、それも良いかもしれないが……」

ぼつりと呟いて、有間は頭を振って、余計な思いを振り払った。

つい先日大王が有間に告げた言葉が脳裏をよぎる。

それを決めるのは、春菜自身だ。

大王でも有間でもない。

春菜が女であり、この世界に居続ける限り、それは避けて通ることの出来ないものなのかもしれない。

顔合わせの席は、非公式のものということだった。

それ程構えずとも良い、と大王からの文には書いてあったそうだが、それでも春菜にとってはゆるりとした気分で臨めるものではなかった。

あまり人見知りをする性質ではなかったが、皇族だ、と思うと何を話したもののか、考えつかない。

そもそも、春菜にはこの世界の一般常識が大きく欠落している。

時彦との生活で、少しは分かってきたように思っていたが、貴族の生活と退魔師の生活では相違点よりも共通点を見つける方が難しいかもしれない。

挨拶も出来ず、立ち居振る舞いも出来ずでは、ゆるりとしろ、と言われてもそうそう出来るものではない。

いつもより、念入りに結い上げられた髪に、いつもよりも綺麗だがさらに動き辛い着物。

とにかく、普通に振舞うだけで精いっぱいな状態だった。

「春菜」

几帳を回り込むようにして、部屋に入ると、一番奥に腰を下ろしていた大王が待ち構えていたように声をかけた。

「良う来た」

空いている場所に春菜もゆつくりと腰を下ろす。

部屋にいるのは春菜を除いて四人。

知っている顔は大王のみだ。

「これが春菜じゃ。噂は聞いておろう」

大王は、自分の斜め前右と左に座る二人に向かって春菜を紹介する。

左側の男が、軽く目礼をするのに、春菜も小さく答えた。

右側の男は惔然とした表情で、眉一つ動かさず、じろりと春菜を見ただけだった。

「春菜、これは上の息子の葛城かつらぎじゃ」

言って、大王は無愛想な男を指す。

改めて葛城皇子を見ると、皇子も春菜を見ていたのか、一瞬だけ視

線が交わった。

鋭い視線に、思わず目線を外すと、それに合わせたかのように、大王がもう一人の男を紹介した。

「これは次の息子の^{おおあまのみこ}大海人」

大海人皇子は、人好きのする笑みを浮かべて春菜に向かって軽く頷く。

少しだけ安堵して、春菜もまた微笑み返した。

「これは、健じゃ。その葛城の息子で、八つになる。のう、^{たけるのみこ}健皇子」

大王のすぐ隣にちょこんと座る男の子は、どこか場違いな印象を受ける。

葛城皇子の息子と言うが、武人然とした父親にはあまり似ていないようだった。

八つにしては少しばかり体が小さく、表情も顔もあどけなさが抜けずに幼い。

健皇子は、春菜のことが分かっているのかいないのか、落ち着かない様子で、大王の顔を見ている。

綺麗な顔をした子供だった。

日に当たっていないのか、真っ白な顔で、女の子かと見まごうほど愛らしい顔立ちをしている。

肢体は細すぎるほどに細く、儂げな印象を人に与える。

「それ程気負うこともない。童もいる。内輪の席だと思ってくれて良い」

あくまでにこやかにそう告げると、大王は健皇子の顔を覗き込んだ。健皇子はそれに安心したように、笑顔を浮かべる。

その笑顔に、春菜まで緊張を解かれた。

「春菜は、後の世から来たと聞いた」

低い声でそう問いかけてきたのは、葛城皇子だった。

無骨な印象を受ける彼は、体躯も大きく武人のように見える。

いかめしい顔のまま、葛城皇子はじつと春菜を探るように見て来る。

年の頃は三十、といったところだろうか。

「後の世とは一体どのようなものだ？」

愛想の欠片もないような無然とした表情とは裏腹に、ただ単純に好奇心から出た問いのようだった。

それに大王も大海人皇子も身を乗り出す。

「それは、私も気になる」

大海人皇子にもそう問われ、春菜は少し考えた。

どのようなものだ、と聞かれて一口で説明出来るものではない。

そもそも何から話したら良いのかも分からない。

「そう、ですね。私はこれから千五百年ほど後の時代から来たことになります」

「千五百とな」

大王は息を飲んでそう繰り返す。

「はい。こことは多くのことが違います」

違い過ぎて、どこをどう説明したものか分からないほどだ。

「町の様子も、人々の様子も、服装もとても違います」

そう、とても違うのだ。

豊かで、便利で、安穩と自分の居場所を守っていた世界。

生命の輝きには乏しくとも、温かな愛情が春菜を包んでいた。

「本当に、とても……」

何をどう説明したものか、と迷って言葉を探していたが、生まれ育った場所を思い出すにつれ、違った理由で言葉が出なくなっていく。まだ、郷愁に浸りながら生まれ育った世界について話すには、春菜の傷は新しかった。

鮮明に思い出すに連れ、寂しさと心細さが、ちくちくと胸を突き刺す。

とうとう、何もしゃべれなくなってしまった春菜を見て、大海人皇子が優しく微笑んだ。

「無理をせずとも良い。まだ思いたすのは辛いだろう。無神経なことを聞いてしまったかもしれない。すまない」

「いえ、無神経だなんて、そんな…」

そもそも、問いを発したのは、葛城皇子だ。

大海人皇子が謝ることではない。

「少し、思いだすと懐かしくて、切なくなってしまっ…」

「無理に話さずとも良い」

大海人皇子は、安心させるように、ふわりと笑みを浮かべた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4987b/>

千草の花

2010年10月21日22時30分発行